

木村英吉譯

聖金口イオアン
全集第五卷

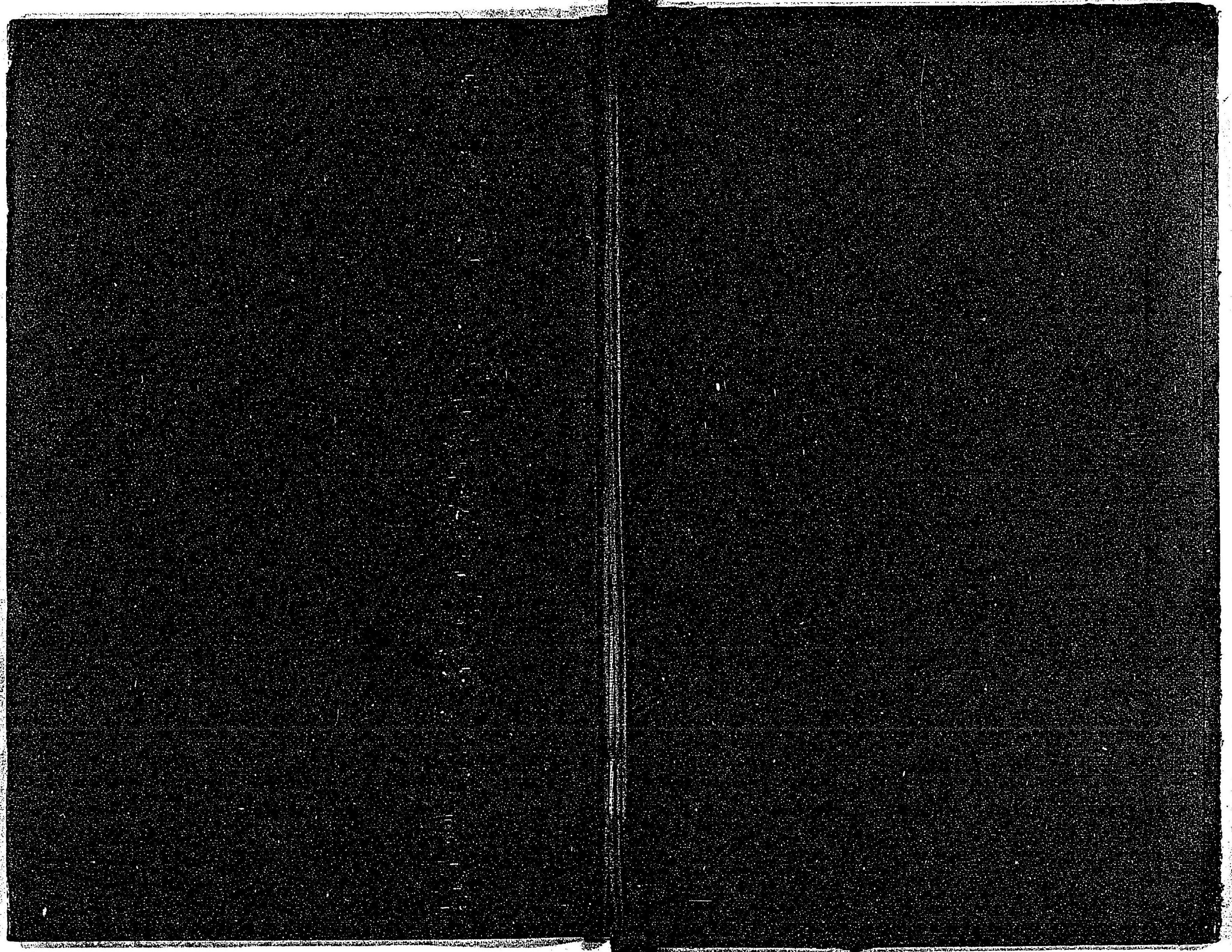
聖詠講話

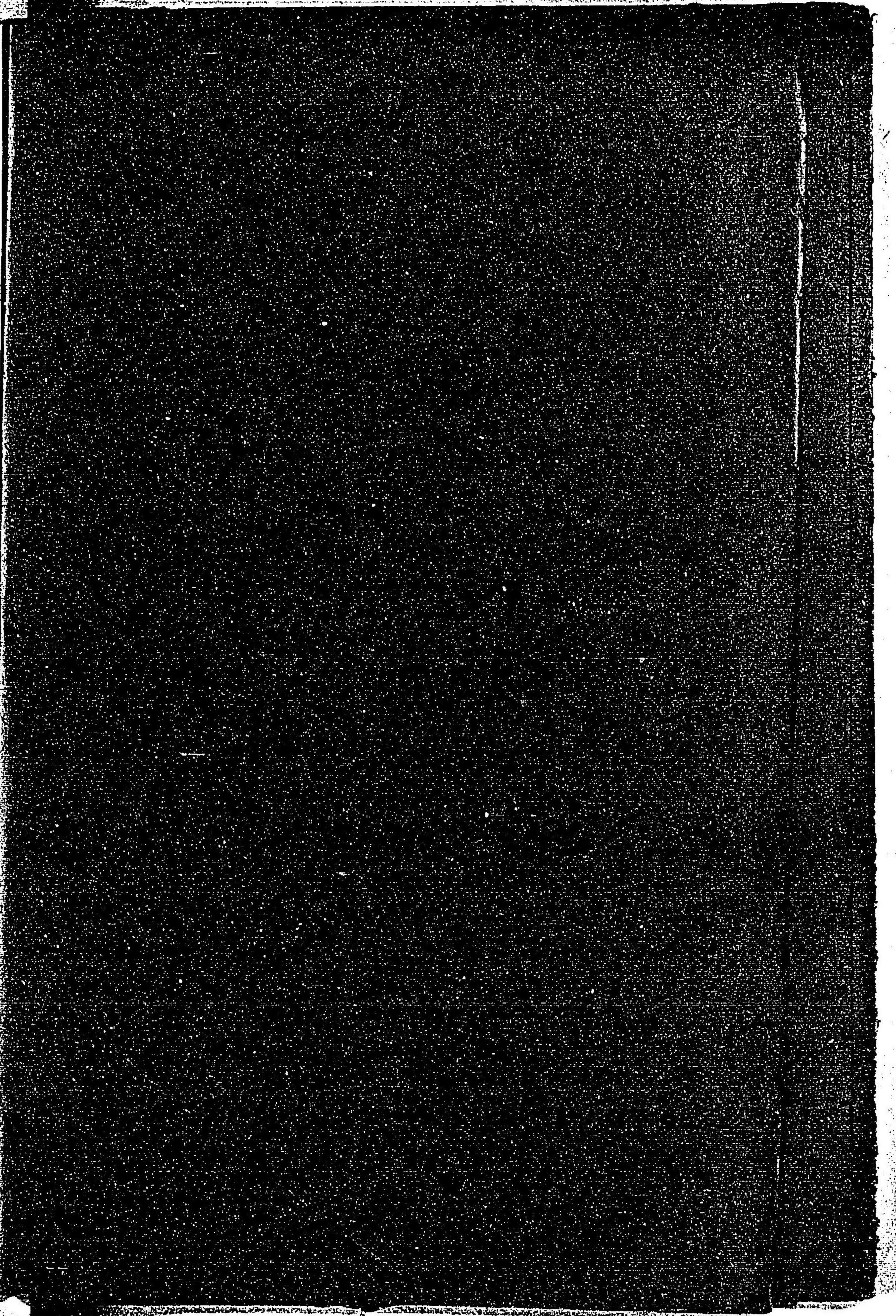
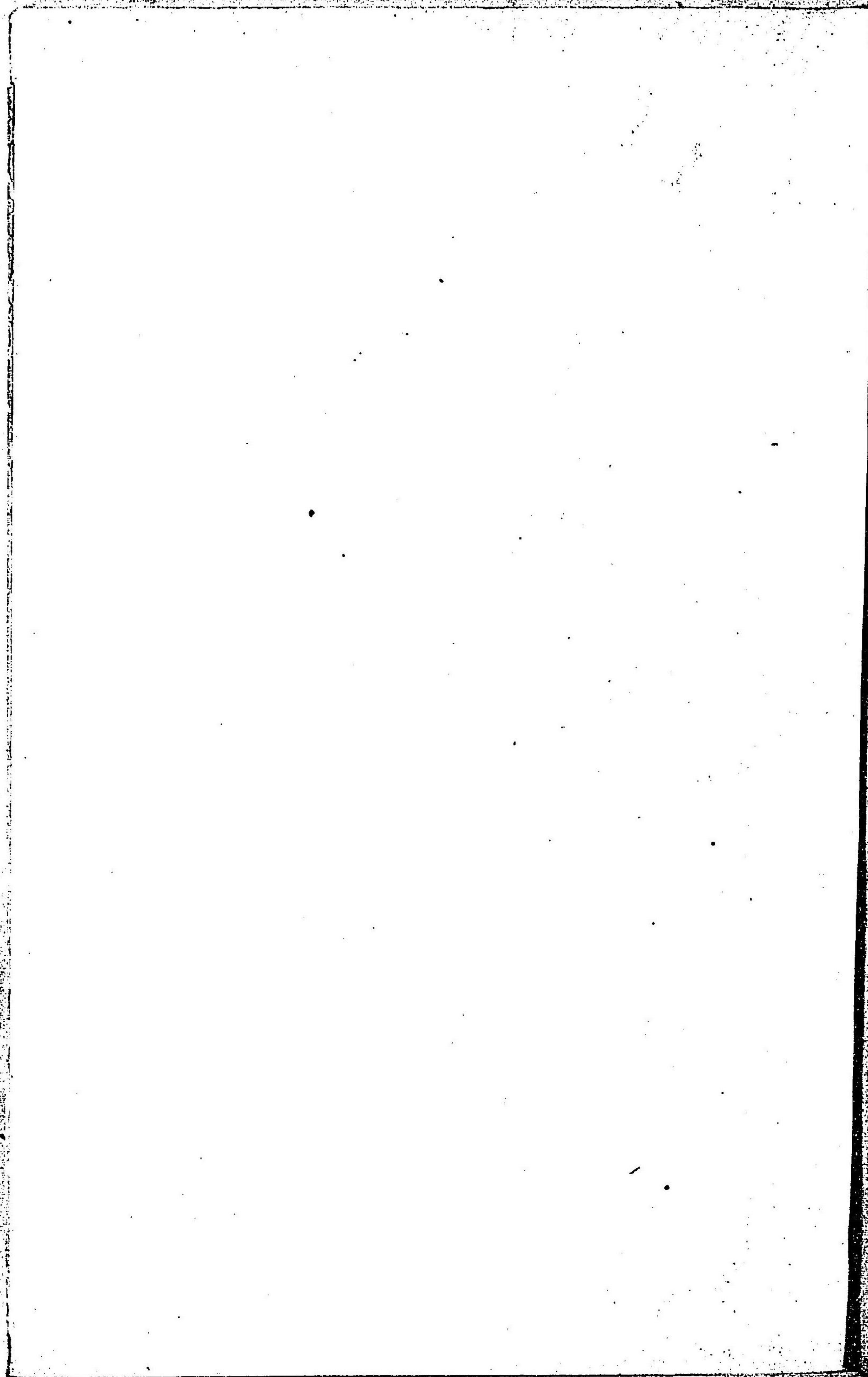
中編

正教會編輯局

267

535





聖金口イオアン全集第五卷 聖詠講話原序

モイセイ及びその後嗣者イエスオウノの後所謂イス
 ラの判官の後サウルイブライリ人の王となり其廢さる
 神は善行ありて義なる王預言者を起せり彼は聖神の感應
 よりて其生國の言語に特有にして精緻なる言を以て録され
 たる百五十篇の聖詠書を編めり而して此書は多様の音聲種
 々なる樂器と舞および附歌と偕に巧妙なる調子にて歌はれ
 たるものなり。ダウド自ら琴を弾じ又其統御の下に小預言
 者等の種々なる歌隊を有せり彼は預言者等と交りし人々を
 斯く名づけ又時としては預言者の子等とも名づけたり。彼
 等は種々の樂器を有てり或は鉦或は笛或は鼓或は角或は琴
 と線琴或は牧笛と稱へられしものを有てり又歌隊毎に長あ

聖詠講話序

48. 113
内交

り、其中の或者はアサフと名づけられ、或者は「イラフム」と名づけられ、或者はコレイの諸子、或者はイスラエリの「エラム」と名づけられ、或者は神の子モイセイの名を以て稱せられたり。斯くの如く、ダウドは民の俘虜となりしこと、或は其歸國のこと、或は徳義上の教、或は神の照管、或は主宰パリストスのこと、を報ずるに精神の興奮したる時、精緻なる言語を以て聖詠を作れり、故に各聖詠は皆適當なる内容を有せり。然れば短き聖詠あり、長き聖詠あり。ダウドはこれを或歌隊に授けたり。若し彼聖詠の中間に止り、又聖詠の次の部分を他の歌隊に交附すべき事を示したる時は、聖詠の斯くの如き繼承を「更調」と名づけたり。然れば彼が聖詠の中間に之を所謂牧笛に交附せんと欲したる時は之を *Organ psalm too* と名づけたり、何となれば、笛は交々聖詠の残部を歌ひ始めたればなり（聖詠九の十七）。此事

に就きて知らんと欲せば、歴代志略の例によりて知ることを得べし、其中にダウドは預言者アサフの手にて「此歌を歌ふ」とを定めたり（歴代志略十六の七）と録されたり。第一の歌隊が他の歌隊に聖詠を交附したる後、次の歌隊、或は各唱歌者は別々に、或は皆偕に愉快に一致して、一唱歌者は其組の他の唱歌者に對して歌ひ、又或楽器は更々他の楽器に對して奏し、歡喜悅樂して神を讚美稱揚するが爲に聖詠を歌へり。此事に就きてはダウド自ら約匱を異種族より奪還へして其前に躍りたることよりして決定することを得べし、而してその妻ノルホラダウドを責めし時、彼を「我主の前に樂を奏して躍らん」（第二例王紀六の二十二）と答へたり、彼は管に止めざりしのみならず、之を一層大なる熱心をも以て爲さんと欲する心掛を言せり。或者は事の順序と木質を熟知せず、又之を知れる者に學ぶことを望まずして、之を以て譬喩なりとし、凡ての聖詠はダウドの作にあらず、聖

詠の中に其名の明記されある人々の作なるが如しとさへ論ずる者あり。然れど主も使徒等も或他の記者の作なりとは云はざりしなり。然れば聴衆が構造に就きて明に畫かんが爲にダウドを坐する者とし而して其前に右に左に歌隊あるものとして畫かん。次に吾人は彼が主の經綸のこと、其人性による苦と復活の事を預言せる聖詠に就きても云はん、即ち組織の種類と表言の形式により多種各様なるを顯す所の聖詠に就きて言はん。彼は又確に主が神性によりて永遠なること、世界の造物主、全世界の革新者たること、又神は神啓の全聖書の目的を成す事を告げたり。イテフムの歌隊、コレイの諸子の歌隊、イズライリの「エムム」の歌隊、アサフの歌隊、及び神の人モイセイの歌隊は―是れダウドの統御の下にありて種々の樂器を奏し、聖神の感應を得て録されたる百五十篇の聖詠を祝ひ樂み歌ひて神を讚榮せし諸預言者の歌隊なり。

聖金口イオアン全集第五卷 聖詠講話中編目次

第一百十	聖詠講話	一
第一百十一	聖詠講話	二五
第一百十二	聖詠講話	四六
第一百十三	聖詠講話	五六
第一百十四	聖詠講話	八〇
第一百十五	聖詠講話	八九
第一百十六	聖詠講話	一〇七
第一百十七	聖詠講話	一〇八
第一百十九	聖詠講話	一三〇
第一百二十	聖詠講話	一四二
第一百二十一	聖詠講話	一四九
第一百二十二	聖詠講話	一五七

詠の中に其名の明記されある人々の作なるが如しとさへ論ずる者あり。然れど主も使徒等も或他の記者の作なりとは云はざりしなり。然れば聴衆が構造に就きて明に畫かんと爲にダウトを坐する者とし而して其前に右に左に歌隊あるものとして畫かん。次に吾人は彼が主の經綸のこと、其人性による苦と復活の事を預言せる聖詠に就きても云はん、即ち組織の種類と表言の形式により多種各様なるを顯す所の聖詠に就きて言はん。彼は又確に主が神性によりて永遠なること、世界の造物主、全世界の革新者たること、又神は神啓の全聖書の目的を成す事を告げたり。イテフムの歌隊、コレイの諸子の歌隊、イスライリの「エラム」の歌隊、「アサフ」の歌隊、及び神の人モイセイの歌隊は―是れダウトの統御の下にありて種々の樂器を奏し、聖神の感應を得て録されたる百五十篇の聖詠を祝ひ樂み歌ひて神を讚榮せし諸預言者の歌隊なり。

聖金口イオアン全集第五卷 聖詠講話中編目次

第一百十	聖詠講話	一
第一百十一	聖詠講話	二五
第一百十二	聖詠講話	四六
第一百十三	聖詠講話	五六
第一百十四	聖詠講話	八〇
第一百十五	聖詠講話	八九
第一百十六	聖詠講話	一〇七
第一百十七	聖詠講話	一〇八
第一百十九	聖詠講話	一三〇
第一百二十	聖詠講話	一四二
第一百二十一	聖詠講話	一四九
第一百二十二	聖詠講話	一五七

第二百二十三 聖詠講話……………一六一

第二百二十四 聖詠講話……………一六九

第二百二十五 聖詠講話……………一七六

第二百二十六 聖詠講話……………一八二

第二百二十七 聖詠講話……………一八七

第二百二十八 聖詠講話……………二〇一

第二百二十九 聖詠講話……………二〇四

第二百三十 聖詠講話……………二一三

第二百三十一 聖詠講話……………二一七

第二百三十二 聖詠講話……………二二九

第二百三十三 聖詠講話……………二三二

第二百三十四 聖詠講話……………二三五

第二百三十五 聖詠講話……………二六二

第二百三十六 聖詠講話……………二七四

第二百三十七 聖詠講話……………二八〇

第三百三十八 聖詠講話……………二八八

第三百三十九 聖詠講話……………三〇七

第三百四十 聖詠講話……………三二四

第三百四十一 聖詠講話……………三五七

第三百四十二 聖詠講話……………三六八

第三百四十三 聖詠講話……………三九〇

第三百四十四 聖詠講話……………四〇七

第三百四十五 聖詠講話……………四二五

第三百四十六 聖詠講話……………四三二

第三百四十七 聖詠講話……………四三八

第三百四十八 聖詠講話……………四五一

第三百四十九 聖詠講話……………四六九

第三百五十 聖詠講話……………四七五

豫言者ダウイドの説教……………四八〇

人富を致す時爾懼るゝ母れ……………五〇九

目次終

聖金ロイオア全集第五卷 聖詠講話中編

第一百十 聖詠講話

主よ、我が心を全うして爾を讚榮す(節一)。

一。「全うして」とは何を意味するか。周到なる準備と熱心とを以て俗務を離れて向上し、肉の控括より靈を自由にしての意なり。「心を」とは讚榮するに方りて單り言を以てするのみならず舌と口とを以てするのみならず、乃ち智慧を以てするの意なり。然ればモイセイも人々を誡めて「汝心を盡し精神を盡して汝の主神を愛すべし」(律例の五)といへり。思ふに預言者は爰に「讚榮」てふ言の下に感謝を意味するなるべし、即ち我歌頌せん、感謝せん、の意なり。預言者は此事を以て己の一生涯を送れり、即ち之を以て生涯を始め、又之を以て生涯を終れり、神が彼と他の人とに仁慈を顯されたるが爲に神を感謝するは彼の日常の要務たりしなり。神も亦感謝を人に要求する程に何物をも人に要求せず、何となれば感謝は祭なり、献ぐる

ことなり、恩を忘れざる心の徴表なり、而して之と同時に悪魔の爲には彼を苦むる傷なればなり。然れば福たるイオフは無数の誘惑に遭遇し、其妻の彼を誘惑したる時に於てすら尙動搖せざりき、管に富める時のみならず、貧しくなりし時にも主を感謝し、管に壯健なりし時のみならず、その體の疾病に冒されし時にも主を感謝し、管に彼の諸事業の安全なりし時のみならず、恐るべき暴風の彼の全家と其身體に襲來りし時にも尙之が爲に主を感謝することを止めざりき、是れ其榮冠を受け、讚美されし所以なり。悲哀艱難に際して大に神を感謝し、而も断えず感謝するは、恩を忘れざる心を有てる者の殊に然すべきことなり、預言者も之に對して明かに次の言を示せり。多くの人は幸福の時に神を感謝すれども、不幸の時に怨み啣ち又は其遭遇する事件に不満を顯すが故に、預言者は此事の事件の性質に關するにあらす、彼等の靈の放肆に由れることを顯さんと欲して、『義者の集義の中、及び會の中に主の所業は大なり』(節二)と附加へたり。彼は此等の言を以て公平無私なる裁判官及び集會に於て取るべきことを顯すなり、斯れば神の行爲は明かに多くの奇蹟を含める大なる事として顯れん。義者は自ら己によりて大なるも、義なる審判者なくば斯る者と顯れざるなり。太陽は自ら光り輝きて全世

界を照せども、眼病者の爲には然か思はれず、而も其誤謬は太陽にあるにあらすして彼等の疾病にあり。是に由りて爾人が神の行爲を誹るを見ば其惡に和して共に神の行爲を議する勿れ、乃ち之を以て神の照管を思念するに於て、その極めて無智のことなるを知れ。斯くの如く太陽を暗しと言ふ者は之を以て此の光體を輕蔑しめ得ずして、却つて其光體の光明なるを證す、又蜜を苦しと云ふ者は蜜の甘味を感せずして、却て偶々己の疾病あることを示すが如く、神の行爲を議する者も亦之に同じ。前者は害を事物其物に蒙らしめざるのみならず、事物に對する概念をすら變ずること能はず、却て自己の極めて無智なるを表すが如く、神の行爲に就きて正しき見解を有せざる者も亦實際に行はるゝ奇蹟を見るも之を奇蹟として見ざるなり、然れど公平にして清淨なる靈を有する者は不快に思はるゝ凡ての事件に對しても亦驚畏す。我に告げよ、實際に如何なる事件か驚くに足らざるを。爾若し欲せば、他の事はさし措きて、多くの人々に堪へ難き程に思はるゝ難事、例へば死、疾病、貧賤及び之に類することに就きて云はん。正しき心を有てる者は之をも極めて望ましきものとして受け、又驚畏を以て之を受く。縦ひ死は罪より生じたれども、神の至大なる能力と仁愛と照管とは死をも吾人人類の益に向けたり。我

に告げよ、實際死はその中に如何なる困難を含むかを。死は勞苦を脱却することにあらずや、煩累より救はるゝことにあらずや。爾はイオフが死を讚美して「死は人の安息なり、その途は秘密なり」(イオフ書三)と云へるを聞かざるか。死は惡癖を止めざるか。若し惡人にして死せば死は彼の罪に終を告げたるなり「死せし者は罪より釋かれしに由る」(六の七)即ち既に罪に罪を加へざるなり、若し善人にして死せば、その凡ての善行は安全と希望ある寶藏の中に貯へられん。我に告げよ、死は生者をして最も智なる溫柔者となさざるかを。爾は富める人々、傲慢なる人々、己の眉を高く上ぐる人々、死者を運ぶを見、又其死體の呼吸もなく、微動もなく、其孤兒寡婦、憂悶せる友、喪服を着けたる、僕婢を見、其全家の擧つて悲哀の狀態に沈めるを見、如何に屢々感動し、謙遜となり、痛傷するを見ざるか。彼等は前に多くの教誨を聞きて如何なる益をも受けざりしかど、斯る觀物によりて俄に悟道者となり、人類の微弱と腐敗、己が權力の弱く且つ鞏からざるを認め、斯くして他人の不幸によりて自己の變化すべきことに歸決するなり。

二。されど人に死のあるにも拘らず、今も奪掠貪慾の盛に行はれ、又強者は弱者を魚の如くに吞噬すとせば、若し死することのなからんには、貪慾は其底止する所を

知らざるに至るべし。若し人々が今も其奪掠したる多くの貨物を常に利用すること能はず、又欲すると欲せざるとに拘らず之を他人に渡さるべからざることを知るに際して、尙斯る無智狂暴に迄達すとせば、安全にして其を領し得たらんには、彼等の惡しき情念は鎮靜する時なかるべし。致命の榮冠は死をもて編まるにあらずや。またパウルが數ふべからざる程多くの戰利品を收めたるは死を以て得たるにあらずや。彼曰へり「我毎日死す、我爾等の譽を以て之を證す」(コリント前書一)と。死は惡にあらず、而も惡しき死は惡たるなり。是に由りて預言者は「聖人の死は主の目の前に貴し」(聖詠百十)と云へり。他の個所に於ても曰へり「罪人の死は苦し」(聖詠三十三)と、苦しとは、重荷を負ひ、多くの罪の自覺を以て心を掻き裂かれたる人が、不潔なる良心を以て現世を去るを云ふ。然れど潔き良心を有てる者は賞を受くるに急ぎ、榮冠を受くるに移り行くなり。爾に死其物にあらず、即ち死の認識の個人を攪亂することを承服せしめんために、パウルが此事に就きて如何に論ずるかを聞け、彼は或る個所に於て「我等は此幕に居りて歎息し、子と爲ること、即ち我等の身の購を俟つ」(コリント後書五)と云ひ、又他の個所に於て之を説明して「若し、我爾等の信の祭と奉事との上に灌奠とせらるゝとも、我喜び、且つ爾等と偕に喜ぶ」といへり。

死若し困難ならざるのみならず、生者の爲に正しく希望あるものならば、況して艱難及び凡そ他の之に類することをや。『彼の全意を以て整全へられたり』(譯者不明オリゲンの)正教會譯の聖詠には凡そ之を愛(エグザプルーイ參看)する者の爲に慕ふべしとあり。思ふに、預言者は爰に神の睿智を報げ、創造に就きて云へるなり、而して彼は前に『行爲』に就きて述べて、吾人は縦ひ其行爲に就きて小膽者の爲に他の意味を解示したりとは、雖も一神が人類の運命を定めつゝ、數々行ひし所の休徵奇蹟を理解せり。『彼の全意を以て整全へられたり』とは何を意味するか。他の譯者の言ふが如く、研究せられ、整全せられ、完結せられ、充實せられ、神意を行ふに堪へ、神の能力を證するに準備するを云ふ、預言者が他の個所に於て『火と霰雪と霧主の言彼の命令』に従ふ暴風(聖詠四十)と言ひ、又、生は月を造りて時を定め、日は其の入る處を知る、爾暗を布けば、則夜あり(同上百三)と言へる如く、造物は神の命令を避けざるのみならず、之を遂ぐるに些の障害を有せざるなり、否、彼等は定められしことを行ふのみならず、神が其定められし所に反對なる事を命ずる時も、尙且つ大なる順従を顯すなり。然れば、神海に命じ給へば、海はその天性物を沈没すべきが當然なるに、イウデヤ人を溺らしめざりしのみならず、其浪を退かしめて陸を歩むが如く、無難に海底を通行せしめ(出埃及記四)燃ゆる爐

は少年等を焚かざりしのみならず、冷かなる露を與へ(三の二十五)猛獸はダニイルを食ひ盡さざりしのみならず、護衛者に代りて彼に務め(六の二十二)魚は預言者イオナを呑噬ざりしのみならず、彼に托されたる聘質を完全に保護し(イオナ)地は開きてダロンを呑み、アタロンに屬する一切を蔽ひし時は、忍耐せざりしのみならず、海よりも畏るべく此等のものを滅せり(民數記略十)。また他の多くの奇蹟を造物の中に見ることを得、萬有を神とする無智者は、此造物を見て、凡てのことが萬有の力によりて行はるゝにあらす、乃ち神の意志に服従することを承知せざるべからず。此意志は萬有を造り、また其手號によりて凡そその存在物を治め、或は物質の法則を不變ならしめ、或は神欲し給ふ時は、此等の法則をも變更して之と反對なることをなさしむ。又『彼の全意を以て整全へられたり』とは、神の誠神の命令を行ふこととなり、又誠のみならず之を以て人々が神を識ることとなり、是れ特に神意の在る所にして、神の特に人々を造られたるも之が爲なり。斯くの如く、預言者の言の意味は左の如し、神の造物は、注意深く常識ある人々の爲には、神に關する正確にして、明瞭なる智識を得しむる程に完全なりと。實に神の意志は、造物が其偉大、美麗、秩序、行動、任務、其他、凡てのことを以て、觀者の靈を警醒し、觀者の智慧を以て造物主最も

完全なる工藝者たる神を尋ねしめ、觀者をして萬有の造者を拜せしめ、造物の凡ての組織が人々の爲に書籍となり、書信とならん様特に其創造の初めに於て造物を整全せり。

三。造物は人々に神を識らしむるのみならず、吾人の修徳上にも大なる日課を授く。貪慾者は晝が夜に場所を譲り、太陽が月に場所を譲るを見て、自然物の秩序整然たるに耻ぢざるべからず、而して彼若し他の人々より強からんも最も弱き者に屬するものを強請すべからず。姦淫者と放蕩者とは海の浪起つも、後岸にて抑制さるゝを見、秩序なき水の整然たるに耻ぢて發情を鎮め、ハリストスの畏を以て情慾の發動を抑へ、惡望の勢力を止めて貞操に歸ることを得べし。人は地を見て容易に復活のことも悟り、此問題に關する所説を納得し得べし。人は地が其中に蒔かれたる固き麥粒を先づ分解し、腐敗せしめ、然る後一層善良なる形態に生長せしむるを見、又葡萄の幹莖の葉なく、枝なく、房なく、赤裸々として立ち、而も其骸骨に似たらん枯木の如き状態なるも、後春來たり復び其麗しきを呈するを認めなば、腐敗の後に再生する植物及び種子によりて、吾人の肉體も同様なる結果に至ること、を歸決し得べし。人は勞働を愛することに就きては、蟻に倣ひ、秩序及び共同生活を

をなすことに就きては、蜜蜂の愛に倣ふべし、此事に就きて箴言に言ふ所を聞け、曰く『惰者よ、蟻に行き其爲すところを見て智慧を得よ、蟻は首領なく、有司なく、君王なければども、夏の中に食をそなへ、收穫の時に糧を斂む』(箴言六の二六)と、又蜜蜂に行きては彼が如何に其勞働を愛する者なるか、如何に尊き勞働を爲すかを知られ、諸王も庶民も彼の勞働の結果を養生の爲に用ふ、彼は衆人に愛せられ、又知らる、縦ひ其力は弱しと雖も、智もて尊し。又蜜蜂は靈の善良なる性質の體の美と合せられざる時は、體の美も驚くに足らず、體の醜さも美しき靈のある時は、其醜を蔑視せざるべきを爾に教ふ。睿智者も此事を述べて『蜜蜂は飛翔ける者の中に、小なるものなれども、其蜜は他の甘味に勝る』(シラフ書)といへり。鳥を觀て宜しく悟るべし。然ればハリストスも『試みに天空の鳥を觀よ、彼等は稼かず、穡らず、倉に積まず、而して爾等の天の父は之を養ふ、爾等は彼等より甚貴きに非ずや』(マテ、五の二十六)といへり。若し無智なる動物にして食物のことを慮らざれば、爾は現在の事に鳥すらもなす所の輕蔑を示さずして如何なる口實を有せんや。爾若し裝飾を輕蔑することを學ばんと欲せんか、野花は爾に外飾を慮らざるべきを教へん。ハリストスは之を説明して『野の百合の如何にか長するを觀よ、勞かず、紡かず。我誠に爾等に語ぐ、ソロモンも其衣

猶此花の一に及ばざりき(六の廿八、廿九)といへり。然れば爾衣服の美を慮る時は常に野の百合と較べ得ざることを憶ひて己の無智なる愆情を棄てよ。無言の動物より花より種子より多くの他の教訓を學び得べし。

其所爲は光榮なり、美麗なり(節三)預言者の愛に言ふ所は或一の所爲にあらず、凡ての所爲を指せるなり。他の譯者は「其所爲は讚美なり、功德なり」(譯者不明オリゲン)となせり。而して「光榮なり」とは感謝と光榮とを値すとの意なり。凡そ見ゆる事物は觀者を感謝稱揚讚美歌頌に向けしむることを得。其は何の爲なるか、此は何の爲なるかと問ふの要なし、乃ち夜の暗黒及び白晝も、飢餓及び豊富も、荒蕪不毛の土及び肥沃豊稔の地も、生命及び死其他凡その見ゆるものも亦注意する者には感謝の心を起さしむるに助け且つ充分なり。神は一預言者を以て之を表言し、又仁慈の代りに罰を顯しつゝ「ソドム、ゴモラを神の滅し給ひしが如く彼等を滅ぼし、枯死穀と朽腐穢の如く彼等を滅せり」(アモス四)といひ、又他の預言者を以て罰を仁慈に向けつゝ「我はエジプトの國より汝を導きのほり奴隸の家より汝を贖ひ出せり」(ミヘイ書)といへり。然ば神の罰其物も亦仁慈にして、矯正教誨訓諭及び斷惡に外ならざるなり。人々は一を慈愛によりて行ひ、他を憎惡忌避

によりて行ふも、神の行ふ所は悉く愛よりす。例令ば神は仁慈なるが故に人を地堂に住はしめられたれども、又仁慈なるによりて人を地堂より放逐せり、彼は仁慈なるによりて洪水を生せしめ、又仁慈なるによりて火をソドムに下せり、總じて何事を擧げ示すとも神は善のため凡てを行ふなり。仁慈なる神は又地獄を以て人を威赫す。凡そ吾人が父たるは、曾に己の子女を愛撫する時のみならず、彼等を罰する時に於ても然り、又罰しつゝ父たるは、愛撫して父たるよりも少からざるが如く、神の吾人に於けるも亦これに同じ。視よ、パウエルは何故に「蓋子にして父の懲さざる者あらんや」(エツレイ書)といひ、又ソロモンは「主は其愛する者をいましめ給ふ宛も父のその愛する子を誼むるが如し」(箴言三)といひしかを。「其義は永く存す」四。思ふに、預言者の此言を述べたるは、突然或人々に及べる不幸を見て感ふ者の爲に「讒言に遇ひ、凌辱められ、無罪にして苦む人々を見て心を亂すなかれ、各人の功德に應じて報ゆる無私なる裁判公義なる宣告あり」と言ひて悟らしむるが如し。爾若し今此宣告を要求せんか、爾は自ら己に反して之を述べざるかを見よ。神若し眞に凡ての罪を直に罰し、凡ての犯罪の上に其義なる審判を行ひ給はば、人類は既に己に滅びて存せざりしならん。何の爲に斯くの如きことと斯くの如き人に

就きて云ふか。我は此事を證するが爲に衆人の爲に最も大なる人―三重の天に
 迄昇り、天國に入れられし全世界の傳道者長るべき機密に關與りし者擇ばれたる
 器天使の生活をなし、大なる善行に達したるハリストスの友バエルを示さん。
 神若しバエルに對して恒忍者たり仁慈者たるを望まずして、彼が罪を犯し、褻瀆
 し、教會を著逐したる時に於て直に己が義の審判を行ひたらんには、彼は悔改する
 の機會を得ざりしならん。彼は自ら此事を認めつゝ、「我に力を賜ひしハリストス
 に感謝す、其我を忠なる者と視て、役事の職に任せしに因る、我は昔誘ふ者、著逐する
 者侮る者たりしが、矜恤を蒙りしは、先づ我に於て全き寛忍を示して後彼を信じて
 永遠の生命を得んと欲する者の模範と爲さん爲なり」(テモス一福音一)といへり。神
 若し直に蕩婦を罰したりしならば、かれは何れの時か歸正せんや(ルカ福音七)。「税吏マ
 トズイもまた歸正以前其税吏たりし時に罰せられしならば、悔改することを得ざ
 りしならん。盜賊魔術者凡ての罪人に對しても亦同様なりしならん。是に由り
 て神は己の怒を抑へ、人々を悔改に招きつゝ、義なる應報を猶豫す。然れども罪人
 若し矯正せざる時は必ず義なる審定に服せしめらるゝなり。視よ、預言者は凌辱
 めらるゝ者を慰め、凌辱むる者をば悔悟せしめんと欲して「其義は永く存す」

と附加ふるを。此言の意味は左の如し、爾凌辱めらるゝとも生活を終りて後義な
 る應報を受くることを失望する勿れ、即ち此世を逝りし後爾は功勞の爲に必ず賞
 を受けん。爾掠奪者貪慾者義の破壊者たらば、縦ひ己の生活を平安に終るとも安
 然なる者として存せざるべし、即ち此世を逝りし後爾は凡ての爲に答をな
 し、凡ての悪事の爲に應報を受けん。神は常に存し、彼の正義も亦常に存す、故に善
 徳に報い悪行を罰するが爲にも死は毫も障害を與へざるなり。

「彼は其奇蹟を忘る可からざる者と爲せり」(四)此言は何の意なるか。
 言ふ意は、彼は何時も奇蹟を行ふことを止めざりきとなり。又「忘る可からざ
 る者」と爲せり」とは、即ち止めざりきの意にして、各種族に對して奇蹟を行ひ、恐
 なる人々を奇蹟にて奮勵することを止めざりきとなり。智慧高き人及び智を愛
 する人は、休徵を要せず「見ずして信する者は福なればなり」(イオアン福音)然れども神
 は常に彼等の爲に慮るのみならず、恐なる人々の爲にも慮るが故に、殆んど各種族
 に奇蹟をなし給ふことを廢めざるなり。凡その見ゆる萬有は全く奇蹟なれども、
 神は多くの人々を斯る觀の間にありて無分別なることより奮勵せんと欲しつゝ、
 多くの奇蹟即ち個々の奇蹟と一般の奇蹟とを行へり例ば洪水言語の混同、ソドム

の亡滅、アウラアム、イサアク、イヤコフの遭遇せし事件、エギベトに於ける事件、エウレイ人のエギベトを出る時に於て曠野に於て、バレスヲナの地において、ワウロンにおいて、捕虜より歸りし後に於てマツカウエー家の時に於て、ハリストネの降生後及び其降生の時にありし事件の如き、又今日に至る迄連続する事件例へばイエルサリムの陥落、教會の設立、教會の四方に弘布し、騒亂によりて強まり、降生に遇ひて蔓延せし傳道多くの致命者を出せしこと等の如き是なり。多くの奇蹟は個々の生活の中にも家庭に於ても市内に於ても見ることを得然れども吾人は唯各種族の中に生ぜし所の明白にして且つ衆人に顯著なる一般の奇蹟に注意を向けん。斯くの如き奇蹟は衆人にすぐれて不度なりしユリアンが教會を穿透したる時に幾何ありしか。マクシミリアンの時に幾何ありしか。彼等より先代の諸王の時に幾何ありしか。爾等若し欲せば、我は現今に於てありし奇蹟をも示さん例ば不意に衣服に印記されし十字架、電光にて破壊されたるアボルロンの殿堂、ワウラの聖致命者の不朽體がダフヌイに移されしこと及びその惡鬼の上に於ける明なる勝利、教會の寶庫守衛者の異常なる死衆人に勝れて不度なりしユリアン帝の殺害されしこと、その叔父の亡滅、毒蟲の發生及びその他多くのこと、即ち饑饉、旱魃之と

借に市に及べる無雨と四方に起りたる多くの事件の如き是なり。

五。汝等はまた當時バレスヲナにありしことを知れるならん。イウデア人が神の定めによりて破壊されたる聖堂を再建せんと欲したる時、其基礎より起りし火は衆人を放逐し、之を以て既に此事の成功せざることをも知らしめたり。「主は慈悲にして鴻恩なり。彼は己を畏るゝ者に糧を予ふ」(四節)。「預言者は奇蹟と行爲とを以て示されたる神の仁慈、即ち吾人の爲に慮ることを述べて、尙斯くの如く多く且つ大なる救贖事業を行ひ、所有方法を以て人々を教誨し、神を識ることゝ高尚なる悟道に導き、人々の生活を整へし所の神は之を義務によりてにはあらず、爰には神の至大なる恩寵の作動するを見る、乃ち慈悲と仁愛とによりて行ひ、而も彼自ら之を要するに由るにあらず、乃ち己の仁慈によりて行ふことを解明しつゝ、説話を強む。『彼は己を畏るゝ者に糧を予ふ』。何故に預言者は爰に畏るゝ者に就きて言ふか。神の養ふは彼等のみにあらず、福音書の中にも『蓋彼は其日を悪しき者と善き者の上に照し、雨を義なる者と不義なる者の上に降らす』(マテ五の四十五)とあればなり。彼は何故に『己を畏るゝ者』と云ひしか。思ふに彼が爰に言ふ所のことは體の糧にあらずして靈の糧なり。故に唯主

を畏るゝ者に就きて記憶せり、此糧は彼等の爲に定められしものなり。體の養はるゝが如く靈も亦養はる。靈の實に養はるゝことは「人は惟餅のみを以て生くべきに非ず、乃ち凡そ神の口より出づる言を以てす」(福音四の四)てふ言を聞きて知るべし。然れば預言者の言ふ所は、神が特に彼を畏るゝ者に與ふる所の糧即ち言を以て教ふることを訓誨すること及び凡その悟道に就きて言ふなり。「永く其約を記念す」。彼の斯く言ふは、イウデヤ人の高慢を滅し、及び其驕傲を鎮靜めんと欲してなり、或は之を一層能く言ひ顯せば、彼等の享けたる幸福は、彼等自身の功德の爲にあらず、乃ち彼等の列祖に對する神の愛と、彼等と偕に結ばれし神の契約とによることを示さんと欲してなり。然ればモイセイもイウデヤ人の約地に入りし時、彼等に言と思とを慎むべきことを誡めたり。彼はイスラエリ人に曰へり、爾等美麗なる城邑を建て、又富を得るとも、此等のものは我が義の爲に致されたりと謂ふ勿れ、否、爾等の列祖と結びし「約の爲なり」(復傳律令書九の四、五)。否何ものも驕傲より惡しきはなし、然れば神は常に全力を盡して之を攻撃せり。「彼は其所爲の力を其民に致せり、之に異邦人の嗣業を與へん爲なり」(節六)預言者は一般のことより個々のことに移り、全世界に生じたる事件よりイウデヤの中に行はれ

し事件に移れり。然れど若し注意して觀察する時は、此等の事件も亦共通の意義を有す。イウデヤ人の遭遇したる凡ての事は、他國民の課程ともなれり、即ち戦争も、戦利品も、注意深きものゝ爲には傳道の代となることを得べし。實際に此等のことの生じたるは、人事の常法に由るにあらず、乃ち解明すべからざる事情に由る。城壁が喇叭の響によりて破壊され、先導せる婦人は勝利を得、小童は單石を投じて敵の軍隊を敗りたることは常法によるか。彼等には多くの非常なる事情のありしなり。然れば彼等は敵に勝ちて之をバレスエナより撃退せり。ゆゑに預言者が「彼は其所爲を其民に顯せり」と云へるは、神は單人民を放逐するに非ず、乃ちエウレイ人が特に判然と見ることを得たりし方法を以て放逐して己の能力を顯し、たとひ之が爲には前にありし諸事件にて充分なれども、敵を撃退せしは神の爲し給ひし事にして、神の指導の下に、彼等の運命の決定されしに外ならざるなり。然れば神は唯言語を以てイウデヤ人を教へしのみならず、乃ち行爲を以て、履を以て、衣服を以て、食物を以て、晝夜の光を以て、雲を以て、戦争を以て、平和を以て、勝利を以て、農業を以て、雨を以て、教へたり、一言にて言へば、凡ての事物は彼等に主を報げ、彼等の味されし智慧を覺醒したるなり、且つ神が常に其休徵をイウデヤ

人に顯さざりし時あらざりしなり。『其手の所爲は眞實なり、公義なり』
 節七。預言者は神の能力の事を述べて、その審判の公義なることをも述ぶ。即ち神
 は其時己の行爲に於て能力を顯ししのみならず大なる義判をも顯したることに
 就きて述べたるなり。神がパレステナより諸民を放逐したるは、たゞにイウデヤ
 民を此處に居住せしめんと欲したるに由るにあらず、即ち其正義によりてなり。
 さればモイセイも是に由りて或個所に於て『其はアモレイ人の惡未だ眞實なれば
 なり』(創世紀十の十六)といへり。此等は曾に或イウデヤ人及び唯彼等の中に生じたる事件
 に就きて言ふの必要ありしのみならず、總じて萬事に就きて言ふの必要ありしな
 り。凡そ神の爲し給へることは眞實なり、公義なり。而して聖書は仁愛をも數々
 『眞實』と名づく。故に此等の言は、神が全く義鞠によりて行ふと、僭に、又仁愛によ
 りて行ふことを示すなり。實に神若し唯義鞠によりて行はば、凡てのものは既に
 已に亡びたりしならん。

六。是故に預言者は同じく他の個所に於て『爾の僕と、訟を爲す勿れ、蓋凡そ生命あ
 る者は、一も爾の前に義とせられざらん』(聖詠四十)といひ、又『主よ、若し爾不法を糾さば、
 主よ、孰か能く立たん』(同上百廿)といへり。然れば神よりする所の凡ては正義と慈憐

とに充さる。神若し唯義鞠によりて行ひしならば、凡ては亡びたりしならん、又若
 し唯仁愛によりて行ひしならば、多くの者は、一層不注意なる者となりしならん。
 是に由りて神は人々の矯正法を種々にし、己の行爲を多様にするは、人々を救はん
 爲なり。『其悉くの誠は正し』預言者は數々他の個所に於て行ふが如く、愛に
 も亦同様に往へり、即ち預言者は神が造物に對する照管の種々なる状態を以て顯
 す所の仁慈の中より、爰にも亦照管の新しい状態を示しつゝ、神の立法に移るなり。
 實際に神は唯斯く夥多の造物を造りしのみならず、律法を定めたることに於ても
 亦人類を悟らしむるなり。視よ、何によりて預言者は第十八聖詠に於て照管の此
 二種類を區別しつゝ、其初に於ては『諸天は神の光榮を傳へ』といひ、中間に於ては造
 物に就きての說話を終りて『主の律法は全備にして、靈を固め、主の誠は明にして目
 を明す』(聖詠十八)と附加へたるかを。

然れば爰にも彼は休徵奇蹟及び神の行爲に就きて述べ、律法に移りて『其悉くの
 誠は正しく世々に堅固にして眞實と正直とを基と爲せり』(節八)
 と言ふ。彼が『悉くの』と云ひしは徒然ならず、乃ち多くの誠を観察しつゝ、此表言
 を用ひたるなり。然れば凡ての造物即ち地と日月星辰の運行晝夜の差別を保存

する造物の法則あり。初め人の造らるゝや、その天性に賦與されたる律法ありき。パウロは此の事に就きて「蓋律法を有たざる異邦人等は性に率ひて律法の事を行ふ時は律法を有たすと雖も自ら己の律法たるなり」(ローマ書二)といひ、又「蓋我は肉なる人に由りて神の律法を悦ぶ」(同上七)といへり。録されし律法あり、即ち此等は皆現今に存す、而して其律法の或個條の變更さるゝとも、そは惡しく變更されしにはあらす、却てらで乃ち改善されしなり。然れば「殺す勿れ」てふ誠は變更されしにはあらす、却て強められしなり、又「姦淫する勿れ」てふ誠は變更されしにはあらす、却て大なる力を有するに至れり。是に由りて主は「我が來れるは律法或は預言者を毀たん爲にあらず、乃ち之を成さん爲なり」(マテ五の十七)といへり。實際怒らざる者にして始めて殺入罪を抑制し得べく、情慾の目を以て婦人を見ざる者にして始めて姦淫を遠ざかることを得べし。斯くの如く律法は死せざる特點を有す、萬有の法則自然法舊約の愛智の律法新約の律法も亦借に不變なり。然れば主は其言の變らざるを願しつゝ「天地は廢せん、然れども我が言は廢せざらん」(マテ五の三十五)といへり。神意を以て常に存すべく定められしものは永く存し、何ものも之を動かすことを得ず。

『眞實と正直とを基と爲せり』。『眞實と正直』とは何を意味するか。言

ふ意は、その中に毫も不正なることなく、曲れる事なく、暗きことなく、偏頗若くば怨恨によりて云はるゝが如きことなく、乃ち凡ては善と益とに向けられ、多くの變遷すべきこと、多くの不明なること、多くの人事的のことを含める人の律法の如くにはあらずとなり。人の律法は多く人慾の影響によりて設けられたるものなり、或者は敵に復讐せんと欲して之を設け、或者は友に喜ばれんと欲して律法を定む。神の律法は斯くの如きものにあらず、此律法は太陽よりも公明正大にして、爲に定められし者の幸福に向けられ、彼等を善行と眞實とに導き、而して偽の事物例令ば富又は權柄(此は偽なるも神に屬する事は眞實なり)に導かず、神の律法は愛に福を受け及び現生の福もて娛むことを教へずして、未來の福を得んことを教へ、又その中には毫も不正のことなき眞實のみを言はるゝなり。『其悉くの誠は正し』てふ言の中「正し」とは何を言ふか。堅固なり、不變なり、の意なり。誠の破らるゝ時は罰之に續くも、誠其物は動かす人誠を犯す時は神之が爲に復讐す。是に由りて言ふ勿れ、恰も是れ威嚇の爲に述べられしなり、或は誇大に述べしものなりと。如何なる立法者もその法を立つるや唯威嚇の爲にせずして、悔悟せしむるが爲にす。爾若し將來のことを信せずば、過去のことより此事を信用せよ。ノイ時代の

洪水、ソドムの焼滅、ラオンの滅亡、イウデヤ人の滅亡、その囚虜となりしことと戦争とは唯威嚇若しくは實際の罰なりしか。若し預象されし事件にして後に實行されしならば、眞實の事件の行はるゝや言ふ迄もなき事にして、斯る治療を矯正の後に行へる過失は一層罪深からん。『主は其民に救を遣せり』(九) 預言者は歴史の意義に於てはイウデヤ人の救贖に就きて述べ、寓意的意義に於ては『其約を永遠に立てたり』てふ言に於て説明したる如く、全世界の救贖に就きて述べたるなり。爰に預言者は新約に就きて述ぶ。彼は破壊され及び人々を神の怒に服さしめたる誠命と律法とに就きて述ぶるが故に、主自らも『蓋我が來りしは、世を定罪せん爲に非ず、乃世を救はん爲なり』(イオアン福音十二の四十七)といへる如く、『其民に救を遣し』ことをも言ふなり。破られたる律法は人々を罰に服せしむ、蓋律法は怒を致す、律法なき處には犯すことも有るなし、『人皆罪を獲、神の光榮を失ひて義とせらるゝを得るは、功なくして彼の恩寵によるが』(五、三の廿三)故に彼は『主は其民に救を遣せり』と言へるなり。

七。然れども主は救ひしのみならず、救ひたる後に律法をも與へたり、是れ吾人が恩寵に應ふ生活をなさん爲なり。『其名は聖にして畏るべし』。預言者は凡そ舊約に於ても、新約に於ても、行爲に於ても、誠命に於ても、奇蹟に於ても、休徴に於ても、神の配慮と照管とに就きて報せらるゝことを想像し、神の威嚴を驚嘆しつゝ、活動され、此萬有の原因者を讃揚しつゝ、讃詞を以て説話を終るなり。『其名は聖にして畏るべし』即ち全く驚くに堪へたりの意なり。若し彼の名にして斯くの如くんば、其本體は一層驚くべきにあらずや。然らば彼の名は如何に『聖にして畏るべき』か。悪魔は之を畏れ、疾病は之を懼る、使徒等は此名を以て全世界を改良し、ダウドは之れを武器に代用して異種族を征伐し、此名を以て多くの大なる事を行ひ、吾人は此名を以て聖機密を執行す。此くの如く預言者は此名が反對者をば攻撃し、己に屬する者をば固むるが如き多くの奇蹟を顯しつゝ、多くの仁慈をも行ふこと、事物の普通の秩序を超え、人智に勝ることを熟考しつゝ、『其名は聖にして畏るべし』とは云へるなり。若し此名にして聖ならば、之を讚美するがためには聖にして潔き口も亦必要なりとす。

『智慧の始は主を畏るゝ畏なり、智は凡そ行ふ者にありて善なり』(正教會譯の聖詠には『其誠を守る者は皆明智なり』(十)とあり。『始』とは何の意なるか。源なり、根なり、基なり。預言者は全世界の主宰に就きて斯く多

くの斯く大なることを述べて、主を畏るゝ者は凡ての智慧に充たされ、智なる者となることを言ひ表しつゝ、此事をも附加へたるなり。次に何人か智慧は唯知ることに限ると思はざらんために「智は凡そ行ふ者にありて善なり」と附加へたり。若し信仰にして之に應ずる生活を伴はざれば其信仰や不充分なり。如何にして「主を畏るゝの畏は智慧の始なるか」。此畏は凡ての悪を遠ざけ、諸の善行を教ふ。預言者は言にあらす、行より成る智慧に就きて述ぶるなり。異邦の智者等も神と人とに就きて知ることの如何によりて智慧を定む。神の畏は悪を滅し、善行を植つけ、現在のことを輕蔑して天に向けしめつゝ、智慧を興ふ。何ものか斯る靈より智ならんや。爰に預言者は言に聽者のみならず實行者をも示すなり。「智は凡そ行ふ者にありて善なり」即ち智慧の規則を行ふ者智慧を實行に顯す者の爲に智慧は「善なり」。彼が智に就きて善と言ふは「彼等は惡を行ふに智けれども善を行ふことを知らず」(四の二十三)とあるが如く、智の惡なる者もあればなり。然れども預言者の要求する所は善行の生活に於て顯はるゝ智なり。

『其讚美は永く存せん』。我に告げよ、其讚美とは如何なる讚美なるか。神の

業事のために永遠に神に献ぐる感謝なり、讚詞なり、然れども此讚美は吾人の之を献ぐるよりも先已に彼の本性に當然なるものなり。神は不死にして自ら讚美せらるべきものなれども、爾が彼の威嚴を顯す時にも讚美せられ、其他爾が見ゆる物の中に於て神の睿智を観る時にも彼は己が業事の爲に讚美せらるゝなり。預言者の之を云ふは、人々に感謝の心を起さしめ、又生せし所の事に不満を懐く人々の到底容赦すべからざる事を示さん爲なり。實際に「讚美」即ち感謝及び讚詞は明瞭判然確實不變堅固恒常なるものにして無限無終永遠に彼に屬するも、人々の之を理解せずして反對なることを云ふ時は、太陽よりも遙かに明なることに反抗して隨意に盲目者として止まるなり、何となれば讚美は之を知らざることを得るが如き一時的のものにあらず、暗きものにもあらず、著しからぬものにもあらず、乃ち明瞭恒常永遠なるもの、常に存するもの、何時も終を有せざるものなればなり。

第一百十一 聖詠講話

神を畏るゝ人は福なり (節一)

一。思ふに、此聖詠の初句は前の聖詠の末節と間接の連結ありて、前聖詠と分つべ

からざる一の完璧きを成すが如し。預言者は前の聖詠に於ては「智慧の始は主を畏る、畏なり」といひ、此聖詠に於ては「主を畏る、人は福なり」といへり、是れ彼は他の言を以て、然も同意義を以て神の畏を教ふるなり。彼は前の聖詠に於て神を畏る、人を智者と名づけ、此聖詠に於ては福なる者と名づけたり。實に眞の福は此中に在りて存す、他の凡てのことは虚なり、無なり、影なり。爾は財貨權威、身體の美と富裕とを示さんか。此等のものは皆落葉の如く、過行く影の如く、迅速に移り去る夢の如し。唯神の畏は眞の福をなす。次に惡鬼も主を畏れて戰慄するが故に爾が唯畏る、ことを以て救の爲に充分なりと思はざらん爲に、爰に預言者は前になし、が如くに行へり。前の聖詠に於ては「智慧の始は神を畏る、畏なり」といひ、又「智は凡そ行ふ者にありて善なり」と附加へて適當なる生活をも教に合したるが如く、此聖詠に於ても畏の事を述べて、唯一の畏神の威嚴を知るによりて生ずる畏、惡鬼も亦有する所の畏に就きて云はず、乃ち「其誠を極めて愛する人は」と附加へたり。彼は此等の言を以て嚴格なる生活、善行、愛智の靈を要求す。彼は「其誠を行ふ」とは言はずして他の何事か大なることを要求しつ、「極めて愛する」と云へり。然らば何事を要求するか。熱心を以て之を行ひ、誠に對

する大なる愛を有し、固く誠の命令に従ひ、之を行ふが爲に約されたる賞與を得ん爲に、あらず、乃ち之を定めし者(主)の爲に誠を愛し、ゲエンナの畏によらず、罪を畏ることよりせず、天國を受くる約束の爲にせず、乃ち此等の誠を與へし者(神)の爲に喜びて己を善行に渡すべきことなり。預言者は他の個所に於ても神の誠より受くる喜びを言ひ顯しつ、「爾の言は我が喉に於て幾何か甘き、我が口には蜜よりも甘し」(聖詠百十八)といへり。使徒パウロが「爾等が曾て其肢體を不潔不法の僕となして不法に委ねし如く、斯く今爾等の肢體を義の僕となして成聖に委ねよ」(ローマ書六)と言へるも同一のことを要求するなり。

惡癖は何等の賞をも得しむるものにあらず、却つて罰と苦とを得しむるも、爾等は非常なる熱心と準備とを以て惡癖に己を渡せしが如く、又非常なる熱心を以て善行に己を渡せ。然れど前に勧められたる方法は尙ほ嚴重ならず。彼は之を言ひ顯さんことを望みつ、「爾等が肉體の弱きに因りて、我人の情に循ひて言ふ」(ローマ書六)と言ひて、吾人が少からざる熱心を惡癖に對して顯したるが如く、之を善行に對して顯すべきことを勧めたり、此言の意味は左の如し、若し人々斯くの如き善行を爲さず、彼等が(惡癖に對して有せしが如き)熱心を善行に對して有せずんば如何なる

口實をもて赦さるるを得んやとなり。是に由りて預言者は『其誠を極めて愛する者』と言ふ。當然に主を畏るゝ者は大なる熱心を以てその誠を受く。律法の中には或困難を含有すと雖も、律法者に對する愛は律法を行ふを以て愉快なることゝなすものなり。我比較を用ふとも何人も我を罪せざるべし、爾等の知れるがごとく、パウロも『爾等が曾て其肢體を不潔不法の僕と爲して不法に委ねし如く、斯く今爾等の肢體を義の僕と爲して成聖に委ねよ』と言へるは、比較を用ひたるなり。然れば、蕩婦を愛する人は、縦ひ凌辱められ、詬諄られ、打撃れ、名譽を毀損し、國家より放逐され、父の相續權と慈愛とを失ひ、又は他の最も畏るべきことに遭遇すとも、己が耻づべき愛の爲に喜びて此等のことを忍受するなり。彼等若し喜びて此等のことを忍受せば、況して吾人に高尚なる愛智を得しめ及び靈を最も善なるものとなす所の救贖的にして光榮なる神誠をば大なる喜びを以て受け、而して其誠の中に毫も困難なることを見出すべからざるにあらざるや。困難は誠の性質より生ぜずして、多くの人々の怠惰よりす。若し何人か熱心を以て之を受くる時は、其容易に成遂げ得ることを發見さん。然ればハリストスも『我が軛は易く、我が任は輕し』(マテフ、エ、三十一)といへり。而して之が實際に斯くの如きことと怠惰が多くの人

々に、容易なることをも困難ならしめ、又熱心は困難なることをも容易ならしむることを爾に承服せしむる例となるものは、マシナをもつて養はれつゝ、怨言を吐きて死を希ひしイウデヤ人なり、然れど饑渴に苦められたるパウロは喜びて而も大悦せり。イウデヤ人等は『我等の精神、マンナによりて枯衰ふ、エギベトに慕のあらざるが爲に、汝我等をたづさへ出だして死しむるや』(民數紀、四十一の六〇)といひしも、パウロは『我が苦を喜び、且つ我が肉體において我に缺くる所のハリストスの患難を補ふ』(コロサイ、一、二四)といへり。如何なる苦を喜ぶか。飢渴裸體及び其他諸の苦なり。『其誠を極めて愛する者』如何にして其誠を極めて愛し得るか。吾人若し眞に神を畏れて之を愛し、又善行の本質を了解せば之を能くせん。實際に善行は他の諸の賞を受くるに先たちて善行其者の中に賞を含有す。然れば爾等淫せず、又殺さざる時は、良心の苛責を嘗むることなく、家人に愧ぢず、光明なる眼を以て衆人を視つゝ、如何なる喜を得るかを想像すべし。姦淫者にありては然らず、彼は凡てを畏れて戦慄し、影を見ても亦疑ふなり。

二。貪慾者及び嫉妬者も同様のことを嘗む。然れど此等の情慾を脱却する者は反對のことを嘗むるなり。『其裔は地に力あり』(節二)。聖書は屢々天然の出生に

よる子女にあらず乃ち善行の交通による子女を『裔』と名づくることあり。然ればバエルも此地を爾と爾の裔とに與へん『てふ言を解明しつ』蓋イズライリよりする者は盡くイズライリたるにはあらず亦アウラムの裔よりするに由りて盡く其の子たるには非ずイサクに在りて爾の裔と稱へられん(ロマ書九)といひ又萬民は爾に由りて祝福せられん(ガラテヤ)といへり。而して爰にはイウデヤ人に就きて述ぶるにあらず其事實を示すなり。自ら詛の下にありし者は如何で他人の爲に祝福の原因者たるを得んや。爰には信仰の交通によりてアウラムの裔となりし教會に就きて述べられしなり。善行を行ふ人々も神を畏るゝ人々の子女も亦アウラムの裔なり。『裔は地に力あり』

何の爲に預言者は『地に』といひしか。地は未だ此處を去るの前及び彼處の福を味ふの前に斯くの如きものたるを示さん爲なり。我が前に述べたるが如く善行は他の賞を受くるに先たちて其中に既に賞を含有す。而して善行ある人は實に強き裔を有し又自ら凡ての人々よりも強きことは使徒等之を證し諸預言者之を明しせり。主も亦斯る人々を觀て『凡そ我が此言を聞きて之を行ふ者は我之を磐の上に其家を建てたる智き人に譬へん雨降り河溢れ風吹きて其家を揺らたれど

も倒れざりき磐の上に基けたればなり(マテ五章七)といへり。人民の騷擾柄權者の憤怒刀劍矛矢火爐猛獸の齒牙淵と海刑罰讒言奸計は如何に多く使徒等に對して向けられしか。然れど此等のものは毫も彼等被害せず彼等は凡ての上に超然として惡意ある者の矢の達せざる所に至り敵をも己の列に歸向せしめたり。實に何ももの善行より強きはなし善行は石よりも堅く金剛石よりも固し。之に反して惡癖は縦ひ無數の財貨にて圍まるゝとも外部の大權を有すとも何ももの之より空しきはなく無力なるはなし。善行者の力若し地に於て斯くの如くんば天に於ては如何なる力を有すべけんや。『正直の者の族は祝福せられん』

此の族は如何に輝きて彼を讃揚しまた彼を歎稱する多くの告示者を有するを見るか而も平凡の人々に讃美せらるゝにあらず乃ち智者に歎稱さるゝなり。地上を匍匐する人々は何人も之を理解するを得ず乃ち毀損はれざる智慧を有する者は殊に彼を讃美歎稱し且つ之を頌揚せん。天使等よりも使徒等よりも偉人等よりも讃美を奪はれざる此獲物の如何に大なるかを想像すべし。若し此族を讃美する者にして斯くの如くんば彼自らは如何なる者たるべきかを思ひ判すべし。

『富と財とは其家にあり』(三) 預言者は感覺的のことより再び心靈的のこ

とに移れり、何となれば聖書は數々善行を富と名づければなり、例之ば「恩恵を行ひ善行に富み」(テモネイ前)とあるが如き是れなり。是れ眞の富にして、凡そ他の富は唯富の名を負ふも、實際の富にはあらざるなり。然れど人若し爰に言ふ所の富は唯質的富をも理解すとなすも、言の意味を脱せざらん。誰か財産によるも使徒等より富まんや。凡てのものは水の泉より湧き出づるが如く、彼等の許に流入せり。「蓋凡そ地或は家を有てる者は之を售り、其售りたる價を携へて使徒の足下に置き、たればなり」(使徒行實四の三十四)。爾は使徒等の財貨に豊富なるを見るか。彼等は財産のことを慮らざりしも、衆人の財産を支配して所有者に勝る權利を有せり。所有者はその所有權を辭して己の財産を使徒等に献じ、其賣りし價を携へ來りて之れが處分を使徒等の權内に委ねたり。然ればパウエルは「有るなきに似たれども有らざるなし」(コリント後)といへり。而して彼等が斯る財貨の中に在りて、而も財貨の上に超然たりしは驚くべし、財貨の豊富は彼等を左右すること能はざればなり。財貨を要せざることは是れ眞の富なり。「光榮と財とは其家に在り」(正教會の聖詠)爰には多く説明を要せず。彼等は神よりの光榮を有せり、故に「神の國を求めよ、然らば此等の者皆爾等に加はらん」(マテネイ福音)てふ神聖なる言の如く、光榮は彼等に伴

へるなり。何人か彼等より光榮ならんや。人々は天使の如く彼等を受け、財産を献じて彼等の足下に置けり、彼等は帝冠を戴ける者よりも高名なき。如何なる帝王の光榮もパウエルが到處に説教し、死の桎梏を解き、疾病を癒し、惡鬼を逐ひ己の衣服を以てすら奇蹟を行ひつゝ、衆人を驚かしたる光榮に勝るあらんや。彼は地を天となして衆人を善行に導けり。

三。善行者若し地上に於て斯くの如くんば天上に於ては如何なる光榮を受くるかを思へ。「其家に在り」とは何の意なるか。彼と偕にすの意なり。此世の財貨は之を領する者と偕にあらす、何となれば財貨は安全の中にあらず、讒言者、諂媚者、有司、從僕等の手裡にあるを以て、財貨を領有する者は悉く之を家に保存することを望まず、諸方に散じて之が爲に番人と守衛者とを附すれども、此等のことは些も益なくして財貨は何れへか消行くなり。「其の義は永く存す」。他の譯者は「其慈憐は永く存す」(譯者不明オリゲン)となす。爰に預言者は惣じて善行のことに就きて言ひ、或は不義に反對なる善行のことに就きて言ふなり、或は他の譯者の言ひ顯すが如く、仁愛・慈憐を意味するなり。慈憐の力は實に斯くの如きものなり、即ち慈憐は不死不朽にして常に亡ぶることなし。凡そ人の事業は破るゝと

も、慈憐の果は常に萎縮せず、如何なる事情の變遷にも屬せざるなり。縦ひ人の體は破るゝとも、慈憐は生命と偕に滅せずして、ハリストスが『我が父の家に第宅多し』(イオアン福音十四の二)といへる所の第宅を準備せん。斯くの如く慈憐は其不變不易なる點よりするも凡ての人事に勝る、世には不易不變なるもの一もあるなし。爾は美を示さんか。美は疾病によりて萎み、又老衰を以て滅す。權威を示さんか。權威は數々變遷す。現世に於ける富又は他の光榮にして著名なる事を示さんか。此等のことは人々の生時に於て人々を棄て去り、或は死後彼等を裸體なる者及び一物をも有せざる者として遺し去るなり。義の果は斯くの如きものにあらず、即ち義の果は時によりて亡ぼされず、死にて破られず、死の穩なる港に達する時は特に危險なきものとなるなり。『正直の者の爲に光は闇冥の中に出づ』(節四)預言者は神を畏るゝ人の福を録しつゝ、現生に於てその遭遇する所のこと、即ち其所得の不滅なること、光榮を受くること、衆人の上にいると、善行によりて彼に似たる者勝たれざる神の子となりし者を見ると、及び困難なる事情の中に於ても非常なる安全を以て樂むことを述ぶるなり。『正直の者の爲に光は闇冥の中に出づ』てふ言は又左の事を示すなり、斯る人々即ち正直にして歩みし者の爲に光は

闇冥の中に輝くとなり。『闇冥の中に』とは何の意なるか。言ふ意は、正直の者は悲哀、困難、誘惑及び危險の中に在りとも、預言者は之をも闇冥と名づく。主は速かに大なる喜悅を彼等に遣はすとすなり。パウロも之れを解明しつゝ、『吾等は爾等が我等のアシヤに於て遭ひし所の苦難を知らざるを欲せず、蓋我等は壓せられしこと甚しくして生命を保つ望を絶つに至れり』といへり。爾は闇冥を見るか。『即我が衷に必死の擬定を爲せり、特に己を保持せずして、只死者を復活せしむる神を待まん爲なり、彼は既に我等を此の如き死より救ひ、今又救ふ』(コリント後書一の自八至十)といへり。爾は光の如何に輝くを見るか。同じく三人の少者の上にも見ることを得。彼等は焚かるゝを待てり、然れども最も清き露をもて樂めり。マニエル及び他の預言者も亦同様なりき。然れど若し此等の言を他の寓意的意味に解せんと欲する者は、其全世界に於て成遂げられしを見ん。闇黒が地と海とを蔽ひ、迷濛の四方に擴りし時、義の太陽は谷に輝けり。當時の人々は神を天上に求めずして、地上に求めたるにより、神は弱者に下りて尙其處(地)よりも彼等を照せり、是れ彼等を無限の高きに昇さん爲なり。『主神は慈あり、恵あり、義なる者なり』。預言者は善人の義は長く存すと云ひて慰安を與へたれども、多くの慈善者及び正しく

生活する人々が現世に於て之と反對なることに遭遇するを知りつゝ、他の慰を附加へて『主は慈あり恵ありて義なる者なり』といへり。神若し『慈あり』て屢々罪人をも赦さば、義人の此世を逝りし後神豈之を賞せずして止まんや、若し現世に於て彼等に報いざる時は、必ずや彼處に於て報いん。次に『義なる者なり』と附加ふ、神若し實に『義なる者』ならば、縦ひ爰に報いずとも功勞に應ずる報を各人になさん、復活は特に此事の至大なる證據なり。實際に多くの善行者無数の艱難を受け而して多くの悪人大なる平安を以て樂み、而も復活なく、他の生命なく、審判なく、又應報なくば、各人は何處に於て功德に應ずる報を受けんや。次に預言者は義鞠に就きて記憶し、之を以て己が罪の答辭を與ふべき聴衆を畏れしめ、直に治療を示して『善人は憐を施し、又借し與ふ、彼は裁判の時に其言の確なるを顯さん』(五)といへり。

四。視よ、如何に多大なる賞與は慈善者の爲に定められたるかを、即ちその果の常に存し、誘惑より救はれ、神に克肖すること、神の仁慈なるによりて諸罪を赦さるゝことは是なり。『彼は裁判の時に其言の確なるを顯さん』てふ言は慈善者が己を保護する者を見出し、義とせられ、審定されざることを示すなり、施濟は彼

の爲に美しき保護として務むればなり。他の譯者は『裁判と借に己が行の確なるを顯しつ』(マサム)といへり、即ち仁者は最も勝れたる配慮者なるが故に大なる福を樂み、如何なる困難をも嘗めざらんとなり。之に反して殘忍酷薄にして極めて不仁なる人は配慮者にはあらざるなり。實に己が靈の危険なるに際し、金錢を守りて靈を輕忽にする者より恐るはなし。然ればハリストスも其危険なるを見て負債者の證書を破りて新にこれを書き換ふべきを命せし執事を稱讚せり(ルカ福音十六)實際に―現世の生命の危険なる場合に際し、其危険を免るゝが爲に凡てのものを犠牲に供しながら、來世の生活に於て罰を受けんとする危険あるに際して同様の處置を適用せざるは無智ならざるか。主は小なることの爲に多くのものを得、金錢の代りに天を得、衣服の代りに國を得、餅と一杯の冷水の代りに來世の福樂を得る仁者を智なる配慮者と名づく。實に何事か亡ぶる福樂、速かに移り行く福樂及び腐敗する福樂を預けつゝ、來世の變らざる福樂を得而して之を以て現世においても安全をもて樂む配慮者と比較するを得んや、是に由りて預言者は『彼は裁判の時に其言の確なるを顯さん』といひ、他の譯者は『裁判と借に己が行の確なるを顯しつ』といへり。如何なる『裁判に

於て』なるか。或は最後の日に於て行はるべき裁判に於てならん彼は此裁判に於て能く己が凡ての行を整理へ、毫も錯亂するが如き行爲を示さず乃ち凡てのことは彼に於て秩序整然何等の混亂不順序なく其途によりて行はれん、是れ仁慈は彼の爲に凡てを便利なるものとなせばなり。他の譯者は『裁判と借に己が行の確なるを顯しつゝ』てふ言を以て一層明瞭に之を言ひ顯せり、何となれば慈善家は熟考して然る後己が財産を處分するも他の人々は輕率に之を處分すればなり。『彼は世々撼かざらん』。何物か人が不慮の出来事より救はれ世の荒浪を避けて港に到着する方法を見出したる時に際し泰然自若として行斷するが如き機敏と比較するを得んや。彼が己に及べる誘惑にあひて動搖せず顛倒せざるは驚くべきなり。多くの慈善者は動搖せざりしか。否。彼等は貧しき者となり、非常なる窮乏に類し、不幸に陥りたれども善行を行ひて其行爲に神の祝福を賜ひ、自己に天の補助を下し、且つ堅固にして希望ある歸なる深き良心を持して倒れざりしなり。故に預言者は、彼等は危険に服せずと云はずして『撼かざらん』と言へり。然ればハリストスも磐上に家を建てし人に就きて、其人は暴風に遇はずとは言はず、暴風に遇ふも其家動かざらんと云へり。彼の安全なるは誘惑の足ら

ざるが爲にあらず、其歴々誘惑を受けて而も常に動かざりしは驚くべきなり。實に仁慈に富める靈と雖も時によりて情慾の不潔に汚されざるは能はざることなり。『義人は永く記憶せられん』(節六)。視よ、如何に生時に於てのみならず、死後にも義人は多くのことを教誨するを。義人は死後にも人の爲に善良の教誨者たるに、如何にして生時に於て惡事に遭遇するか。是れ不信の人々をして、義人の結べる果の天上に於て不死のものとして存し、尙ほ爰に此實驗の顯さるゝこと、即ち彼の體は埋められて地に渡され、その記念は四方に飛散ることを承服させん爲なり。善行の力は斯くの如きものなり、即ち善行は時によりて其價値を減ずるものにあらず、月日の流るゝと借に萎むものにもあらず。然も善行は惡人を救ふが爲に致さるゝなり。義人等自らは人々の稱讃を要せざるも、惡しき生活をなす者の爲には義人等を稱讃することは必要なり、是れ彼等をして他人に與へらるゝ稱讃を聞き、熱心者となり、時を得て惡癖を棄てしめん爲なり。數百千金を費して墳墓を建設し、宏莊なる建築をなす者何處にか在る。永遠の記念となるものは石造の建築物にあらず、塔壁にあらず、又高塔にあらずして善行を行ふことなるを聞くべし。預言者の之を言ふは、極めて不信なる人々、來世のことを慮らざる人々の

爲にせるなり、是れ彼等に現在のことに見ゆることを避けしめて來世のことに向はしめん爲なり、又他の方面よりは、我が屢々言ひし如く、善行は他の賞を受くるよりも先づ善行其物の中に賞を含有することを示すなり。『悪評を懼れざらん』
 (節七) 彼は前に善行を行ふ者誘惑に服せずとは言はず、縦ひ服することありとも動かすと言ひし如く、爰にも亦惡評を聞かざるべしと言はずして、聞くも懼れざらんと言へり。

五。如何にして懼れざるか。彼が迫りつゝある戦争、或は城邑を破壊する地震、或は凡てのものを奪ひ去る盜賊及び強奪者、或は侵襲する野蠻人、或は死をもて威す所の疾病、或は裁判官の怒、其他何事を見るも尙之を畏れざるは、前以て己の財貨を安全なる場所に置き、死の近づける時も尙恐懼戰慄せざるのみならず、速に彼の財貨の隠されたる所に移り行けばなり。『蓋人の財の在る所には爾等の心もあらん』(六の二十一) 商人若し多くの貨物を家に送りて毎日其財貨を見るに急がば、況で己が凡ての財貨を天に置ける人の現世のことを遺つるを望みて來世のことに進むは當然なり。然れば何ものも人に懼を起すを得ず。『其心は主を恃むに備へたり』。他の譯者は同一のことを言ひ顯し、及び『備へたり』てふ

言を解明して『其心堅し』となせり。此等の言の意味は左の如し、何ものも彼を動かさず、又現世のことに執着せしめず、乃ち彼は全く凡てを神に向け、希望を懷き、常に希望を以て固められ、現世の何事も彼を疲勞せしめず、又誘惑せざるなり。世の經營は斯くの如きものなり、即ち世の經營は思想を誘惑し、智慧を放散せしむ。然れば復び『蓋人の財の在る所には爾等の心も在らん』(節八) 其家を磐上に建てし人を見るか。何の重荷をも負はじ、帶を緊め何人にも如何なる攻撃の發端を與へざる人のためには何の畏るゝことかあらん。神の慈憐を受け、神に嘉さるゝ者の爲には何の畏るゝことかあらん。彼は斯くの如く兩方面より即ち上よりする佑助によるも、下よりする平安によるも安全なり、財産の損失、凌辱、讒言及び何ものも彼を動かすを得ず、地より天に昇り、如何なる憎惡、如何なる奸計も亦達せざる國に進む者には何ものも之を害するを得ず。凡ての奸計の金錢より生じ、及び金錢に關することは爾等の熟知せる所なり。『彼其敵を見ん』。然れど惡鬼及び惡魔の外何者か彼の敵たらんや。『彼は散じて貧者に施せり、其義は永く存せん』
 (節九) 預言者は仁慈寛容及び正義に就きて述べたるも、慈善にも多くの差等あり、或

者は少く與へ、或者は多く與ふるが故に、吾人は何人を慈善者と名づくべきかを觀察せん、即ち慈善者とは餘裕ありて與ふる者なるか、或は凡ての所有を與ふる者なるか。凡てを與ふる者、與ふるが爲に何物をも惜まざる者たるや、明けし。パウロも「豊に稼く者は豊に穡らん」(コリント後九の六)と言へるは同一のことを要求するなり。視よ、預言者が如何に巧妙なる表言を用ふるかを。彼は「與へたり」或は「分てり」と言はず、乃ち與ふる者の慈善を言ひ顯し、及び彼の行爲を穡くことに喻へつゝ、「散じて」と言へり。實に稼く者は所有を散じ、及び將來の秋穫を得んが爲に現在のものを與ふるなり。是れ財を集むるに勝る、斯くの如くにして散ずるは、集むるよりも遙かに勝れり。財産を散じて義を集め、變遷するものを散じて不變のものを獲るなり。農夫も亦斯くの如く行ふ、然れども彼等の爲す所は不確定のことなり、何となれば農夫の蒔く所の種子を受くるは地なれども、爾は何ものも亡ぼし得ざる神の手中に置けばなり。然れば爾美麗なる黄金を見て之を與ふるに不決心なる時は、播種者と債主、又は出銀及び消費を以て事業を始むる航海者、貿易者のことを想起すべし、彼等が波も地の懷も負債者の證書も債に是れ不確定のものなるに拘らず、能く資金を投じ消費を以て事業を始むるは、其能く不確定の財

産を信用するに由る。債主は數々元金をも失ふことあり、然れど天の爲に勞する者は毫も斯くの如きことを畏れずして、全く現金及び利子(若し唯其元金より一層大なるものとなる所の増殖を利子と名づけ得ば)を受くることを信用し得べし。爰に現金は財産なるも増殖は天國なり。爾は元金よりも遙かに多大の利子を生ずる此貸附の價値を見るか。爾は來世に於て之を受け、而して現世に於ては完全平安をもて樂み、奸計に陥いらず、讒者及び嫉惡者の慾情を冷却し、現世の經營に疲れず、乃ち未來の希望をもて翼を生じつゝ、平安に生涯を送らん。「其角は榮を以て擧らん」。預言者は人々の特に希望する所のこと、即ち善行者が彼處に於ても相續し、此處に於ても豊に受くることの確實顯著なることを顯すなり。

六。爾宜しく一方に於ては己の財産を競馬及び觀物に費やす人々を想像し、他方に於ては慈善を行ふ人々を想像すべし、然らば此二者の結果を知らん、即ち凡ての人々は後者を尊んで公衆の父と稱し、隠所として常に之を讚美歎稱するを見、又前者をば、一時、無分別なる誘惑によりて讚美すとも、後には殘忍酷薄なる傲慢者、不節制および不虔の奴隸として罵詈するを見ん。人々相集りて談偶々此問題に觸る時は、前者の出費及び無益なる消費を譴責し、而して廉耻を知らざる者、犯罪者、殘

忍酷薄なる者も亦後者を稱揚驚歎して措かざるなり。善行は斯くの如きものなり。即ち善行は之に従はざる人々よりすら讚美さるゝも、惡癖は之に耽る人々の爲にすら嫌惡さるゝなり。視よ、何によりて狼費者はその利益を興ふる人々、即ち淫婦、御者、舞者よりすら讚美されずして却つて惡評を受くれども、慈善家は曾に彼等の慈惠を受くる貧者のみならず、彼等の憐れを受けざる人々よりも讚美せられ愛せらるゝを。『惡者は之を見て憂ひ、切齒して消えん』(十)。善行者は斯くの如きものなり。即ち善行は惡癖に取りて困難にして且つ耐え難きものなり。火の荆棘を焚くが如く、仁愛も亦残忍酷薄なる人々を刺激す、何となれば仁愛は彼等の不度を譴責することなればなり。視よ、罪人は如何に怒によりて衰弱しつゝ、敢て譴責をなし得じ、又善人の光明なる顔を正視し得ざるを。罪人は心に於て衰弱し、齒を以て憂愁を顯すも、敢て言をすら發し得ず、唯衰弱して搔裂かれんのみ。惡癖は斯くの如きものなり。即ち惡癖は縦ひ帝笏を持する者に及ぶとも、冕旒を蒙れる者の左右に立つことありとも、何ものよりも輕蔑せられ、何ものよりも卑怯なるものなり。惡癖は縦ひ無限の權力を着せらるゝとも、暴風怒濤に荒れすさむ海の如し。之に反して善行者は非常なる艱難に陥り牢獄に閉さるゝとも、尙諸王より

も榮え至と平安にして樂み穩なる港に在るが如し、曾に惡人より何等の害惡を受けざるのみならず、黙しつゝ、彼等に復讐し、彼等の不度に對して嚴重なる裁判を申請することを得。何ものか惡しき行をなして生活する人より不幸ならん、斯る人は財産に屈服する、外尙他人の位を以て凌辱せられ、他人の光榮を以て自己の罰と思惟し、自ら己に對して裁判を招ぎ、己の良心を搔裂き、己の靈の中に苦み、己自らの爲に割手となるに由る。爾は善行の力の卓越せるを見るか。爾は惡癖の憐むべき状態を見るか。又惡癖の不幸は曾に此事に在るのみならず、他の多くのことにも存す、預言者も之を示しつゝ、罪人の『望は滅びん』と續けたり。罪人の『望は滅びん』とは何の意なるか。何時も鞏固なるものとして存せざらん、の意なり。彼の望の目的物は斯くの如く、定めなく遷り易きが故に、之に準じて其望も亦變遷中止して如何なる根をも有せざるなり。現世に於て罪人の状態、斯くの如き時は來世に於て如何なる状態なるべきかを想へ。是に由りて吾人は同一なることを受けざらんが爲に、常に惡癖の途を避けて、善行の途を擇び、敵の爲に究追されず、喜悅と光榮とに充滿して吾人を天に導き、萬事に於て吾人に神の仁慈を得しめ、吾人を愛智者となし、言もて言ひ顯し得ざる程の幸福を含有する此安全なる途、又吾人

が皆吾人の主イエイス、ハリストスの恩寵と仁慈とを受くるに堪ふる所の幸福を含有する此安全なる途を歩まん。願くは光榮と権能とは世々に神に歸せん。「アミン」。

第百十二 聖詠講話

主の諸僕よ、讚め揚げよ、主の名を讚め揚げよ(節一)。

一。聖書の中に神を讚美すべきことに就きて數々述べらるゝは、此讚美の小事にあらずして、或献祭たり、神に喜ばるゝ、献物たるに由る。聖詠者は曰へり「讚美を献する者は我を敬ふ(聖詠四十三)」と又曰へり「我歌を以て我が神の名を讚美し、頌を以て彼を讚揚せん。此れ主に悦ばるゝは、牛及び角と蹄とある價に逾らん(聖詠六十八の三)」と、聖書は多くの個所に於て讚美すべきことを命ぜり、然れば救はれたる人々は、大に感謝する代りに讚美せり。然れど爾讚美するには非常の困難あり、普通の人々にして之を行ふは何人の爲にも容易ならざるにあらずやと云はんも、能く注意して觀察する時は、此事の困難なると同時に又之より生ずる利益あるを見出さん。第一、斯くの如き歌は義人より要求せらるる人は前以て己の生活を矯正し、然る後神に

頌を献せざるべからず、何となれば「罪人の口にある讚美は、快からざればなり(ラカ十五)」。第二、言を以てするのみならず、又行を以て讚美せざるべからず、神も亦特に斯くの如き讚美、斯くの如き光榮を欲すればなり、然れば神は「爾等の光は人々の前に照るべし、彼等が爾等の善き行を見て天に在す爾等の父を讚美せん爲なり(マタイ福音五の十六)」といへり。ヘルウム等は斯くの如く神を讚美す。然れば預言者は奥密なる歌を聞き、感動して「禍なる哉我は穢れたる唇の民のなかに住みて穢れたる唇の者なり(イサイヤ六の五)」といひ、聖詠者は讚美を献すべきことを命じ、天軍より始めつゝ「天よ、主を讚め揚げよ、其悉くの天使よ、彼を讚め揚げよ(聖詠百四十三)」と云へり。吾人も亦天使となりて、然る後神を讚美せざるべからず。吾人は此讚美を以て瑣細なることと思はざらん、乃ち口よりも先づ吾人の生命を献ぐべく、舌よりも先づ吾人の行は聲高らかに呼ばざるべからず。斯くて後吾人は黙して神を讚美することを得、又高く呼びつゝ、行を以て整調き歌を謳ふことを得ん。然れど聖詠が吾人に此事を教ふるのみならず、凡ての人の一致合同して歌隊を組織すべきことをも教ふ。爰には一人若くは二人に對して云はるゝに、あらず悉くの人民に對して云はるゝなり。ハリストスは一致と愛とに吾人を導きつゝ、恰も一個人より祈禱を献する

が如く、全教會よりも一般の祈禱を執行すべきを命じ、又各人は縦ひ一人祈禱すとも、或は他人と共に兄弟等の爲に祈禱すとも、常に複數を用ふべきを命じつゝ、「天に在す我等の父よ、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債ある者を我等免す、が如く我等の債を免し給へ、我等を誘ひ導かず、猶我等を凶惡より救ひ給へ」と言ふべきことを、誡めたり、斯くの如く、預言者も亦衆人を共同一致の祈禱に導きつゝ、「主の名を讚め揚げよ」といへり。爰に「名」と云ふ言を附加たるは何の意なりや。此附言は特に此言を唱ふる者の心意の向ふ所を顯すも、亦他の或ことをも示すなり。然らば何事を示すか。神の名の吾人によりて讚揚せらるゝこと、即ち彼の名は吾人の生活を以て明かに讚揚せらるゝものとなることを示すなり。神の名は其本質によりて讚美せらるべきものなるも、神は此讚美が吾人の生活状態にも輝かんことを欲し給ふなり。而して爾此事を承服するが爲に左の言を聞け。

預言者曰く「願はくは主の名は崇め讚められて今より世々に至らん」(節二)。爾は何事を云ふか。爾禱らすとて此名は讚美されざるか。爾は預言者の言ふ所は、神に存し及び自然に彼に屬する讚美にあらず、人々が神に獻する讚美のことなるを知らざるか。此讚美に就きてはパウロも爾等の體と靈とを以て

「光榮を神に歸せよ」(コリント前六の二十)てふ言を以て顯せり。神は自ら高く大にして光榮なるも、其人々に讚揚せらるゝは、神に務むる者が、凡そ彼等を見る者をして主を讚揚せしむるが如き生活を顯す時なり。ハリストスは吾人の祈禱中常に「爾の名は聖とせらるべし」と云ふことを命せられたり、即ち吾人の生活を以て讚揚すべしとの意なり。此名は吾人の惡しき生活にて潰さるゝが如く、善行の生活にて讚揚せられ、祝讚せられ、成聖せらるゝなり。ハリストスの言の意味は左の如し、爾の名が吾人によりても祝讚せらるゝ様、吾人をして常に善行の生活を送らしめ給へとなり。「願はくは日の出づる處より日の入る處まで主の名を讚榮せられん」(節三)。爾は如何に預言者が新しき生活を始め、又ハリストスの教會の高尙なる價値を顯すを見るか。既にパレスチナにあらず、イウデヤにあらず、乃ち全世界に於て「讚榮せらる」。而して此事の應じたるは、吾人の教會の榮え始めたる其時にあらずや。往昔神の名はパレスチナに於て讚揚せられざりしのみならず、彼處に居住せしイウデヤ人によりて衰潰されたり。預言者曰く「我が名は爾等の爲に異邦人の中にけがさる」(イサイヤ書五十二の五)と。然るに今や此名は全世界に讚榮せらるゝに至れり。他の預言者も之を言ひ顯しつゝ、「主は顯れて異邦の諸神を亡さん、而

して異邦人は皆己の國より彼を叩拜せん(三の十一)といひ、又他の預言者は「爾等我が壇の上に徒らに火をたくこと無からん爲に爾等の中一人扉を閉る者あらまほし、日の出づる處より没る處までの列國の中に我が名は大ならん、又何處にても香と潔き獻物を我が名に獻げん」(マラヒヤ書一)といへり。

二。爾は如何に神がイウデヤの奉事を排斥し、之を廢止して全世界に吾人の教會の生活と奉事とを預告し及び弘布めたるを見るか。之を言ひし所の預言者は「ワウロン」の虜より還りし後に生存し、同時に傳道せり、是れイウデヤ人等が預言者の傳へし所のことは破壊イエルサリムの及びワウロン」の虜に就きて語るなりと云はざらん爲なり。イウデヤ人の虜の時期已に終り、己が以前の一般生活に還りし時に際して此事を語げしは、天使(マラヒヤ)にして、彼はエスバシアン及びテートの時に行はれし破壊及び斯る艱難の爾後なかるべきを吾人の教會の事業は既に其後を承継きたるが故に預告せり。是に由りて預言者は「列國の中に我が名は大ならん」(マラヒヤ書一)と云ふ即ち爰にも「主の名は崇め讃められん」と云はるゝ如く、彼等の生活にて讃揚せらるゝとなり。

『主は高く萬民の上に在り』(節四)爾は復び民が神に奉事し、而も或二三の民

にあらず、乃ち全世界住民の奉事するを見るか。何ものか此預言より明瞭なるものあらん。何故に主は「高く萬民の上に在るか」。吾人は彼を讃揚するも之に高きを加へざるに因るか。否、吾人は教誨奉事叩拜及び其他凡てのことに於てイウデヤ人の如く神に輕蔑を顯はさずして、一層最善高尚なることを顯せばなり。教會の生活は斯くの如きものなり、天の地より高きが如く、此生活は古の生活よりも高尚なり。是故に預言者は「主は高く萬民の上に在り」と云ふ。吾人は奉事を以て神を讚美しつゝ、此事も亦神の吾人に對する寛容なるを知る、何となれば吾人の奉事は、縦し古の奉事より高尚なりとも、而も神の徳と較ぶる時は極めて微小なればなり。バズルは現世に於て認識すること來世に於て認識することとの相違を示しつゝ、「我童子たりし時、童子の如く言ひ、童子の如く思ひ、童子の如く謀れり、人と成りて後は、童子の事を息めたり」(コリント前書一)と云ひ、又「我等は知ること全からず、預言すること全からず。今は我等鏡に緣りて見るが如く、見ること朦朧なり、其時は面を合せて觀ん」(コリント前書一)と云へり。彼は之を以て嬰兒の大人より劣るが如く、現世に於て認識することの來世に於ける認識より劣ることを言ひ、顯はせるなり。『其光榮は諸天の上に在り』。預言者は人の行を以て神を讚美、頌

揚すべきを述べ、又斯くの如く神を讚美頌揚すべきを教へ、特に斯る讚美の何處に行はるゝかを示しつゝ、一層大なる善行に吾人を奨励す。此讚美は何處に行はるか。天上に於てす。彼處には神の光榮あり。天使等は特に神を讚揚す、其讚揚するは當にその天性によるのみならず、己の務むる人々に神の希望と誠命を行ふことを熱心に助けつゝ、彼等の讚美することを人々に聴かしめん爲なり。然れば預言者は「能力を具へ其言を行ふ者よ」(聖詠百二)といへり。又ハリストスは福音の中に左の如く祈禱すべきを誡めたり、曰く「爾の旨は天に行はるゝが如く、地にも行はれん」(福音六の十)と、即ち天使等が諸悪を遠ざけ、熱心に善を行ひつゝ、神の名を聖ならしむるが如く、吾人も亦之を聖ならしむべしとなり。是れ預言者は愛にも「其光榮は諸天の上」に在ること」を言ひ顯すなり。然れば地上に見ゆる造物及び整然たる天をのみ見ずして、智慧を以て感覺のことより靈的のこと、彼處にある者の美と光明なる生活とに上せよ、然らば爾如何様に「其光榮の諸天の上」に在るかを識らん。

「孰か主我が神の如くならん、彼は高處に居り俯して臨む」(五節)。
 一見する時は此等の言は如何に高きか。然れども此等の言が何者に就きて述べ

られしかを想ふ時は、その甚だ足らざるを覺ゆ。我が嘗て述べし如く、愛にも言語の上に止まらずして、意義を取らざるべからず。實際天地に充滿し、何處にも在し「我はたい近くに於てのみ神たらんや、遠くに於ても神たるにあらずや」(イエレミヤ書二三)と言ひし者「指を伸して天を」はかり、又地の塵を量器にもり「地球の遙か上に坐る者」(イサイヤ書四十二)は如何で天の上に住居するを得んや。然れども預言者はイウデヤ人に對して述べしにより、漸次彼等の靈を向上せしめ、且つ漸次に彼等の智慧を奮勵しつゝ、斯る表言を用ふるなり。然れば預言者は單に「彼は高處にあり、俯して臨む」と云はず先づ「孰か主我が神の如くならん」といひて後「彼は高處にあり、俯して臨む」と附加したり、彼は何の爲に後の言を云ふかを示さん爲に前の言をいへり、即ち偶像崇拜に傾き、一定の場所と殿堂に入れ置かるゝ諸神に叩拜するイウデヤ人の弱さによりて然か爲しゝなり。されば預言者は又我が前に言ひし如く、今も數々言ふことを止めざるが如く、己の説話を聴衆の在弱に適應させつゝ、神は比較されぬ程諸神に卓絶すと雖も比較を取りしなり。彼の處る所は、神の光榮に適當なることを如何に話すべきかにあらず、話されたことの聴衆の爲に如何に理解されしかと云ふに居り。然れば彼は漸次彼等を高め、而も卑

近なる見解に止まることなく復び他の高尚なる見解を發見せり。彼は「高處に居り、俯して臨み」と言ひて、復び説話を高尚なることに上せ「天と地とを」と云ひて、神は何處にも在り、彼處にも此處にも在すことを言ひ表せり。彼の視るや、恰も天の中に籠められたる者の遠方より地上を視るが如くにあらす乃ち何處にも在り及び凡ての者と偕に在す者の如くに視るなり。

三。爾は預言者が如何に漸次聴衆の智慧を高むるを見るか。斯くの如く聴衆を地より高めて天に進め、之をして復び高尚なる事を思考するに向はしめつゝ、次で彼は神の能力の他の證據に移りて「泥より乏しき者を舉げ、塵より貧しき者を援けて」といへり。微小なるものを高く上ぐるは大にして且つ言ふべからざる能力の作爲なり。之に反して他の個所に於て神は高きものを抑ゆることを述べ、例令ば「彼は滅亡を強者に臨ましむ、滅亡つひに城に臨む」(五ノ九)とあるが如き是なり。たゞ神は愛に小なる者をも舉げ得ることを云ふなり。説話の一般の意味は斯くの如きも、若し何人か之を寓意の意味に解せんと欲する者あらば、此は異邦人の上に行はれたるを見、又吾人即ちハリストス降臨後に住居する人民の上にも行はれたるを見ん。何ものか吾人の天性より憐なるものあらん。然

れどハリストスは之を高め、之を天に昇せ、父の寶座に坐せしめたり。「塵より貧しき者を援け、之を牧伯、即ち其民の牧伯と共に坐せしめ」(節八)。彼は愛に凡てのことは神の爲に容易にして便誼なることを説きつゝ、腐敗と其より生ずる個々の變遷を塵と名づく。次に彼は他の最も重大なる事に移れり。如何なることに移りしか。神は常に事情を變じ、足らざるをば完全に補ひ得るのみならず、自然法を變じて妊まざる婦をも母となすことを得。曰く「妊まざる婦を子の爲に歡ぶ母として家に居らしむ」と。此はアンナの上に応じ、多くの他の婦人の上にも應じたり。爾は唱歌の如何に完全に如何に圓滿なるを見るか。預言者は全世界の矯正は如何に行はるゝか、「イウデヤ」教は如何に廢るゝか、教會の新しき生活は如何に輝くか、献祭は如何に到處に献せらるゝかを言へり、次に彼は野鄙なる人々にも己の言の信用されんことを望みつゝ、既にありしことを以て未來に關する己の説話を固む。彼の言の意味は左の如し、人は斯る變遷あることと神は棄てられたる民をも至大なる光榮に導くことを疑ふ勿れ。爾は此事が如何に毎日行はれ、謙遜なる者は高うせられて牧伯と偕に坐するを見るか。爾は傷害されし天性の如何に矯正せられ、妊まざる婦の如何に母となりしを見るか。之

に似たる或ことは教會にも生ぜり、即ち教會は妊まざる者たりしも、多くの子女の母となれり。是故にイサイヤは教會の中に生ずべきことを預報しつゝいへり「なんぢ孕ます子を生まざる者よ、歌うたふべし、産の苦なき者よ、聲を發ちて囀ひ呼ばはれ、夫なき者の子は嫁げる者の子より多し」と（イサイヤ書五十四の二）斯くの如く爰に預言者は既に行はれし事件及び神の威嚴を以て預言の信用すべきことを證しつゝ、説話を終れり。神に喜ばるゝことの行はるゝや容易にして萬有をも變化し、謙遜なる者を高め、氣質をも矯正することを得。然れば吾人は此等のことを知りて吾人の方よりも適當なることを行はん、然らば吾人は凡ての光榮を受け得、言はれぬ高きに上りつゝ、光榮、權能の父と子と聖神に、今も何時も世々に歸する所の神の佑助を受けん。アミン。

第百十三 聖詠講話

イスラ イリ エギプトより出て、イアコフの家、異邦民（原民とあり）より出てし時、イウダは神の聖所となり、イズラ
イリは其領地となれり（二節）

一。爰に預言者は神の大なる寛容と慈憐とを證す。如何なることを以て證するか。彼は先づ己の能力を顯し、然る後叩拜を自己に要求することを以て之を證せり。預言者の『イスラ イリ エギプトより出て、イアコフの家、異邦民より出てし時』てふ言は此事を顯し、なり。言ふ意は、その時神はエギプト及び曠野に於ける休徴を以て己の能を顯し、又當時彼はイスラ イリの民を我が有となせりと作り。然れば神はアダムにも左の如く行へり、即ち預め世界を造りて己が睿智と權能を示し、然る後人を造りて之に己を叩拜すべきことを要求せり。又神の獨一子も前以て多くの種々なる休徴を顯し、然る後人々に信仰を要求せり。然れば神の子は初彼に來りしも、尙未だ其神出の聘質と證據とを彼より受けざりし人々に對して『我が之を造り得ることを信せざるか』とは云はずして、唯休徴を示せり。彼は體の病を癒し、惡を滅ぼし、天國のことを宣べ、救贖の律法を傳へつゝ、全パレスチナに己が能力の記念を留めたりし時、彼に來れる人々に始めて信仰を要求せり。人々は先づ權力を得ることを力め、然る後善行をなし始むるも、神は善行より始め給ふなり。實に神が世界の爲に行爲を以て己が配慮を示して、先づ十字架の苦を受け、然る後世界に勝てるに際して、我は既に他の善行に就きて云ふの必

要を認めざるなり。預言者は爰に『イスライリエギプトより出で、イア
 コフの家異邦民より出でし時、イウダは神の聖所となり』てふ言
 を以て此事を表言すなり。『出で』とは即ちエギプトより遠ざかる時、エギプトを
 脱るゝ時の意なり。預言者は單『エギプトより』と云はず、乃ち神の配慮を示
 しつゝ、敵の名稱を以て『異邦民より』と附加へたり。彼等若し勇毅なる手及び
 勝たれぬ右の手の佑助を受けざりせば、斯る残忍無情なる異邦のエギプト人より
 救はれざりしならん。實にエギプト人は猛獸よりも兇猛に、石よりも頑固なり、彼
 等は無數の打撃に遭ひて柔がざりき。然れば預言者は之を異邦民と名づけて、神
 が斯る野鄙にして残酷なる民を一部をば説服せしめ、一部をば、彼等の意志に反し
 て奴隸を解放せしめ、然る後之を海中に溺らし、斯くして已の民を救ひし神の能力
 の卓越せることを顯せり。

『イウダは神の聖所となり』とは何の意なるか。之を言ひ換ふれば、神に務
 むる民に忠實なる民に所有さるゝ民となれりとなり。『聖所』と名づけられ
 たるは、ザハリヤが或疑問者の爲に約櫃及び其他のもの、還ることを示しつゝ、『若し
 爰に聖物の入り來らば』齋せん(ザハリヤ三)といへる如く、聖堂なり、聖所なり、至聖所なり。

『イウダは神の聖所となれり』。先にイウダは不潔にして軽蔑すべき國た
 りしが、イスライリ民の此處に入りし時、神の聖所となれり』即ちイウダは律
 法を守ることを、献祭奉神禮及び其他の聖なる儀式を以て聖所となりしなり。『イス
 ライリは其領地となれり』。此言は何を意味するか。神に屬したることを
 意味するなり。縦ひ全世界は神の權内にありと雖も、此等の人民は特に神に近き
 によりても其權の下にありしなり。預言者は彼等に豫言を傳へ、特に彼等と談話
 してその行爲を整へたり。此等の民は尙他の關係に於て、即ち彼等は神の手に
 從ひて數々戦に出で、又他の多くのことを企てたることに於ても神の民たりき。
 神は彼等を蠻人の手脈制奴隸非常なる危険と不幸より救ひて其王となれり。然
 れば神は他の個所に於て己を義とし及び前以て自ら己より彼等に與へ、然る後彼
 等に報を要求したることを示しつゝ、『我はイスライリの爲に曠野となりしや、果を
 結ばざる地となりしや』(イエレミヤ三十一)といへり。此等の言の意味は左の如し、曰く、我
 は爾等の爲に果を結ばざる者たりしか。我は爾等に無數の福を與へざりしか。
 我は爾等の爲に自然を變化せざりしか。我は元行をして爾等に務めしめざりし
 か。人々の困難より自由なる生命を爾等に賜はざりしかと。是によりて彼は又

『イスラエルの爲に曠野となりしや』と言へり、即ち我は爾等に無数の福を與へざりしか、即ち我等をエギベトより出し、蠻人より救ひ、奇蹟を現はし、曠野に於て生活するを得しめ、パレスチナを相續し、異邦民を征服し、斷えず戦利品と勝利とを得しめ、絶えず奇蹟休徴を顯し、豊穰なる土地を與へ、爾等の種族を繁殖せしめ、全世界に光榮及び其他のことを顯はさしりしかの意なり。爾は神の仁慈を見るか。是に由りて神は『果を結ばざる地となりしや』と附加へたり、即ち爾等は我より無数の果實を利用ざりしか。我は出入の時爾等の家畜牧群および飲食物を祝福せざりしか。我は安全に爾等を守らざりしか。爾等を近づくべからざる者畏るべき者勝たれぬ者と爲さしりしか。凡てのものは爾等に對ひて泉より湧き出づるが如く、地と天より流れざりしかとなり。主宰は臣下のことを慮り、彼等の爲に痛心するによりて特に己を顯すなり。

二。然ればハリストスも『善き牧者は名譽と奉事とを受くとは言はずして』己の生命を羊の爲に捐つ(イオアン十一)といへり。智なる有權者と牧者とは己の利益を輕んじて臣下の幸福を慮る者なり。首長は醫師に等し、或は醫師に勝る。醫師は其技術を以て治療を行ふも、首長は其技術を行ふの外更に己の危険を冒して治療をな

す。甘んじて頬を打たれ、十字架に釘うたれ、無数の苦難を受けられしハリストスは斯くの如く行へり。是に由りてパウルも『蓋ハリストスも己を悦ばしめざりき、乃録されしが如し、云く爾を辱むる辱は我に及べり』(五の三)といへり。然れば豫言者は爰に二三の仁慈を數へて、神は蠻人よりイウデヤ人を救ひ、異種族の手より之を自由にし、奴隷より引出し、イウデヤ人の勞苦艱難を鎮め、無数の奇蹟を行ひて、彼等を己の『聖所』となし、又己の臣下となせり。『神が彼等を選びて己の臣下となしたるは小なる仁慈にはあらざるなり』といへり。『海は見て走り、イオルダンは後へ退けり』(三)。視よ、彼は如何に説話を強めて大なる仁慈を示すを。言ふ意は自然物が民の先導者を見て、其將軍に途を與へ、之に従ひ、之に譲りつゝ、後へ退きたるに際して、何の爲に蠻人と異邦人のことを述べることなり。實に當時凡てのものがエウレイ民に従ひ、之に譲りたるは、是れ彼等の遭遇したる事が皆人の勞力の結果にあらず、神聖にして言ふべからざる能力の奇異なる結果たることを知らしめん爲なり。又豫言者の表言の如何に麗しきかを認めよ。豫言者は退けり、或は遠ざかれりと云はずして、『海は見て走り』といへり。『走り』てふ表言を以て、彼は退却の迅速、恐懼の力、神の作爲の容易なることを示さんと欲するなり。

而して何人か此現象が定時の現象若くは偶然の現象にして其時以後既に生せず、乃ち唯神の命じ給ひし時に嘗て在りしなりと思はざらん爲に、種々なる人々に個々別々に作動せり。秩序なき水の流は神の命令によりて恰も智あるもの、如く、活物の如く或人々を救ひしも、或人々をば之を滅し、或人々の爲には墳墓となりしも、或人々の爲には車となれり。ワテロン^{ワテロン}の爐に於ても同様に見ることを得。普通の如く平常の如く燃えたりし火は神之に命じ給ひしにより大なる辨別力を顯して其中に在りし或人々を救ひしも、却て其外に在りし或人々を包圍して之を殺せり。『イオルダンは後へ退けり』。爾は如何に種々なる時と場所とに奇蹟の行はれしを見るか。神はイウデヤ人に神の能力が到る處に廣まり場所にて限られざることを知らしめん爲に、曠野となく、野蠻國となく、海に河に、モイセイの時にも、イイススの時にも、何處に於ても奇蹟を行へり、又到る處に奇蹟を伴ふに休微を以てしたるは、イウデヤ人が奇蹟を以て己が無感覺なる靈と野鄙なる智慧を柔らげて順良なる者となり、敬神者とならん爲なり。『山は牡羊の如く躍り、邱は羔の如く躍れり』(四)。爰に緊要なる問題は吾人に顯さるゝなり。或者は疑を起して吾人は前に述べられたる事のなき事なりしを知る、歴史は吾人にイイス

ライリ人の出づる時埃及をに紅海は分れ、又約櫃のイオルダンを通過せし時其水は後へ退きたる事を傳へたり、然れど山及び邱の走りしことに就きては吾人未だ何の書に記載して證したるを見ずと云ふ。吾人は之に對して何事をか述べべき。預言者は最も強く己の喜悦と奇蹟の偉大なるを顯はさんと欲して、喜ぶ人々に數々在るが如く、無生物を以て遊び躍る者と顯せるなり。是によりて彼は『牡羊の如く羔の如く』と云ふが如き比喩的言語を用ふ、此等不言の動物の喜ぶや、躍りて己の喜を顯せばなり。他の預言者が艱難を言ひ顯しつゝ、葡萄も歎き、葡萄酒も泣けり(イサイイナ書^{二十四の七})と言ふは葡萄の實に歎きたるを云ふにあらす、葡萄豈歎かんや、乃ち悲哀の甚だしきを顯さんと欲して之を誇大にし、無生物をも悲哀に與る者として顯したるが如く、爰にも預言者が造物を以て喜に與る者として顯し、は、此喜の偉大なることを示さん爲なり。然れば吾人も亦或高貴の人を迎へ、及び其人によりて生ずる喜を顯さんと欲しつゝ、通例爾は(貴人)我が家を喜悦に充せりと云ふも家の壁を指して云ふにあらす、喜の非常なるを言ひ顯せるなり。『海よ、爾何事に遇ひて走りしか、イオルダンは、爾何事に遇ひて後へ退きしか、山は牡羊の如く躍り、邱は羔の如く躍れり』(五)。説話は疑問の

體にて續き再び自然物を以て躍る者の如く象れり。預言者は彼處にありては造物に感覺を歸せず乃ち喜の非常なると行はれし事の偉大なるを示さんと欲して叙したるが如く爰にも亦造物に對して問を設くるは其感覺ありて答へ得るが故にあらす乃ち最も明かに事物を言ひ顯し且つ其奇異なることを示さん爲なり。

三。預言者は或る新しき非常なるもの、生じたるにより斯る問を設けて自ら答ふるなり。如何なる答なるか。「地よ、主の顔の前、イアコフの神の顔の前、前に震へ」(七)爰に再び事件の偉大なるを示さんが爲に、「震へ」てふ言を以て驚異と大悦とを顯せり。

是に由りて彼は此人(イアコフ)の善行の如何に大なるかを示さんと欲して僕の名を主の名と合せたり。然ればバヰルも大なる名譽を諸聖人に歸し又之を彼等が世の凡てのことより離れたることに歸す。彼は嘗に此名譽に就きて記憶するのみならず聽衆に斯る特權を得るの方法を示さん爲に此名譽の原因をも述べたり。如何なる特權に就きて述べしか。神が僕の名を以てイアコフの神と云ふが如き名づけられたることなり。バヰルは此理由によりて「神は彼等を耻とせずして己を彼等の神と稱す」(十一の十六)といへり。如何にして神は彼等の神と名づけられし

か。彼は「我はアウラムの神イサアクの神イアコフの神なり」(出埃及記)といへり。使徒は前に神が斯く名づけられし其の理由を述べつ、「此等は昔許約せられし所を受けずして死し唯遙かに之れを望みて旅人の如く寄寓者の如く接吻して承認せり」と云へり。是れ其の理由なり—故に「神は彼等を耻とせずして己を彼等の神と稱す」(エツレイ書)と續く。我に告げよ、是れは如何なる理由なるか。彼等が己を旅人なり、寄寓者なりと認め、現世に如何なる執着をも有せず乃ち世の凡てのことより遠ざかり、斯くの如くにして他國に居住したることなり。「彼磐を變じて池となし、切分けられざる(原書には斯く記るせども正教會譯の聖詠には此の言なし)石を變じて水の泉となす」(八)我に告げよ、堅牢頑硬にして切分けられざる磐の神の命令に従ふに際して智識を以て飾られたる最も華美しき造物たる人間にして石よりも無感覺となり、又残忍頑固とならば如何で赦されんや。預言者の「切分けられざる石」といへるは、容易に鐵に譲らず、單に表面より撃ち碎かんとするも容易に破り難く、其堅牢鐵にも劣らざる石のことを言へるなり。然れども彼曰く、其石も亦己が自然の性質を變じて水の泉を生せりと。萬有の造物主は萬物を無より造りしことを示しつ、數々多くの場合に於て行ふが

如く、自然の法則を變じ、其法則に反對なる動作を顯すことあり。斯くの如く預言者は古の仁慈、奇蹟、休徴に就きて、神は異種族の中に奴隸たりしイウデヤ人を如何様にして救ひしか、如何様に之を引出して自由にしたるか、如何様に自然物を變化して萬有を喜に満たしめたるかを述べて、今や現在のことに向ふなり、而して前に述べたる奇蹟休徴の行はれしは仁慈を受けたる人々の功勞によるにあらず、乃ち神の仁愛によりて、又「彼の名の爲なり」即ち神の言ひし如く「我が名の瀆されず」(イサヤ九)乃ち衆人が神の行爲よりしてその能力と權能を見且つ此事に習はん爲なり、斯くの如く今も預言者は同一の理由によりて、吾人たとひ生活を矯正せず、又己の行爲を辯解し得ずとも、嘗てモイセイも言ひしが如く「爾の名の爲に」爲せとはいふなり。聖詠者も彼と一致して「我等にあらず、主よ、我等に非ず、乃ち爾の名に光榮を歸せよ」(九)といへり。言ふ意は、我等の爲にあらず、我等を最も光榮なる者となし、著しき者となさん爲にあらず、乃ち爾の能力の著しからん爲なりとなり。神の名は神が保護し助くる時に讃揚せらるゝが如く、吾人が善を行ひて生活し己の行爲を以て輝く時も亦讃揚せらるゝなり。主言へり「爾等の光は人々の前に照るべし、彼等が爾等の善き行を見て天に在す爾等の父を讃榮せん爲

なり」(マタイ十六)と。又神の名は吾人の善良なる生活を以て讃揚せらるゝが如く、之に反して吾人の惡しき生活によりて褻瀆さるゝなり。神之を示しつゝ、預言者を以て我が名は爾等の爲に異邦人の中に瀆されたり」(イサヤ五)といへり。斯くの如く聖詠者は何事を以てするもイウデヤ人を義とすること能はざるにより、モイセイの爲し、が如く此事に趨れるなり。然れど人々の救贖を慮る所の神は常に斯く行ひ給はず。彼若し常に斯く行ひしならば思慮乏しき多くの人は、神は己が光榮の爲に常に彼等を救ふを以て必ず艱難より吾人を救ひ給ふべしとの大なる希望を有しつゝ、一層惡しき者となりしならん。然れども斯る事なかるべし、何となれば神は人々の救贖を慮る程に己の光榮を慮らざればなり。時としては人々も名譽を輕んずることあり、況して何事をも吾人に須たざる神をや。然れども我が言ひし如く、預言者は彼等の爲に中保して彼等を保護し能ふことを顯し、又救はるゝ者の大に不當なるを示しつゝ、二次「我等に非ず、主よ、我等に非ず、乃爾の名に光榮を歸せよ」てふ表言を重複せり。吾人は無数の艱難を受くべきなり、然れども「爾の名は瀆されざるべし。爾の憐に縁り、爾の眞實に縁る」。爾は如何に明かに預言者

自らも神が数々己の光榮のことを忘れつゝ、唯罪人の矯正に就きて慮れることを知りしを見ん。是に由りて彼は「爾の憐に縁り、爾の眞實に縁る」と附加へたり即ち己の憐によりて吾人に扶助を顯せよの意なり、爾神若し人々より光榮を受くることを望まざる時は「爾の憐に縁り、爾の眞實に縁る」なり。神は憐みつゝ、光榮を受くるのみならず、乃ち罰しつゝ、亦實に光榮を受く、然れども預言者は言へり、我等に斯く行ふ勿れ、唯「爾の憐に縁りて行ひ給へ。吾人は己の生活と行爲とを以て爾の名に光榮を歸せざるべからず、然れども吾人は之をなさいるが故に己の寛容によりて慈憐と仁愛とによりて吾人に行ひ給へ」と「異邦人何爲れぞ彼等の神は何に在ると云ふ」(節十)。

四。我は今も多くの者が祈禱する時、此等の言を數々繰返すを聞く。然れども何時か彼等が他の意味を以て「彼等の神は何に在る」と云はんことを畏る―何時かとは多くの者が辱ひ凌辱め及び無數の嫌ふべく惡むべきことを行ふ時なり。

『我等の神は天に在り、地に在り、凡そ欲する所を行ふ』(節十一)。爰に預言者は無智なる迷謬に對して云ふ也。預言者は彼等の中多くの者が神あることを知らざるにより斯る迷謬を亡ぼすが爲に『我等の神は天に在り、凡そ欲

する所を行ふ』といへるなり。神若し天に在らば、況して地上をや。『天に在り、凡そ欲する所を行ふ』とは何の意なるか。爰に彼は天軍其無數の集會、或は容易に行はるゝ所の神の命令を意味す。縦ひ大なる騷擾及び不規律の地上に存するとも驚く勿れ。此は人々の惡よりし、罪人の惡癖より生ずるも、神の無力より生ずるにはあらざるなり。

凡そ天上に行はるゝとは神の能力と權柄とを證す。地上に於て然らざるは己を不當なる者となし、所の人々の罪なり。此表言を尙他の意味に理解することを得、即ち神は己の恒忍によりて多くのことの爲に尙相當に罰せざることにも理解するを得。仁慈なる神が不虔者を凡ての犯罪の爲に直に罰することを欲せざるによりて、不虔者も義人に勝ち居る也。然らずんば我々人類は久しく亡されたりしならん。預言者は爰に神は罰することに於ても權能ありと云ふ―是れ天上に於ける神の行爲より見ゆ―然れど神は萬事に於て恒忍を守り、惡しき生活をなす者を悔改に向はしめつゝ、罰を行はざるなり『彼等の偶像は乃銀乃金、人の手の造工なり。彼口ありて言はず、目ありて見ず、耳ありて聽かず、鼻ありて嗅がず、手ありて捫らず、足ありて行かず、其喉は聲を出

さず願はくは之を造る者と凡そ之を恃む者とは是と相似ん」
 (自十二節) 預言者は第五聖詠に於ては偶像崇拜者の無智を記しつゝ己の男子
 己の女子を以て悪魔に獻祭せり(聖詠百五)といひ此聖詠に於ては偶像の無感覺なる
 を示し其肢體を算立てつゝ此死物に執着する者を笑へり次に彼は「願はくは
 之を造る者と凡そ之を恃む者とは是と相似ん」と附加ふ。縦ひ神に
 似るとは善行なれども爰に此似るとは詛に當るなり。異邦の諸神に似ること
 して全然詛に當らば其諸神の如何なる者なるかを想像し得べし。預言者は偶像
 崇拜者の極端なる無智を観察し之を笑ふべきものと顯して己の説話を組み立つ
 るや宜なり。

我に告げよ非常なる破廉耻を顯す所の偶像に執着するは實際に笑ふべきことなら
 すや。誰か裸體の婦人を見んと欲したる。而も悪鬼は裸體に畫かれて坐し居る
 なり。偶像は放蕩或は男子に對する無智の情慾を畫けるものなり。偶像の驚は
 何を示すや。ガニメドは何を示すや。處女を窺むるアポロンは何を示すや。
 其他嫌ひ惡むべき繪畫は何を示すや。到る處に淫慾あり到る處に放蕩あり到る
 處に不法なる血屬姦淫と狂暴なる情慾の繪畫あり。偶像も祭典も壯嚴なる集會

と、その儀式も亦破廉耻の表徴なり記念物なり學校なり否啻に破廉耻のみならず
 殺人の表徴たり記念物たり學校たるなり。彼等は之を以て鬼をも讚美す。偶像
 には放蕩不節制なる大酒殘忍酷薄殺人の外何ものもあるなし。諸人の見るが如く
 偶像の祭典は皆此等の事によりて成立つなり。斯くの如く預言者は偶像の無感
 覺及び偶像を信仰する人人の無智なるを嘲笑し之を神を讚美することに向けて
 「イスラエリの家よ、主を恃め、彼は我が助なり、盾なりアアロン
 の家よ、主を恃め、彼は我が助なり、主を畏る者よ、主を恃め、彼は
 我が助なり、盾なり」(自十七節)といへり。彼は此等の言を以て神の能力と神
 が衆人の前に比較されぬ程卓越せることを畫けるなり。預言者はイウデヤ民の
 間に行はれたる事を記しつゝ神の二様或は三様の仁慈を示せり。第一、神がイウ
 デヤ人を悪鬼より救ひしこと、第二、彼等に神に就きての智識を傳へしこと、第三、神
 がその扶助を彼等に賜ひしこと是なり。
 今預言者はイスラエリのこと、祭司の族のこと、及び異邦人より神に歸依したる者
 のとに就きて別々に述べたり、司祭及び俗人は互に同等ならず、司祭は或特權を有
 するが故に、彼は正しく區別をなせるなり。實に大なる名譽は司祭等に與へられ

たり。

五。次に預言者は神の照管の獨りイウデヤ人にのみ限らざることを示さんと欲して、神がその扶助と祝福とを衆人の上に擴めたることを表言はしつゝ、異邦人より歸正したる新信者に就きても記念せり。『主は我等を記念し、我等に福を降し、イスライリの家に福を降し、アアロンの家に福を降し、主を畏るゝ者に福を降せり』(二十節)。「福を降せり」とは何の意なるか。無数の福を賜へりの意也。人も亦我が靈よ、主を讃め揚よ(聖徒百)とあるが如く神を讃揚す。然れど人は神を讃揚しながら自己に光照を受けながら神に何物をも得させず自ら益を得るも、神は福を降しつゝ、吾人を光照して何物をも吾人に要求せざれば也。然れば吾人は神の福を降す時も益を得、吾人が神を讃揚する時にも益を得る也。神は如何様にイウデヤ人を祝福したるか、彼は之に天より餅を與へ、露より水を出し、彼等の出入を守り、彼等の家畜を繁殖せしめ、彼等を選民王たる祭司と名つけ、律法を與へ、諸預言者を遣せり。預言者は又他の個所に於て告ていへり、『彼は他の何の民にも之を行はざりき、彼等は其定を知らず』(聖徒百四)と、他の預言者も『何の國人が斯くの如く智にして神之に近く在すぞ』(聖徒百七)といへり。『小大の別

なく』とは一種族も祝福を奪はれずして凡ての人々の上に擴められたりとの意なり。『願はくは主は爾等に増し加へ、爾等及び爾等の子孫に増し加へん』(二十節)爾は他種の祝福の増したるを見るか。

是に由りて或預言者は罰の狀態に於て反對の結果を願しつゝ、吾等は全地に住する諸民よりも貶され、且つ小なる者なりといへり(三の三十七)。イウデヤ民には無数の障害困難、窘迫、看守者の冷酷ありしと雖も、此祝福をエギベトに於て受けたり、然れども神の言は毫も廢まざりき。神の祝福も亦二百年間に於て彼等が六十萬人に繁殖したる程に行はれたり。當時祝福は此繁殖中に存したりしも、今や新約に於ては他の一層之に勝るとの中に存するなり。然ればパウロは『祝讃せらるゝ哉、神彼のハリストスに縁りて、天に於て凡の屬神の祝福を以て我等を祝福せり』といひ、又『我等が凡を求むる所、或は思ふ所よりも極めて多く爲すを得る者には、願はくは光照は教會に於て歸せん』(エペソ書二の)といへり、然れば古の預言者等も仁慈を示さんと欲して同様の祝福を與へたり。エリセイは彼を厚遇したる婦人に子を賜ふことを以て報いたるが如き是なり。新約の祝福となるものは斯の如きとにあらずして、之よりも一層善なることなりとす。然れば紫布の商人の使等々に求めしは斯るこ

とにてはあらざりき。何事を求めしか。曰く「爾等若し我を視て主に忠なりとせば入りて我が家に居れ」(使徒行實十)と。

爾は舊新約の間に如何なる差違あるを見るか。即ち舊約に於ては彼等は何事を希望し、又今は何事を希望するを見るか。ハリストスも爾等の名の天に録されしを喜と爲せ(十の二十)といひ、パウロも「神は爾等を信に由りて凡の喜と平安とに充たさん、爾等が聖神の能に縁りて望に豊ならん爲なり」(ローマ書十)といへり。爾は得も云はれざる福を與ふる所の祝福、其中に如何なる地のことをも含まざる祝福の能力を見るか。又パウロは「神は速にサタナを爾等の足下に倒さん」(六の二十)といへり。然れど人人の最も感覺に傾き、又祝福の事件も感覺的のとの多かりし舊約に於ては子女の多きとをも至大なる幸福と數へたるなり。死は罪より生じたるが故に神は人類を慰め、之を亡さず、全く亡滅に附さず、以前にも増して數限なく繁殖せしむることを示さんと欲しつゝ、「生めよ増殖よ」(創世記)といへり。死は即ち眠りなると明かになりて童貞の徳は彌々明かになり。是故にパウロは「人皆節制に於て我の如くならんことを願ふ」といひ。又「男は女に觸れざるを善とす」(コリント前)といひ、ハリストスも「天國の爲に自ら閹せし閹者あり」(マタイ福音)といへり。然れど古昔に於ても神

は暗に善人の必要なるを告げたるも、唯子女の多きとをば必要なりと云はざりしなり。然れば睿智者が「若し彼等子女の中に神の畏なくば無益なる子女の多からんことを望む勿れ、彼等の多きを待む勿れ、千人(罪人)のあらんよりは、一人(義人)のあらんを勝れりとす。又不虔なる子女を有たんより子女なくして死するを勝れりとす」及び「千人の不法者あらんよりは、一人の主の意旨を行ふ者あるを勝れりとす」(ラフ一五四)と云ふを聞け。然れども常に感情に傾き善行に注意せざりし無智なるイウデヤ人の間に善行の乏しくなりし時、多回彼等を亡滅に付せり。「爾等は主に降福せられたり」(三十) 彼が「主に」と加へたるや善し、此祝福は特別なる祝福なり。祝福は人々よりも受け得らるゝも、此祝福は人事に關す、然れど主の祝福は至と大なるものなり。人々は富權柄名譽を有する者を祝福して讚美稱揚するも、斯る祝福は暫時的にして縦ひ續くとするも如何なる益をも來さざるなり。然れど神の祝福は永遠にして其益や至て大なり。「天地を造りし主に」。

六。爾は此祝福の如何なる力あるを見るか。神の言は實行となりて顯はれ、又天を造れり。預言者いへり「天は主の言にて造られたり」(聖詠三十)と。彼は斯く權ある此言を以て爾をも祝福するなり。

『天は主の天なり、地は彼之を人の諸子に與へたり』(二十)爾は何を云ふか。神は天を己の住居に擇び、而も高き場所を占めて吾人には此地を住居と定めたるか。否左にあらす、此は人々の見解に適當なる言なり。此事もし斯くありしならば、神の述べられし他の言、即ち『主いひ給ふ、我等は天地に充つるにあらすや』(三の二十四)てふ言は述ぶるを得ざりしならん。吾人若し其を文字通りに解して其中に含蓄する意義に注意を向けざりしならば、前後の言は相齟齬するに至らん。『天は主の天なり、地は彼之を人の諸子に與へたり』とは何の意なるか。彼は神を諸天の中に籠めずして、適當に言ひ顯せり。『天は彼の寶座なり、地は彼の足凳なり』(六十六の二)てふ言も、同じく『我等は天地に充つるにあらすや』てふ言も未だ全く神の價値を顯すに適せざれども、吾人に適應して云はれたるなり。神は或場所を要せず、乃ち萬物を保持しつゝ、凡てを包容し、凡てを負ふ、天は惡を以て穢されざる所なるによりて神の家と名づけらる。故に爰には『イズライリの子孫の數に照して諸の民の境界を定め給へり』(復舊律令書)或は『主は己の爲にイアコフの家を選べり』(百三十四)てふ言の中に見ゆるが如く、天は神の選ばれたる場所なりとは云はれざるなり。爰にイウデヤ人は彼に屬するも、他の人々は屬せずして神の照管と創造の作爲

をも奪はれしが如きを云ふにあらす。神は衆人に對して公なる神たるも、斯る表言は一見したる所他の人々にも勝りしが如き、彼等に神の愛を示さん爲に用ひられたるなり。而して神が獨り彼等を選ばずして衆人を照管したることは、モイセイ以前にもモイセイの時にも、モイセイ以後にも種々の場合に在りし事件によりて知るべし。然れば神は衆人に太陽と地と海、其他凡てのものを與へ、總じて自然法をも衆人に會得せしめたり。神はベルシヤ人アウラムを愛して移轉せしめたるも、アウラムを以てエギベト人をもハナアンに住民およびベルシヤ人をも悟らしめ、又その子孫を以て彼等の多くの隣人を矯正せしめたり。次に神はモイセイの生れたる時イウデヤ人に生じたる事件を以て、エギベト人、パレスチナの住民、次でワロン人を導きて神を知らしめたり。斯くの如く預言者は『天は主の天なり』と言へるは、主が諸惡より自由なる者として彼處に在すとを顯すなり。然れば爾も亦若し地に繋かれずして天の使とならば速かに天の上なる父の家に入らん、且つ復活に先だちて此處より移りて大なる價値を領けん。元老院議員に選ばれたる多くの人々が村に住居しつゝ、此名稱を負ふが如く、爾も亦若し天の市民たらんと欲せば、爰に地上に住居しながら其資格を有するを得

へし。
 『主を讚め揚ぐるは死者に非ず、凡そ墓に降る者に非ず、乃我等生ける者は主を崇め讚めて今より世々に迄らん』(廿五節) 預言者の爰に死者と名つくるは單に死せし者に非ず、不度の中に死せし者或は罪の中に朽果てし者のことなり。アウラム、イサク、イアコフは死後にも生く、生者の彼等を記念するに由る。然ればモイセイは其配下の民のために祈り、祈禱の中に民の事を記念しつゝ、彼等の名を以て神に祈願せり。又三少年は彼等の名を以て救はるゝことを祈りて、爾の愛するアウラム、爾の僕イサクと爾の聖なるイスライリの爲に爾の慈憐を我等より離す勿れ』(三の三十五)といへり。若し彼等にして斯る能力を有せば、彼等如何で死者たらんや。ハリストスも『死者に其死者を葬むるに任せよ』(マトス二)といひ、パウロも現世を逝りし者を死者と云はず、乃ち眠りし者を名つて『兄弟等よ、寝りし者に至りては我爾等が知らざるを欲せず』(コリノ一)といへり。義人は現世を終るも死せずして寝るなり。死後善き生命を受くべき者は、死後尙寝ぬるも無限の死之を待つ者に至ては生時既に死せるなり、死者たるなり。此等の者の中、後者は地獄に下るも前者は天に昇りて、ハリストスと偕に在らん。然れば預言

者も單に『生ける者』と云はず、己自らを示しつゝ、『我等生ける者』といへり。何故に預言者は單に『生ける者』と云はずして、『我等』と附加しや。パウロも『我等生きて主の來る迄存する者は寝りし者に先だゝらん』(コリノ一)といへり。爰に我等てふ附言は衆人に關せしむることを許さず、唯信者及び生活の状態によりてパウロに肖たる者にのみ關せしむるが如く、彼處に『我等生ける者』てふ附加はパウロの如く善行をなして生活する者を示すなり。『今より世々に迄らん』。爾は此附加も亦如何に同一の事を示すを見るか。何事の同一なるか。預言者が善行をなして生活する者に就きて言ふとなり。實に此世に生活する者の中常に光榮の生活をなさざる者は皆永久に生活せざる者なり。罪人も亦生活するも、罰と苦とを受けて切齒するに生活するなり、然れど善を行ひて生活する者は無形の軍と偕に奥密に神を讚頌しつゝ、光明と光榮の中に生活す。然れば吾人も此喜を以て樂むが爲に左の如き生活をなさん。是れ言語も智慧も其他何ものも顯すことを得ず、乃ち福樂が唯其經驗を以て示す所の状態に達せん爲なり。願くは吾人は光榮權能の今も何時も世々に歸する吾人の主イエスハリストスの恩寵と仁愛とを以て之を得ん。アミン。

第百十四 聖詠講話

我喜ぶ、主の我が聲我が祈を聴きしに因る(節一)。

一。爾は云はん、その願の聞かれんことを愛せざるは誰なるかと。世の多くの人々なり。彼等は己の爲に益あるとの聴かるゝを欲せず、益なきことを願ひて、その願の遂ぐる時は悲みて怨み啣つなり。神が益ありと認むるとは吾人の爲に益あり。爾は饑餓或は疾病、或は何事か他の之に似たるものを願ふか。神が益ありと認めて吾人に賜ふ所のものは實に有益なり。然れば神がパウロに「我の恩寵は爾に足れり。蓋我の能は弱き中に行はる」(コリント後)と言へるを聞け。若逐艱難暴虐は彼の爲に益ありき。使徒は此事の彼の爲に益あることを聞きて「我柔弱凌辱逐を以て喜となす」(同上)といへり。故に益あるものを賜ふ所の神人々の願を傾聴すとも諸人は等しく喜ぶことを得ざるなり。多くの人々は益なきことを希望し之を以て己を慰むるも、預言者は然らず、然らば預言者は如何。彼は神が彼の願を聴容れて益あるものを賜はんことを愛せり。「彼は其耳を我に傾けたり」(節二)預言者は復人事的表言を以て神の點頭を示すなり。彼は此等の言を以て或他のことをも言ひ表せり。

曰く「我は聴かるゝに堪へざるも、神自ら我に對して寛容なり」と「故に我在世の日に彼を呼ばん」。「我在世の日」とは何の意なりや。曰く我は聴かれつゝ、退かず、不注意なる者たらず、乃ち我が凡ての日に於て此事を成遂げんとなり。

「死の病は我を圍み、地獄の苦は我に臨み、我辛苦艱難に遇へり、其時我主の名を呼びて云へり」(節三)。爾は猛烈なる武略を見るか。凡ての悲哀を破る慰藉を見るか。主に對する愛を以て最も熱衷する靈を見るか。此言の意味は左の如し。曰く我を包圍する惡より救はるゝが爲には神を呼ぶことに我に足れりと。然れど吾人が數々呼びて艱難より救はれざるは何故なるか。

呼ぶべきが如く呼ばざるに由る。又神が常に賜はんと欲して準備し居ることに就ては、福音書に、神自ら「爾等の中孰か其子餅を求めんに、之れに石を與ふる者あらん、又魚を求めんに、之に蛇を與ふる者あらん。然らば爾等惡しき者なるに尙善き賜を其子に與ふるを知る、況や天に在す爾等の父は、之に求むる者に善き物を與へざらんや」(マタイ福音)と云ふを聞け。吾人の仁善は神の仁善と比較して狡猾なるを知らば、神の仁善の如何なるものなるかを見ん。吾人の主若し斯くの如き者ならんには、吾人は常に彼に趨り就き、獨り彼を呼びて幫助者となし、彼の吾人を救は

んとするを見出さん。難船して將に水中に溺れんとする者を見れば何等の縁故なき者と雖も之を救ふにあらずや、況して其本性の仁愛至善なる神、豈不幸の中に在る者の彼に趨り就きて眞に彼を呼ばんと欲する者を救はざらんや。是に由りて爾は或る思ひ設けざる艱難に遭遇すとも、元氣を阻喪することなく直に起ちて穩なる港破られざる盾なる神の佑助に趨り就け。神が爾に艱難に服することを放し、は爾をして彼を呼ばしめん爲なり。然れども多くの者は艱難の時に於て殊に蹉跌きてその有し、敬虔を失ふなり。神は極めて吾人を愛す、而も艱難に服することを吾人に許すは、是れ吾人をして眞に彼を待ましめん爲なり。母は不順の子に種々なる怪物を畏れさせつ、彼等を己の懷裡に就かしむ。其斯くするや、彼等を苦めん爲にあらず、之を己に結び着けん爲なるが如く、神も亦爾に蹉跌くことを許すは、常に強く愛する者の如く、或は凡ての愛する者よりも善く吾人を己に結び着けんことを望みつ、常に爾を祈禱に練習し、常に神を呼び、凡そ他のものを棄て、彼のことを思はしめん爲なり。「嗚呼主よ、我が靈を免れしめ給へ」

節四。他の譯者は「我爾に祈る主よ、我が靈を引き出し給へ」といひ、他の譯者は「嗚呼主よ、我が靈を救ひ給へ」といへり。

爾は智なる靈を見るか。爾は彼が如何に世俗の一切を抛棄て、唯一つ其靈の害されず亡びざるを願ふを見るか。實に靈にして善良なる状態にあらば、他のことは萬事好都合なるも然らざる場合に於ては、他の凡ての幸福は吾人に何等の益をも與へざるなり。然れば吾人は靈の救はれん様行ひ、又言はざるべからず。ハリ

ストスが「智きこと蛇の如くなれ」(マタイの十六)と言ひしは、是れ之を示すなり。蛇は唯首を救はんが爲に己の全身を出すが如く、爾も亦靈を救ふが爲に他の一切を棄ざるべからず。靈にして救はるれば艱難疾病及び凡ての艱難の中にありて最も重き死も亦彼等を害するを得ざるが如く、靈敗壞れて亡びなば生くとも何の善きをも受くることなけん。是れ豫言者が他の凡てのことをさし措きて單靈のことのみを言ひ、又其嚴重なる審判を受けざる様耐ふべからざる罰より救はれん様願ふ所以なり。「主は仁慈にして義なり、我等の神は慈憐なり」。豫言者が如何に聴衆を失望せしめず、又放心せしめざるを見るか。彼は恰も左の如く言ふが如し、曰く、失望する勿れ、主は仁慈なればなり、然れども放心せざれば、主は義なればなり。斯の如く彼は放心より預戒し、又失望を滅して兩方面より吾人の救贖を整全す。

二。次に預言者は神が人々を憐み給ふことを示しつゝ、「我等の神は慈憐なり」と附加ふ。彼は前に述べたる所の諸神の反對に「我等の神」(單數)と言へるや宜なり。刺殺し、打殺し、和せずして仇敵視するは諸神に當然なれども憐み、救して常に危難より救ふは神に當然なり。即ち此事たる殊に諸神の鬼たり、破壊者たるを證し、而して神の照管者たり、保護者たり、眞の神たるを證するなり。

『主は朴直なる者を護る、我弱りしに彼我を助けたり』(節六) 爰に預言者は神の照管の最も高尚なる状態を指示す。彼は「主は仁慈にして義なり慈憐なり」といひて、神の至大なる仁愛の行爲を示せり。如何なる行爲を示せしか。嬰兒(朴直なる者)に關しての行爲なり。吾人は或者を預防して他のものを選び、吾人を威嚇する艱難を預防し、又既に吾人に及べる艱難を輕からしむる智慧を有す、即ち吾人は既に能力を得、方法を知らるも、小兒には此等のものなく保護なきが故に、神常に彼等を照管す、彼等若し常に神の保護の下にあらすんば悉く亡びたりしならん。蛇又は家禽および家にある多くの昆蟲が嬰兒を纏布の中に殺すことあり。若し至上者の照管なくば、乳母にまれ、母にまれ、其他何人も充分に彼等を看守することを得ざりしならん。然れど或者は爰に云はるゝことを解して、未

だ母の胎内より出でざる胎兒に關すとなせり。『我弱りしに彼我を助けたり』預言者は「神は危難に陥ることを許さざりき」とは云はずして「危難の及べる後直に之を助けたり」といへり。預言者は一般に神の照管のことを述べて、彼が通常一般の例を以て或は個々の例を以て證するが如く、彼自身に關しても言へるなり。然れば爾亦全く危難もなき生活を求むる勿れ、斯る生活は爾の爲に益なければなり。斯る生活にして諸預言者の爲に不利益なりしならんには、況して爾の爲に不利益なり。而して斯る生活の實に不利益なる事に就きては、預言者の「我が爾の律を學ばん爲に苦みしは、私の爲に善なり」(聖詠百十八)と言へるを聞け。此言は二倍の感謝を顯せり、即ち神が危難に陥ることを許したるが爲め、又危難に陥りし者を遣てざりしことを感謝するなり。此二つの者は仁慈の種類なり、而して前者は後者より小ならざるも、若或驚くべきことを云は、後者より大なりとす、何となれば後者の場合は危難より救ふも、前者の場合は靈を一層智なる者となせばなり。『我が靈よ、爾の平安に歸れ、蓋主は爾に恩を施せり、主よ、爾我が靈を死より、我が目を涙より、我が足を蹶より免れしめ給へり、我生ける者の地に在りて主の顔の前に行かん』(自七節) 此等の言は歴史的意味に

於て、或奇異なる贖罪、平安、自由を示すも、之を寓意的の意味に解する時は、愛に贖罪は現世の生活より逝りしことを意味し、又死の安静を示すなり。實に死は凡そ不慮の艱難より脱かるゝことにして、善き希望を懐きて逝りし者は既に不定に屬せずして安全の中に在り。縦ひ死は罪より生じたるも、神は之を吾人の幸福に向けたり。故に神が唯死を以て限らずして生命其物をも困難なるものとなせるは、爾をして神若し己の睿智を以て死を吾人の至大なる利益に向けることを得ざりしならんには、初人にも許さざりしことを知らしめん爲なり。されば神は「汝之を食ふ日には死を以て死せん」(創世記二)と言ひ、又「汝は塵なれば塵に歸るべきなり」(同上三)といひし言の中に含蓄せし此罰を以て限らず、他のことをも告示して「爾は面に汗して食物を食ひ、土は荆棘と藎とを爾の爲に生じ、爾は勞苦みて其より食を得ん」といひ、又妻に對ひては「我大に爾の劬勞と愁歎とを増すべし、汝は苦みて子を産ん」(同上十六)といへり。吾人は多くの者が斯くの如くして矯正さるゝを見る。死は人々に及びて彼等を感じなき者となすも、此等の不幸は生者をして最も善き者となす。死の畏るべきものと顯るゝは人々の在弱きに因る。而して實に其畏の在弱きより生ずることは、己の死を願ひて之を喜べるパウルの言を聞きて知るべし。彼は

「我釋かれてハリストスと偕に在らんことを願ふ、蓋是れ最美なり」といひ、又「我爾等衆人の爲に喜び且之を喜ぶが如く、爾等も亦我が爲に喜び且之を喜べ」(コリント書一)といひ、而して之と反對なることの爲に苦みて「第此のみならず、乃我等中心に歎きて子と爲ること、即ち我等の身の贖を俟つ」(ロマ書八)といひ、又「我等は此幕に居り重きを負ひて歎息す」(コリント後)といへり。

三。爾は愛智の如何なる福なるを見るか。他人の爲には泣くべきこと、思はるゝこと、彼は歎息す。己の生國より遙遠き外國に在るは、實に歎息すべきことにはあらざるか。又速かに穩かなる港に歸り、病も悲も歎もなき天の住居に到るは喜ぶべきことにはあらざるか。然れども爾は云はん、こは罪人たる我が爲に能くすべきこととなるかと。視よ、悲哀の情を起さしむるは死にあらすして不潔の良心なるを。然れば爾罪を犯すことを止めよ、然らば死は爾の爲に大に望ましきものとならん。「我が目を涙より」。此言や正し、彼處には悲哀なく、憂悶なく、涕泣なきなり。「我が足を蹶より」。此言は前の言よりも重大なり。其重大なること、は何ぞや。吾人が常に悲哀より救はるゝのみならず、奸計よりも誘惑よりも免るゝことなり。

善行をなして死せし者は磐上に立ち、港に達し、諸の障害を避け、凡ての恐懼と混亂を免る。斯くの如くにして此處を逝りし者は、堅固なる平安の中に在るなり。『我生ける者の地に在りて主の顔の前に行かん』。パウエルも『我等雲に擧げられて、主を空中に迎へん、是くの如くして常に主と偕に居らん』(書四の十七)といへるは同一のことを言ひ顯せるなり。預言者の『生ける者の地に在りて』といへるや宜し、其生命は死を遠ざかりつゝ、潔き幸福に充たされたる眞の生命なり。使徒は曰へり『凡の首領、凡の權柄と能力とを廢せんとする時なり、最後に滅されんとする敵は死なり』(コリント前書十五)と。此等のもの、廢せらるゝ時は、毫も悲哀なることも負債も困難も遺らず、凡ては樂しく、凡ては平和に、凡ては愛、安穩、喜樂、眞實、鞏固なるものたらん、斯れば如何なる欠點も憤怒も悲哀も貪慾も情慾も貪も富も不名譽も其他之に似たるものなからん。吾人も亦此生命に進み、此生命の爲に凡てをなさん。然れば祈禱に於て『爾の國に來らん』(マテの十)と云ふことを命せられたるは、是れ吾人をして常に其日を想はしめん爲なり。此愛を有し、此等の幸福の希望をもて養成さるゝ者は、現世の如何なる艱難を以てするも傷害されず、現世の如何なる憂愁を以てするも擾亂されざるなり。王城に行かんとする者は、中

途に於いて牧場、庭園、深淵、曠野の爲に抑留されず、乃ち此等のものに注意せずして、唯單り彼等を待てる生國を觀るが如く、毎日天の城邑を己の眼前に顯し、此城邑に對する愛を養成する者は、困難なることをも困難なりとは思はじ、快適きこと又は名譽のことも愉快なり、名譽なりとは思はざらん。我が所謂思はざらんとは何か。斯る人はパウエルが『彼等見ゆる者を顧みずして、見えざる者を顧みるに縁る蓋か。見ゆる者は暫時にして、見えざる者は永遠なり』(コリント後書四の十八)と言ひて、誠めたるが如く、他の觀を有しながら之をすら見ざるを云ふなり。爾は彼が同一の途を他の言を以て如何に畫けるを見るか。然れば吾人は其幸福を得んが爲に幸福に對ひて進み、以て光榮權柄の今も何時も世々に歸する所の吾人の主イエス、ハリストスの恩寵と仁愛とに依りて吾人が將に受けんとする永遠の生命をもて樂まん。アミン。

第百十五 聖詠講話

我信ず故に言へり、我孔傷めり(節一)。

一。パウエルは此言を記憶しつゝ、『録して我信ず、故に言へりとあるが如く、我等も此

くの如き信仰の神を有ちて信ず、故に言ふ『(コリント後四の十三)』といへり。先づ使徒が如何に此等の言を利用せしか、又彼の所謂言とは何事に就きて言へるかを述べざるべからず、然せば預言者の表言も吾人の爲に明かならん。

又他の方面より云ふ時は、言語の接續断たず、一部分を取らず、又其一部分に止まらず、全體を以て之を解明す所の教授法は最善なるものなり。パウロは何事を述べんとして此預言の言を記憶するか。凡ての言語も智識も將た想像も亦及ばざる所の復活及び未來の幸福に就きて言ふなり。此等のことは凡て到底如何なる言語を以てするも解明すること能はず、唯信仰を以て受くべきものなるが故に、イウデヤ人が恰も空望にて養はれたる者の如く動搖せず、及び欺かれたりと思はざらん爲に、使徒はその無智を正して恰も左の如く言ふが如し、曰く、我は新らしきことを要求せず、舊き福即ち信仰を要求すと。パウロの言ふ所斯くの如し。而して預言者は現世に於てイウデヤ人を待つ所の或幸福及び人事に超絶せる或幸福に就きて預言せんと欲し、且つ何人も不信者として止まらざらんことを欲しつゝ、左の如く聖詠を始め、曰く『我信ず、故に言へり』と。イエルサラムは陥落し、聖堂は破壊され、俘虜となり、縛せられたる全イウデヤ人の外國に連れ行かれ、而も異種族が

彼等の代りに其地を占領して葡萄樹を植るつけ、家屋を建て、婚配を結ぶべき命令を受けたる時、此等のことはイウデヤ人を失望に陥らしめ、彼等は互に左の如く判断せり、曰く、我等は市邑、武器、高塔、多くの財産、聖堂、祭壇、奉神、禮儀式及び其他一般の制度秩序を有しながら渡され、虜となりて奴隸に引かれたり。今吾人外國に在りて一切を剝奪され、武器なく、奴隸とせられたる者如何で己の生國を恢復せんやと。多くの最も弱き者は斯くの如く判断しつゝ、錯亂不安に陥り、恢復を預言せし所の預言者に注意せざりしが故に、聖詠者は衆人に神の言の信すべきを勸説めつゝ、此言を述べたり。他の預言者の云ふ所之に異れり、例へばイサイヤは爾等が祈り出されたる磐と爾等の堀り出されたる穴とおもひ見よ、我彼をその唯一人なりし時に召し、之を祝して其子孫を増加へたり、『(イサイヤ五)』といへり。此等の言の意味は左の如し、アウラムは異種族たり、子女なき老衰者たらざりしか。年齢によりて又天性によりて子女を設くること能はざりし妻を有せざりしか。抑も是れ何故なるか。我(神)は子なき老人なる一人の彼より全世界を充たさざりしか。何故に爾等は騒擾ぐや。我若し一人を以て全世界を充滿することを得ば、況して爾等を以てイエ

ルサラムを充滿せしむることをやと。然れば預言者はアウラムを左の如く名づけつゝ「爾等が斫り出されたる磐をおもひ見よ」といひ、サラを左の如く名づけつゝ「爾等の掘り出されたる穴をおもひ見よ」といへり。「穴」は自ら其中に水を有せざるも、雨水を受くるが如く、サラも自ら子を生むの能力を己の中に有せざりしも、此能力を天より受けたり、又石は何時も果を結ばざるが如く、アウラムも果を結ぶこと能はざりしが、我は彼より爾等を出し、一人よく斯くの如く諸國を充滿せり、然れば神はイエゼキイリを原野に導き、之に堆積れる骨を示し、之を活動しつゝ、預言して曰へり「我若し死者を復活することを得ば、況して『爾等』生ける者を出で來らしむ」(三十七の十三)るをやと。他の預言者等は欺く言へり「我信ず故に言へり」と、即ち我も亦之を考へ、之を思ひ、信を以て之を受けつゝ、一切の疑を散じたるが故に、許約を信せざるべからずとなり。バウルは吾人の感覺的及び見ゆる幸福に關して信仰の必要なるを述べ、信仰若し感覺的的幸福に關して必要ならんには、況んや靈的的幸福に於てをや。イウヂヤ人若し其城邑を再興するに信仰の必要ならんには、況して天を待つ所の吾人に於てをや。智慧を越え、智識に勝る何事かの行はるゝ時は、信仰にて導かるゝものにて、人事的普通法を以て之を穿索すべからず、何とな

れば神の奇異なる事業は凡そ此等のものに勝ればなり。然れば吾人は己の思慮を抑へて信仰に向ひ、斯くして神を讃揚せざるべからず。己の意思を以て神の業事を穿索せんと力むる者は、己の卑近なる智識に神の得も云はれざる經綸の事業を従はしめんと力むるものにして、神を榮せざるなり。

二。然れば視よ、バウルは斯くの如く行はざりき己の思慮を抑へて約されし者の能力を見たるアウラムのことを述べ、及び之を以て彼が殊に神を讃美したることとを示しつゝ、「不信を以て神の許約を疑はず、乃信に堅固にして、光榮を神に歸し、其約せし所彼亦之を成すを能すと確かに信じたり」(ローマ書四の二)といへり。「我信ず、故に言へり」とあるが如く、我等も此くの如き信仰の信を有ちて信ず、故に言ふ」とは何を意味するか。

爰に使徒は吾人に大なる奧義を示すなり。如何なる奧義を示すや。舊約及び新約は僭に同一の神より出づること、舊約に於て言ひし所の神は新約に於ても言ひし所の同一の神なること、信仰は衆人の教師にして、信仰なくんば爾は何事をも語り得ざることを示せり。曰く「我等も此くの如き信仰の信を有ちて信ず、故に言ふ」爾若し信仰を排斥せば、口をも開くこと能はざらん。何の爲に使徒は「斯くの如き」

信仰』を有ちて』と云はずして『斯くの如き信仰の神を有ちて』と言ひしや。叙べられたることを解明して信仰の高きに登り及び智識の荏弱を規責するが爲に神の教導の必要なることを示さん爲なり。然れば使徒は他の個所に於て又神の顯は各人に與へらるる益の爲なり。此の人には神より智慧の言は與へられ彼の人には同一の神より智識の言は與へられ或人には信徳は與へられ或人には醫を施す恩賜は與へらるる（コリント前書十）といへり。然れども何人か或は云はん使徒が奇蹟の行はれし他の信仰に就きて言へるは正しと。我も亦使徒等が『我等に信を益せ』（ルカ福音十七）と言ひし所の信仰は他の信仰なるを知る又吾人が皆奇蹟を行はざるも敬虔の智識を有するによりて信者と名づけらるる所の信仰も亦一の信仰なるを知る。然れども爰にも亦神の佑助を要す。然ればルカは或婦に就きて『主は其心を啓きてパウルの語る所に嚮はしめたり』（使徒行實十）と記し、ハリストスも『父之を引かざれば人我に來る能はず』（イオアン福音）といへり。若し此れ神の行爲ならば神も彼等に佑けず父も引かず子も導かざるによりて信せざる者を罪人なりと云ふを得べきか。ハリストスは自己のことに就きて父の處に至るには彼に導かるることの必要なるを言ひ顯しつゝ『我は道なり』（イオアン福音）といへり。然れば父引き子導き神照

らすを引かれず導かれず照されざる者は罪なるか。罪なり何となれば彼等は自ら己を此光照に堪ふる者と顯さしりしに由る。然れば視よ、コルニリイは如何なることに遭遇したるかを彼は自ら此に至らず乃ち神彼を招けり何となれば彼は自ら預め己を之に堪ふる者となしたればなり。是に由りてパウルは信仰に就きて説話しつゝ『是れ爾等に由るに非ず神の賜なり』（エペソ書）といへり。神は爾にも善を行はずしては止まず。縦ひ引くことと導くこととは神に關するも然れども神は溫柔なる靈を求めて己の佑助を顯し給ふなり。視よ、何に由りてパウルは他の個所に於て『其旨に依りて召されたる者には』（ロマ書八）といひしを。實際に吾人の善行と救贖とは強迫によるものにあらず。大部分又は全部神に關するといへ神は或小なるものを吾人にも委任せり是れ各人の徳に應じて榮冠を與へん爲なり。然ればパウルも『此くの如き信仰の神』即ち舊約に於ても言ひし所の者』を有ちて』といひて『我等も信す故に言ふ』と附加へたり。爰に信仰は見えざる靈的許約の本質によるも時の順序によるも舊約に於けるよりも一層必要なり吾人の應報は現世に在らずして未來にあればなり。加之ならず信仰は現在の幸福に關しても必要なり靈的恩賜も之を受くるに信仰を要求すれ

ばなり、假令ば領聖洗禮の賜の如き皆信仰を要するなり。然れば此等の善行の力は凡ての言に勝る。信仰若し物質的および感覺的事物に關して必要ならば、況して靈的のことに、尙更のことなり。然れど使徒の表言は充分に解明されたれば、今や預言者の言に移り、ダウドの言ひし所に就きて述ぶべき時なり。彼は何事を言ひしか、曰く『我信ず、故に言へり』と。彼は未だ何事をも言はざりしも、既に彼の意思の中に謂ひしことを言ひ顯せるなり。其意思の中に謂ひしは何事なるか。曰く我はイウデヤ人の不幸及び悲哀むべき状態、全然たる敗壞最後の亡滅を思考して善事に變化することを疑はず、乃ち變化を待み之を告げて『言へり』又前の聖詠に於ても、我は多く此變化に就きて言へり、而も言ひて信仰の勸に從りて告げたりと。

三。視よ、幾何か信仰に慣れざる他の者が如何に輕浮ちて擾亂するかを。ダウドは自ら他の聖詠に於て、動搖する人々の艱難に就きて、左の如く言へり『神は何ぞイブライリ人に心の淨き者に仁慈なる、唯我は我が足幾んど跳き、我が歩殆んど失へり』(聖詠七十三)と足といひ、歩と云ふは輕浮つ思念を云ふなり。預言者は異種族を幸福なる者と見、又イウデヤ人を輕蔑されたる者と見て、左の如く附加へたり『我狂妄

の者を嫉めり』(同上)と。彼は如何なる動搖に就きて云ふか。『我は謂へり、我豈に徒に我が心を淨め、我が手を無罪の中に盥ひしにあらずや』(同上)と。彼は『視よ、此の悪者は斯の世に安樂して其財を増す』(同上)と云はしめたることに就きても云ふなり。次に視よ、彼は如何に復び自ら己に向ふかを曰く『我若し此の如く計らんと云はば、是れ我が目の前に難くして我が神の聖所に入りて、彼等の終を悟るに迄べり』(同上)と。此言の意味は左の如し、我は疲れたり、我は思想に於て弱れり、思想は斯くの如きものなればなり、次で我は困難なる事業を行ふと判断せり、何となれば我は斯くの如くに求めて生國に歸らざる間は、何もかも明かに知ることを得ざるべければなり。

爾は信仰の問題を信仰の前に立てず、之を智識の前に立つることの如何に惡しきを見るか。若し斯くの如き人にして信仰に固かりしならば、彼は之を云はざるべく、擾亂動搖せざるべく、其足は蹶かじ、又其歩を失はざりしならん。然れども預言者には然らざりき、彼は磐上に立ちて、擾亂動搖せず、乃ちイウデヤ人の斯くの如き憐なる状態を見、又異種族の之と反對なる状態を見つ、數々多くの聖詠の中に於ても、高聲に且非常なる感動を以て、反正すべきことを告げたり、而も異種族の勢力

にあらず、イウデヤ人の在弱にあらず、乃ち約せし神の能力を見て固く此事を保證せり。然れば預言者は「我信ず、故に言へり、我孔傷めり。我惑ひし時謂へり、凡の人は偽なり」(二)といへり。爰に彼は復び己の光明なる信仰を顯せり、何となれば大なる不幸も彼を失望に陥らしめざりしに由る。信仰は斯くの如きものなり、即ち信仰は之を有する靈を四方より堅固にする聖き鑑なり、信仰は特に外部に顯さるゝ時は、困難なる事情の中にありて信仰を有つ者に思想の錯亂を鎮靜しつゝ、善き希望を養ふべきことを勸む。是れ預言者は「我孔傷めり」てふ言をもて、傷めるも失望せず、元氣を沮喪せざりしことを顯すなり。次に單傷むにはあらず、乃ち甚だ強く傷みしことを説明しつゝ、「我惑ひし時謂へり、凡の人は偽なり」と附加へたり。

「我惑ひし時」とは何の意なるか。不幸の多きに過ぎ、艱難の大なる時なり。言ふ意は惑と亂とを生せし程多くの大なる艱難不幸は我に及べりとなり。爰に預言者の「惑ひ」と名つけしは苦難によりて感覺の鈍ぶることなり。然ればアダムに就きて神は彼を「熟く睡らしめ」(創世記二二)たりと云へるは、或無感覺を顯すなり。「惑ひ」とは人の自失する状態なり。彼の時アダムを熟く睡らしめたるは、アダム

をして自己の脇骨を取らるゝことを感じて苦まざらしめん爲なり。斯くの如く神はアダムに痛傷の感覺を避けしめんと欲し、アダムが自己より分出したる者を嫉まざらん爲に彼を熟睡せしめたるなり。他の個所に於ても亦「彼の神象外に遊べり」(使徒行實十の十)と云はれたり。爰に亦或駭異と失神とを顯すなり。「惑ひ」てふ言は何處に於ても此事を意味するなり。斯くの如き状態は或は神の作爲に由ることあり、或は非常なる艱難辛苦の結果たることあり、何となれば不幸は惑と亂とを生ずることあればなり。然れば爰に預言者の言ふ所は彼に及べる大なる艱難に由りて惑ひしことを云ふなり。然れども「凡の人は偽なり」てふ言は何を意味するか。一の義人なきか。如何にしてイオフに就きて「其人と爲完全く且正しくして神を畏る」(イオフ書一)と録されしか。吾人は諸預言者に就きても將た何をか云ふべき。彼等若し詐僞者にして其言ふ所虚偽ならんには、萬有は亡びたりしならん。アウラムに就きて何をか言ふべき。諸義人に就きて何をか云ふべき。爾は(聖書の)言を文字通に受け、而して其意味に通せざることの如何に悪きを見るか。「凡の人は偽なり」とは何を意味するか、預言者は他の個所に於て「人は吹嘘の如し」(聖詠百四十三の四)と云ひ、或は他の預言者が「人は皆草なり、その榮華はすべて野の

花の如し(イサヤ書)てふ言を以て表す所の意義に外ならずして最も價値なきもの、速に變遷し影の如く、夢現の如く、幻象の如く變遷するものなりとなり。

四。我が之を云ふは、人をして單に或ことを比較するが爲なりと思はしめざるが爲に、他の譯者等の言を擧げん、或者は『偽詐(アラキ)』といひ、或者は『偽る(シム)』と云ひ、或者は『缺點あり(ナオド)』といへり。此最後の表言は前二者の其とは大に異れり。偽は靈の惡癖なるも、缺點ある者となり、夢現の如く、花の如く、影の如く速かに過去り變遷するは天性の不完全なり。爰に云ふ所のことは『我は塵なり、灰なり』(創世記十七)又『塵と灰と何をか誇る』(シフブ書)てふ言に於て云ふ所に同じ、或は預言者の『人は何物たる、爾之を憶ふか』(聖詠八)と云ふ所に同じ。此等の言は皆人の天性の腐朽せることと微小なることを言ひ顯したるものなり。然れば吾人は收穫に就きて『收穫は欺けり』即ち希望を成就せざりきと言ひ、或は同様なることを言ひ顯しつゝ、『年は欺けり』と云ふ。吾人は人は腐朽すべきものなり、微小なるものなりと思ひ、特に不幸の中においては通例斯くの如く考へ、又天性の弱きを思ふが故に、萬事に於て其腐朽と微小とを顯す所の憐むべき人の天性を見つゝ、悲哀にて疲れたる預言者は『凡の人は偽なり』といへり、即ち人は虚無なりの意なり。彼は他の個所

に於ても『人は行くこと、幻の如し』(聖詠三十一)といへり。『我何を以て主の我に施し』(三)の恩に報いん』(節三)。視よ、彼は聖詠に於て述べし所の意義を、他の言を以て顯しつゝ、其行はれしことのみならず、行はれし所の人を以て如何に善行の偉大なるを顯すかを。彼處に『人は何物たる、爾之を憶ふか、人の子は何物たる、爾之を顧みるか』(聖詠八)と云ひし如く、爰にも亦言へり。

善行は本來大なるものなるも、之を或微小なるものに對して顯す時は二倍に大なるものとなる、此事たる同く仁慈と慈憐とを大ならしむ。預言者は之を言ひ顯すが爲に神が偽あるの人、腐敗すべく且つ微小なる人に斯る賜を得しめたることを解明しつゝ、『我何を以て主の恩に報いん』といへり。『我に施し』(三)の恩。恩者に對して其恩者より受けたる仁慈の爲に何を何て報ゆべきかを慮り、之を尋求め、又之が爲に自ら凡てを爲しながら毫も己を以て當然なることを爲さざりし者となすは恩を感じる靈に取りて正に然るべきことなり。彼は初に報恩につきて述べ、次に報恩を約して出來得る限り其恩に報い、又之に報いて毫も適當なるものを報いざることを表して二倍の感謝を表せり。彼は如何にして神に報いんと欲するか。預言者は續けて『我救の爵を受けて、主の名を籲ばん』

節四と云ふを聞け。此等の言を寓意的意味に解する者は爰に機密の交通に就きて云はるゝことなるを確めん。然れども吾人は此等の言を歴史的意義に解しつづつ灌典と献祭と感謝の歌頌に就きて云はれたることと思ふなり。舊約には種々なる献祭ありき、然れば讃揚の献祭、罪のための献祭、燔祭、救贖のための献祭、平和の献祭、其他多くの献祭ありき。又此言の意味は左の如し、我は毫も献すべき適當なるものを有す、唯有る所のものを献せん、我は神に感謝の祭を献げ、神より我に賜はられたる救贖のことを記憶はんと。『我が誓(原書には)を主に、其衆民の前に償はん』節五。誓とは爰に契約誓詞を云ふなり。彼は艱難の時に於て神に趨り就き、神若し艱難より救ふ時は、神に此等の献祭を献ぐべきことを約しつゝ、己を以て神の負債者と認めたるなり。言ふ意は、不幸は鎮靜したるが故に我は衆の前に於て神に己の誓を果さんとす。『聖人の死は主の目の前に貴し』節六。他の譯者は『貴し』を『榮譽なり』となす。爰に言語上如何なる接續あるか。此等の言は前の言と如何なる關係を有するか。注意して觀察する者は此等の言の間に密接なる連結あるを見出さん。預言者は『我何を以て主の我に施し、悉くの恩に報いん』といひ、主の仁慈を示して、神は常に義人の生命のみならず、死をも慮り、又自然法によりて生ずる死のみならず、數々その特別なる意旨によりてありし所の死に就きても慮り給ふことを云ふなり。爾はパウルの『然れども肉體に留るは爾等の爲に更に切要なり、且我確に知る、我が留りて、爾等衆と偕に居らんことを』(コリント二の二十四)てふ言を聞かざるか。彼等の中成者の出生にして若しイサク、サムエルの如く自然法に由らずとせば、彼等の死の斯くあらんことは驚くべきことにはあらざるなり。然れば使徒は彼等を肉の子と名づけずして『許約の子』(ロマ八)と稱したり。モイセイの死も普通の死にあらすして神の特別なる定めにより、イオアン(授洗者)の死も神の許容により。縦令イオアンの死は淫婦に對する賞與たりしとは雖も、而も其死は『貴かりし』なり。實にイオアンの死は貴かりし―彼は眞理の爲に生命を奪はれたるに由る―而も殺人者たるイロドの自らイオアンを恐れたる程貴かりしなり。イロドが實に畏れたる事につきては、福音記者がイロドに就きて『イロド曰へり、此れ彼が(授洗者)イオアン(死より復活せしなり、故に彼に由りて異能は行はる』(マルコ福音)と云ひて證したるを聞け。又視よ、アズリの死も如何に貴かりしかを。主曰へり『爾の弟アズリは何處にをるや、爾の弟の血の聲我に叫べり』(創世記)と。

節四と云ふを聞け。此等の言を寓意的意味に解する者は爰に機密の交通に就きて云はるゝことなるを確めん。然れども吾人は此等の言を歴史的意義に解しつづつ灌典と献祭と感謝の歌頌に就きて云はれたることと思ふなり。舊約には種々なる献祭ありき、然れば讃揚の献祭、罪のための献祭、燔祭、救贖のための献祭、平和の献祭、其他多くの献祭ありき。又此言の意味は左の如し、我は毫も献すべき適當なるものを有す、唯有る所のものを献せん、我は神に感謝の祭を献げ、神より我に賜はられたる救贖のことを記憶はんと。『我が誓(原書には)を主に、其衆民の前に償はん』節五。誓とは爰に契約誓詞を云ふなり。彼は艱難の時に於て神に趨り就き、神若し艱難より救ふ時は、神に此等の献祭を献ぐべきことを約しつゝ、己を以て神の負債者と認めたるなり。言ふ意は、不幸は鎮靜したるが故に我は衆の前に於て神に己の誓を果さんとす。『聖人の死は主の目の前に貴し』節六。他の譯者は『貴し』を『榮譽なり』となす。爰に言語上如何なる接續あるか。此等の言は前の言と如何なる關係を有するか。注意して觀察する者は此等の言の間に密接なる連結あるを見出さん。預言者は『我何を以て主の我に施し、悉くの恩に報いん』といひ、主の仁慈を示して、神は常に義人の生命のみならず、死をも慮り、又自然法によりて生ずる死のみならず、數々その特別なる意旨によりてありし所の死に就きても慮り給ふことを云ふなり。爾はパウルの『然れども肉體に留るは爾等の爲に更に切要なり、且我確に知る、我が留りて、爾等衆と偕に居らんことを』(コリント二の二十四)てふ言を聞かざるか。彼等の中成者の出生にして若しイサク、サムエルの如く自然法に由らずとせば、彼等の死の斯くあらんことは驚くべきことにはあらざるなり。然れば使徒は彼等を肉の子と名づけずして『許約の子』(ロマ八)と稱したり。モイセイの死も普通の死にあらすして神の特別なる定めにより、イオアン(授洗者)の死も神の許容により。縦令イオアンの死は淫婦に對する賞與たりしとは雖も、而も其死は『貴かりし』なり。實にイオアンの死は貴かりし―彼は眞理の爲に生命を奪はれたるに由る―而も殺人者たるイロドの自らイオアンを恐れたる程貴かりしなり。イロドが實に畏れたる事につきては、福音記者がイロドに就きて『イロド曰へり、此れ彼が(授洗者)イオアン(死より復活せしなり、故に彼に由りて異能は行はる』(マルコ福音)と云ひて證したるを聞け。又視よ、アズリの死も如何に貴かりしかを。主曰へり『爾の弟アズリは何處にをるや、爾の弟の血の聲我に叫べり』(創世記)と。

五。ラザリをも見よ、彼は死後如何に天使等によりて送られしかを(六の二十三)。致命者に對する愛を以て熱したる全市と其人民が如何に其墳墓に參詣するかを見よ。預言者は斯くの如き意味を以て神は「聖人の死」に就きても大なる配慮大なる照管を有すと云ふなり。聖人の死は普通の死にあらず、又偶然にあらず、神が其定めによりて許容し給ふ時に死するなり。然れば預言者は此事を言はさんと欲して「嗚呼主よ、我は爾の僕、我は爾の僕、爾の婢の子なり」(七)といへり。預言者の言ふ所は普通の僕の分限に就きてにあらず、凡ての冠よりも光明にして最も大なる榮冠たる愛を以て熱しつゝ、大なる愛敬と忠順より生ずる僕の分限に就きて云ふなり。然れば神が「我が僕モイセイ死せり」(イイス)と言ひしは、大にモイセイを讚美したるなり。「爾の婢の子なり」とは即ち吾人は古より祖先より爾に奉事むるに定められたりとの意なり。此事をパウエルもテモズイに大なる榮譽を負はしめて「我爾の偽なき信を憶ひ起す、此れ先に爾の祖母ロイダ及び爾の母エウニカに居りき、我確に信す、爾の中にも居ることを、且爾は幼より聖書を知る」(テモズイ書一)といひ、又他の個所に於ては己のことに就きて「エウレイ人よりするエウレイ人」(三の五)といひ、又「彼等エウレイ人なるか、我も亦然り、イスラエ

リ人なるか我も然り」(コリン後書十一の二十三)といへり、何となれば古より即ち祖先よりイスラエリ人たりし者は新信者の前に或特點を有すればなり。視よ、預言者も何によりて「爾の婢の子なり」と云ふかを。「爾は我の縛を破毀せり」(正教會譯の註)。彼は弛めたりと云はず「破毀せり」と云ひて、其縛を効力なきものとなしたることを表言はせり「縛」とは悲哀誘惑危険を云ふなり。縛には善き縛あり「平和の繫を以て」(エスス書四の三)といひ、又「是れ完備の總綱なり」(コソサイ書三の十四)とあるが如き是なり。然れども之と反對なる縛もあり「其罪の繩に繋がる」(箴言五の二十二)とあるが如き是なり。ハリストスも「アウラムの女なる此の婦斯くサクナに縛られたる者の結を解くべからざりしか」(ルカ福音十の三の十六)といひしは此事を示すなり。イサイヤもハリストスに就きて「我爾をまもりて民の契約とし、縛められたる者にいでよといはん」(イサイヤ書四十九の八、九)といへり。神は此等の縛を破毀せるも釋かざりき、破毀するは釋くに勝ればなり。然れど此等の言を愛に罪の縛及び全舊約の人々を理解しつゝ、寓意の意味に解せんと欲する者も亦誤らざるなり。尙パウエルが常に負ひし所の美はしき縛もあり、彼が自ら「我パウレイイイススハリストスの囚人」(エスス書三の一)といひ、又「是故に我此の鐵索に繋がれたり」(エスス書六の二十、使徒行實二十八の二十)と

いひしが如きは是なり。『我讚揚の祭を爾に獻げん』(節八) 視よ彼が前に後に如何に何處に於ても此讚頌を神に獻ぐるかを。彼は前に『救の爵を受けて主の名を籲ばん』といひ爰には『我讚揚の祭を爾に獻げん』といへり、即ち感謝讚揚せんとなり。『主の名を籲ばん』。爾は彼の讚揚の祭の如何なるものなるを見るか。『我が誓を主に、其衆民の前に、主の宮の庭に、イエルサリムよ、爾の中に償はん』(九節)。(十節) 預言者の此事をなすや己を願さんと欲してにあらす、虚名を博せん爲にもあらす、乃ち衆人に熱心を喚發せしめ、彼等をして共に感謝に與かる者となさんと欲してなり。然れば諸聖人等は仁慈を受けるに際して、常に人にのみならず種々なる造物をも一般の讚揚に呼び招げり。實に唯幸福の時のみならず、不幸の時に於ても神に感謝することの如く何物も神に喜ばれざるなり。是れは殊に献祭なり、是は最も大なる供物なり。然ればイエフバエルイエアコフおよび義人等は特に困難なる事情の中において神に感謝しつつ讚美せり。吾人も亦光榮と權能の今も何時も世々に歸する所の吾人の主イエスハリストスの恩寵と仁愛とによりて受くべき永福を受けんが爲にかく行ひて常に恩を謝する者とならん。アミン。

第百十六 聖詠講話

萬民よ、主を讚め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讚めよ、蓋彼の憐は我等を固む(正教會譯のには彼が我等)主の眞實は永く存す(二節)

此等の言が信者の教會に關する預言及び全世界を包括せんとする傳道に關する預告たることは何人の爲にも明なり。聖詠の中に招がるゝは、一二の民族にあらずして全地と海も亦之に與るなり。而して此事はハリストスの輝ける降臨の時に成就せり。次に預言者は彼等の救はれたるは己の善行の爲にあらず、行爲と苦行との爲にあらず、乃ち一に神の仁愛によれることを説明しつゝ、救贖の原因をも顯せり。曰く『彼の憐は我等を固む』と、即ち確實堅固にして石よりも固うせりとなり。實に教會は日々に益々成長す。『主の眞實は永く存す、永く存するが故に眞實は特に輝くなり。預言者の斯く言ひしは、舊約は像たり影たりしに由る。福音記者も律法はモイセイに由りて授けられ、恩寵と眞實とはイエスハリストスに由りて來れり』(イオアン福音書の十七)といひて此事を顯せり。

第一百十七 聖詠講話

主を讚榮せよ、蓋彼は仁慈にして其憐は世々にあれ
ばなり(節一)

一。此聖詠の中には通例民の歌ふ所の言あり、曰く「主は此の日を作れり、我等之を以て歡び樂まん」(二十)と、此言は多くの人々に歡喜を生ずるが故に、人々は特に靈的祭典、天の祭典(パスハ)に於て之を歌ふの慣例を有す。然れども爾等若し欲すれば、此聖詠の全文を始より閱讀して、初句より之を解明さん。師父等は人々に此好調にして且其中に或高尙の眞理を含有する二十四節の句を歌ふことを命じたり、是れ人々をして此聖詠全體を知らざるも、此句によりて充分なる教誨を受けしめん爲なり、然れど吾人は此聖詠全體を觀察せざるべからず、其中に重大なる預言あればなり。爰に「工師が棄てたる石は屋隅の首石と爲れり」(二十)てふ句あり、ハリストスもイウデヤ人に對して此句を繰返されたり、縦ひイウデヤ人は其時既に激怒したるにより、此句の眞意は全く彼等の爲に掩はれたれども、尙主は彼等を怒らしむるを欲せず、イウデヤ人に向ひて「傷める慮ををるこ

となく、ほのぐらき燈火をけさず」(四十二の三)と繰返されたり。然れば吾人は前に既に言ひし如く、此聖詠を初句より觀察せん。此聖詠の初句は如何。「主を讚榮せよ、蓋彼は仁慈にして其憐は世々にあれはなり」。預言者は全世界に於ける神の仁慈と、神が萬事に於て顯す所の斷えざる仁愛とを顯しつゝ、彼の仁慈の最も大にして且つ首なるものを示し、衆人を招きて共に感謝に與らしむるなり。「イスラエリの家、今言ふべし、彼は仁慈なり、其憐は世々にあれはなり」(節二)。爾は何を言ふか。「イスラエリの家」とは數々廢となり、エギベトに奴隸となり、全地の四極に散じバレステナに於て千辛萬苦を忍受したる其家なるか。彼は曰く然りと。イスラエリ人は特に神の仁慈の證者たり、彼等は他の人より遙に多く仁慈を受けられたるなり。又彼等の受けたる艱難は神の彼等に對する大なる祝福たるを證す。彼等若し注意して觀察する時は、ハリストスの降臨の爲にも多く神に感謝せざるべからず。彼等は艱難を受けたるも、其艱難は降臨したる者によりて生じたるにあらず、彼等自身の無智より生じたるなり。ハリストスは彼等に至りて數々「我は唯イスラエリの家、亡びし羊にのみ遣されたり」といひ、門徒等に對しては「異邦の途に往く勿れ、寧ろイスラエリの家、亡びし羊に

往け』といひ、ハナネヤの婦に對しては『見曹の餅を取りて狗に投ぐるは宜しからず』
(十の五、六、十五の二十四) といへり。彼はイスラエル人を救ふが爲に凡てをなし、凡て
を整全せり、彼等若し仁慈を受くるに堪へざる者となりし時は己の不度及び極端
なる無智を罪せざるべからず。

『アアロンの家今言ふべし、彼は仁慈なり、其憐は世々にあればな
り』(節三)。爰に預言者は神品職の如何に秀づるかを示しつゝ、特に司祭等を招ぎて
歌頌せしむ。彼等は他の人々よりも重き者なりしが故に、常に神品職によりての
みならず、他の凡てのことに於ても神より大なる名譽を受けたり。彼等の爲に火
は天より降り(十の二)地は開かれ(復傳律令十)杖は芽を生じ、其他多くの奇蹟は彼等の
爲に行はれたり。『主を畏る、者今言ふべし、彼は仁慈なり、其憐は
世々にあればなり』(節四)。斯る人々は特に神の仁愛を見、萬事に於て神の仁慈
を識ることを得。『其憐は世々にあればなり』とは何の意味なるか。其憐
の常に斷えず萬事に於て輝き顯るることを意味するなり。多くの者の之を見ざ
るは己の智識の乏しきによりてなり。眼病者はその疾病によりて太陽を見ず、又
健康者は太陽の光線の激甚きによりて常に之を見ること能はざるが如く、神の智

慧と偉大なる睿智とは比較されぬ程、人智に勝るにより神の諸の照管は之を知悉
すことを得ざるなり。

然も多くの情慾は無智者をして全く神を見ざらしむる程に彼等を盲たらしむ。
而して其第一は快樂に對する情慾なり、彼等は此情慾によりて衆人の爲に明瞭な
ることを認めざるなり。第二、無學及び智慧の放肆なり。實際に子を罰する父
を嘉し、之を稱揚し、之が爲に特更に父として尊ぶも、罪の爲に罰する所の神を怨み
啣ち、又之に不平を訴ふるは無智ならざるか。何ものか放肆より悪かるべき一放
肆は、訴ふべからざることを訴ふ、即ち或は神の罰することを怨言し、或は罰せざる
ことを怨言す。人々は掠奪者及び貪慾者を見てはその罰せられんことを希望す
るも、自ら罪を犯す時は罰せらるゝことを欲せず、是れ智慧の放肆なる徴表なり。
第三、人々は時として善きことゝ悪しきことゝを知らずして、唯惡に對する己の執
拗と惡癖に對する傾向とによりて事物の判断を誤ることあり。第四、己の罪をだ
に思はず。第五、神と人との間の距離は云ふべからざる程大なり。第六、神は必ず
しも凡てのことを啓示するを欲せず、又場所を選ばずして啓示することを欲せず、
何となれば吾人には一小部分を知るのみにて足ればなり。

二。神の萬事に於ける作爲を知らんことを力むべからず是れ能はざることにし
て全く受造物の力に勝ることを強ひて求むるに當ればなり而して其一小部分を
知らんと欲する者は前に述べたる情慾を脱せざるべからず然らば彼等は縦ひ圓
満に知ること能はずとも太陽よりも明かに神の所爲を見萬事の爲に神を感謝せ
ん。『我狭きより主に籲びしに、主は我に聆きて、我を廣き處に引
出せり』(節五)。爾は神の慈憐と仁愛とを見るか。預言者は我は當れり或は善行
を爲せりとは云はざりき乃ち唯「籲びしに」といへり而して此祈禱は艱難より
救はるゝが爲に充分なりき。然れば神はエギベトにありしイウデヤ人に就きて
も『我わが民の苦患を視、又我降りて彼等を救ひ出せり』(出埃及記三)といへり。彼は我
わが民の敬虔を見たり或は彼等の改善するを見たりとは云はずして其苦患を見
又其號ぶ聲を聞けりといへり。爾は一苦難の爲にも佑助を與ふる仁慈深き父を
見るか。苦患める人々悉く慈憐を受くるにあらず吾人は數々奴隸の罰せられて
苦を受くるを見るも彼等の犯罪の大なるを想ひては其苦難を軽減せざるなり然
れど神は爰に一の苦患の爲に救ひ音に苦患より救ひしのみならず大なる安全を
得しめたり曰く『我に聆きて我を廣き處に引き出せり』と。神が人に苦

難を受くることを容されしは之を受くる者をして一層端正なる者となり智なる
者とならしめん爲なり。『主は我を護る、我懼れざらん、人何をか我に
爲さん』(節六)。爾は預言者の精神の高尙なるを見るか。人萬有に注意を向けざる
ときは智慧は向上して荏弱き人も強き人となるなり。吾人も亦之を歌ふのみな
らず行爲を以て表さん。預言者は我毫も艱難を受けざらんとは云はずして『我
懼れざらん、人何をか我に爲さん』といへり即ち縦ひ受くとも懼れざら
んとなり。然ればパウロも同じく『若し神我等を佑けば誰か我等に敵せん』(ロー三
一)といへり。彼等の敵は無數に多かりしも毫も彼等を害せざりき。而も主の仁
慈を受けながら己に似たる奴隸を懼るゝは小膽の甚しき者にはあらざるか。然
れど預言者は斯くの如き者にはあらず斯る恐懼の上に超然たりしなり。然れば
吾人も人々の前に恐れて神の佑助を奪はれざらん、人々の前に畏るゝは是れ神の
佑助を凌辱むるに當る。然れば(聖書に)エゼキヤに就きて、彼が將に没せんとする
太陽の復び元の度位に登りし時、此休徵が凡そ來りし人々と之を知らんと欲した
る人々を驚し、時に際して敵の侵襲を恐れ、ありし事を以て神の行爲となさず、人
の行爲として見んと欲したるによりて苦めることを言へり。彼は己の希望をそ

の秘藏せし寶物に置きて之を彼等(ワタロン人)に示せしが故に神之を怒りて「凡そ(爾が望を置き及び誇りし所のもの)此等のものは携ゆかん」(第四列王紀二十の十七)といへり。然れば預言者はイスラエリ人がその財貨と駒とに望を屬して審定せられたるにより、神に反對する人々には神の憐を得べきを勧め、又「我馬に騎らす」(オシヤ書十四の四)と云ふべきことを勸告せり。神爾を尊ぶに爾は自ら己を尊ばざるか。神は己の扶助を顯して爾を尊ぶに、爾は人の希望に趨り己が救贖の望を不靈の物たる財貨に置くか。神は唯爾を救ふのみならず、當然に之を爲さんことをも欲し給ふなり。彼は太く爾を愛するに由りて爾を凡てのことより避けしめつゝ之を己に牽引け凡てを遠ざけつゝ己に導き、恰も己の行爲を以て左の如く云ふが如し己の望を我に置き、又斷えず己の目を我に向けよと。「主は我を助くる者なり、我我が敵を見ん」(七節)。爾は預言者が如何に復讐せず、又自ら攻撃せず、敵に復讐することを神に任すを見るか。

『主を恃むは、人を恃むより善なり、主を恃むは、牧伯を恃むより善なり』(八節九節)。爰に比較を神と人々との間になさるも、聖書には現代に於ける聴衆の在弱なるにより比較されぬ事物に就きても數々斯る轉換を用ふることあり。

然れば預言者の之を云ふは、比較するが爲にあらす、聴衆に對する寛容によりてなり。是に由りて他の預言者は「おほよそ人を恃む者は詛はるべし」(イエレミヤ書十の五)と言へり。何ものも斯る恃より弱きはなし、斯る恃は蛛網よりも弱ければなり、吾等に弱きのみならず其危険なることは凡そ人を恃みて其人と偕に亡びたる人々の知る所なり。之に反して神を恃むは、實に堅固なるのみならず、安全にして如何なる變遷にも遭遇することなし。是によりてパウロは「希望は羞を啓かず」(羅馬書五の五)といひ、他の睿智者は「古の族を見よ、又主を恃む者の辱められしを見るか」(シラフ書二の十)といへり。然れども爾は云はん、我は恃みて辱められたりと。人よ、譏評すること勿れ、聖書に對して抗言する勿れ、爾若し辱められしならば固より適當に恃まず、力を弱め、小膽にして終を待たざりしに由る。之を爲す勿れ、唯爾艱難の近づくを見るときも元氣を沮喪すること勿れ、危険の中に堅立するは是れ自ら希望たるなり。

三。誰か異種族ニネウヤ人より不幸なるあらん。然れど彼等は非常なる壓制の下にあり、又市の亡滅を待ちながら失望することなく、眞實の悔改を示し、之を以て神を動かして其宣告を變更せしめたり。爾は希望の力の如何なるものなるを見るか。又預言者は自ら大魚の腹中にありて、聖堂のこと、イエルサリムに還ること

に就きて述べざりしか。然れば爾死に瀕し又は大なる危険に遭遇すとも失望すること勿れ。神には能はざる所なければなり。睿智者も朝より晩に至る迄多くのことは變せられ且凡てのことは速に主の前に流る(ハの廿六)といへり。爾は大に満足を得たりしを見ざるか(第三列王 紀十七章)。爾は發婦が饑饉の時に如何に己が力を顯し給はん初に於て顯すにあらず人力の望なき時に於て顯し給ふなり。人力の望なき時は神聖なる扶助を要する時なればなり。然れば神が少者を救ひしは初に於てせず乃ち其火爐の中に入れられし後なり。又ダニールの救はれしは其投入られし以前にあらずして七日間を経過したる後なりき。然れば失望に導く所の事情の性質を見ずして望なきことにも善き望を興ふる神の能力を見よ。聖詠者の神の能力が最も非常なる艱難に陥りて亡びんとする者をさへ救ひ得るも唯艱難の始に於てのみ之を救ふにあざることを示さんと欲しつゝ之と同様のことを言ひ顯して『萬民我を圍みたれども』(十節)と附加へたり。爾は避くべからざる危険を見るか。彼は分遣隊直接に彼に對して起つ所の敵と戦をなさず恰も魚網を以て包まれ鳥網にて圍まれしが如く四方より圍まれ

たり。一二の民族にて圍まれたるにあらず萬民にて圍まれたるなり然れど凡そ此等の縛は神に於ける恃をもつて破毀されたり『我主の名を以て之を敗れり。彼等我を圍み我を環りたれども我主の名を以て之を敗れり。彼等我を圍みしは蜂の其巢を圍むが如く其消えしは棘の火の如し我主の名を以て之を敗れり』(十二節)。爾は預言者が如何に大なる艱難を畫くを見るか。彼は單に『我を圍みしは』とは云はずして『蜂の如く又棘の火の如し』といひて蜂を以て進撃の急激なるを示し棘をもつて怒の勢力と憤の鎮め難きを示せり何人か棘に落ちし火を退めんや。而も彼は言へり我は斯る勢力と急激とを以て攻撃したる此等の敵を避けたるのみならず却て攻撃せりと。如何に其叢と同じかりしかを憶へ。火は叢を焼き始むるも叢は燃えず火も消えず二者偕に存して互に滅せざりしなり。何物か叢より弱からん。又何物か火より強からん。然れど神の奇異なる能力は奇蹟を以て此二者を存せり。斯くの如く奇蹟は當時もダウドに行はれたり。敵は火の如く侵襲し又蜂の如く攻撃して彼を包圍したれども何事をも爲し得ざりき。勝れぬ武器侵襲し難き佑助たる神の名は凡ての敵を攻撃せり。『彼等強く我を推して我を仆さ

んと欲したれども主は我を扶けたり(節十三)。彼は數々攻撃し、位置を利用して攻撃し、勢力を以て且つ憤怒を以て攻撃する者の艱難の大なるを畫き、又自ら彼等より受けし所のことに就きても述ぶるなり。曰く、艱難は私の殆んど仆れ且つ疲れ果てんとする程に我を壓制せり。我は艱難の打撃にて亡びんとする程攻撃されたり、然れども我が既に脆つきて屈み、人力の能くする限りの方法も望まきものとなれる時に際して神は其扶助を我に顯せり。神の斯く行ひ給ふは、何人も神の光榮を己に歸せざらん爲なり。之に似たることを神は裁判の時ゲデオンになせり(七の二)。されば神はエゼキヤの時にも夜勝利を賜へり(第四列王紀十)。エゼキヤ若し實戦に關係せず、又毫も勝利を得るに助けずして高慢したりしならば、若し夫れ戦列にありて敵の如何に亡びしかを見たらんには一層速かに高慢に陥りしにはあらざるか。然れば神は人々の見で失望の有様を呈せし時に於て己の扶助を遣すなり。神はゴリアフにも同じく爲し(第一列王)。使徒等にも同様に爲せり。是に由りてパウロは「即我が衷に必死の擬定を爲せり、特に己を待ますして、只死者の復活せしむる神を待まん爲なり」(第一の九)といへり。『主は我が力、我が歌なり、彼は我が救となれり』。預言者は恰も神は自ら我が力と助となれりと

云ふが如し。『我が歌なり』とは何の意なるか。我が光榮、我が讚美、我が飾、我が勝利なりの意なり。神は人々を危難より救ふのみならず、之に光榮と勝利とを與ふ。光榮と伴ふ救の到處に於て如何様にして神より與へらるゝかを見るべし。然れど爰には或他のことをも示さる。そは何事なるか。曰く、我が絶えざる歡我が不斷の聲は即ち神に對する讚美なり、我が行爲は彼に對する斷えざる讚頌なりと。

四。サタナの歌を以て己を敗壞する者は之を聞くべし。此等の歌は如何なる害を爾等に蒙らしむるや。此等の歌は如何なる辯解を有し得るか。預言者が常に主を歌頌するに反して、彼等は常に惡鬼の歌を以て己を汚せり。『義人の住所に歡と救との聲あり』(節十五)。神凡てを整全し給ふ時は勝利を得し者は歡喜して二重の喜悅、即ち救はれしことと神によりて救はれしことを樂しむなり。次に預言者は斯る扶助を得ることに奨勵せんと欲して『義人の住所に』と附加へたり。預言者は爰にある「住所に」を彼等の暫時的住居を示さんと欲して居所と言はずして「グレチャ語の「エン、スキネース」即ち寓所」とせり。アウラムが異種族に勝利を獲赫々たる功勞をもて凱旋したる時其天幕は斯くの如くありき。

バズルが悪鬼を攻撃し、迷謬を絶ち、功徳の榮譽を負ひて歸りし時、其天幕は斯くの如くありき。『主の右の手は力を顯す、主の右の手は我を高うせり』
 (節十六) 喜悅の理由を見よ。今も預言者は前に言ひしが如くに言ひ、此等のことの神によりて行はれしことを示すなり。爾は神の仁慈が管に艱難より救ふことにあるのみならず、勝利を得しむるにもあるを見るか。彼が『主の右の手は力を顯す』と言ひ、續いて『主の右の手は我を高うせり』と附加へたるは、彼に賜はられたる榮譽を示さん爲なり。『我を高うせり』とは『榮せり』と同意なり。彼は管に吾人を強き者となし、のみならず光榮なる者となせり。『我死せず、猶生きて主の作爲を傳へん』(節十七) 言ふ意は、危険は死を以て我を威嚇したれども、『我死せず、猶生きて』となり、即ち主の奇蹟は尙新約以前に於て復活の模範を畫きて主が預め非常なる危険より救ふこと、人々を死の口より強奪することを示せり。彼が此復活の休徵を始めて吾人に賜ひしは、既にエノアの姿を隠したる時なり(創世記五) 爾若し體の復活することを信せずとも、彼の例を信せよ。其體は如何にして斯く久しき間完備きものとして存することを得たるか。破壊せる家を再建すると、斯く久しき間破壊せるに近き舊屋を保持すると

は同一にあらず。或は爾は主が存在せざりしものをも造りしことを知らざるか。況して復活せしむることをや。爾の爲に復活の他の例あり、我は今に至る迄も死せざるイリヤの取られしを知る。凡てのことは神の爲に便宜にして容易なり。聖書に『神に在りては凡そ其言ふ所能はざることなし』(ルカ福音一) といひ、又神は『凡そ欲する所を行ふ』(聖詠百十) といへり。爾は美術家の作爲の爾の爲に甚だ困難なるを見るなるべし。然れど爾は其藝術を信用す。何に由りて爾は爾に似たる僕の藝術を信用しながら神の睿智に精巧を要求し、信仰を以て神の行ひ給ひしことを受けざるか。此は極めて無分別なることにあらずや。『我死せず、猶生きて』。此等の言を寓意的意味に解する者も誤らざるなり。縦ひ爰に復活に就きて云はれしとは雖も、『我死せず』てふ言の中『死』とは(普通の)死にあらずして之を他の意味にも解し得べし。言ふ意は、ハリストスが『我を信する者は死すと雖生きん、凡そ生きて我を信する者は、死せざらん』(イオアン福音一) といひて示し、他の死を以て我は死せずとなり。『主の作爲を傳へん』。吾人の生活は主を讃揚し及び衆人に主の作爲を傳ふるに在り。我に告げよ、如何なる作爲なるか。預言者が『主は嚴しく我を罰したれども、我を死に付さざりき』(節十八) と續けし

所のことなり。爾は奇異なる作爲を見るか。幸福を見るか。預言者の神を感謝するや、管に艱難より救はれしが爲のみならず、艱難に遭遇したるが爲にせり、彼は之が爲に至大なる感謝をなし、又誘惑の利益を述べ。此は如何なる利益なるか。曰く「主は厳しく我を罰したれども、其利益は危難よりするものにして、彼等は之を變じて善なるものとなせり。爾は神が艱難に陥いることを許し、又後に其艱難より救ひ給ひしことの中に神の権力と配慮とのあるを見ざるか。曰く「我を死に付さざりき」是れ萬事神の権内にあることを表言せるなり。斯くの如く預言者は二倍の福を受けたり—艱難よりも救はれ、又たパウロがエウレイ書の中に「爾等若し衆の興る所の懲戒に遭はずば、乃私生の子にして、嫡子に非ず」(エウレイ書)と言ひし如く、罪よりも救はれたるなり。「我が爲に義の門を開け、我之に入りて主を讚榮せん」(節十九)。罰せられて罪より離れたる者には、義の門は開かるゝなり。

五。罰せられたる人は敢て「我が爲に義の門を開け」と云ふことを得べし。此等の言は寓意の意味にも解し得べく、又此門を以て不虔者のために閉され、善行施濟および義を以て敲かざるべからざる天の門なりと解し得べし。「是れは主

の門なり、義人等之に入らん」(節二十)。門には死の門あり、亡滅の門あり、窄く細き門なる生命の門あり。斯く多くの門あるが故に、預言者は「是れは主の門なり」と附加へて、主の門の特異なるを示せり。其特異の點は何れに在るか。窄く細き門たるが故に罰せられたる者及び悲しめる者の之に入ることなり。是の門や窄きにより悲しめる者之に入るも、亡滅に至るの門や廣くして大なり。

「我爾を讚榮す、蓋爾は我に聽き、我の救となれり」(節二十)。彼は單に「聽けり」とは言はず、前以て罰したり、善き者となせりと言へり、然れば管に聞かれしが爲のみならず、罰せられしが爲にも感謝せん、何となれば其結果は聞かれたるに等しければなり。總じて此種の感謝は數々預言者の述ぶる所なり、而して此感謝は我が言ひし如く、又言ふを止めざるが如く、最も善き祭と供物なり。「工師が棄てたる石は屋隅の首石と爲れり」(節二十)。此等の言のハリストスに關するとは、衆人の知れる所なり—何となれば此預言は、主が自ら福音の中に引用して「爾等は工師が棄てたる石は屋隅の首石と爲れりと云ふを未だ嘗て讀まざりしか」(マタイ福音三十一の四十二)といひし所なればなり。又此預言が外見上物語と連續せず、説話の連續を破りて、其中間に立つことは毫も驚くべきことにあらず、又珍らしきことにも

あらざるなり、舊約に於ける多くの預言は同様に言ひ表はされたり、何となれば時
 到る迄其預言は隠されざるべからず、是れ聖書の亡されざらん爲なり、然ればハリ
 ストス降誕に就きての預言も外見上記事と接続すれども之と毫も一般なるもの
 を有せざりしなり、即ち『視よ、童女孕みて子を生まん、其名はエムマスイルと稱へら
 れん、譯すれば神我等と偕にするなり』(イサイヤ書七の二十四、二五)とあるが如き是なり。
 『工師が棄てたる石』。預言者の工師と云へるはイウデヤ人たるハリストス
 を排斥して『爾はサマリヤ人にして且魔鬼に憑らるゝ者なり』(イオアン福音)といひ、又
 彼は神よりせず『乃民を惑はす』(同上七)といひし所の教法者、學者、ソリセイのこと
 なり。然れども此排斥されたる者は屋隅の首石となりし程有益なる者となれり。
 凡ての石必しも屋隅の石たるに適するものにあらず、兩壁を一致せしむる最も善
 き石にして始めて首石たるを得るなり。然れば預言者の言の意味は、イウデヤ人
 に排斥され輕蔑されたる者は當に建築の組織に入りしのみならず、兩壁を一致せ
 しむる程奇異なる者となれりとなり。壁とは何を意味するか。パウエルも『彼れは
 我等の平和なり、二の者を一と爲し、隔の牆を敷ち己の身を以て仇を廢し、教を以て
 諸誠の律法を廢せり、是れ和平を爲して、二の者を以て己に於て一の新なる人を造

らん爲なり』といひ、又『爾等は諸使徒と諸預言者との基に建てられたり、イイススハ
 リストスは自ら其隅石なり』(エフェソ書二の二十)といひし如く、イウデヤ人及び異邦人の
 信者を云ふなり。此等の言はイウデヤ人の爲に大なる譴責なり、何となれば彼等
 は家を建てつゝ隅石を認めず、家を保持する其石を不用物視して投棄てたればな
 り。爾若し此兩壁を尙能く知らんと欲せば、ハリストス自ら『我に又他の羊、此の牢
 に屬せざる者あり、我は彼等をも引くべし、而して一の群一の牧者と爲らん』(イオアン
 十)と云ふを聞け。此は既に古より恰も象の如く録されたり、即ちアウラムは
 割禮者及び非割禮者の太祖たりしなり。然れども彼處に於ては唯象にして此處
 にありては眞のものなり。『屋隅の首石となれり』とはイウデヤ人と異邦人
 とを合したるを云ふなり。『此れ主の成す所』(三節)此言は何を意味するか。
 言ふ意は行はれしことは人の作爲にあらず、如何なる人々も、天使も、神使長も、斯く
 の如き隅石たるを得ず、義人も、預言者も、天使も、天使長も之を爲し得ず、是れ神の行
 爲にして、唯獨神のみ爲し能ふ所なりと。他の預言者は『此れ主の成せし所』
 (ラキ)といへり、此の奇異にして非常なることは隅石と成し、ことなり。『我等の
 目に奇異なりとす』。何ものか奇異なりや。隅石敬虔の事業に於ける兩民の

結合なり、何となればイウヂヤ人の中数千の人々は信じ、使徒等もイウヂヤ人より出でたればなり。彼が『我等の目に』と言へるや宜し何となれば此奇異なることは何人の爲にも明なるものにあらずればなり。而して何人かハリストスの十字架に釘うたれし處に於てハリストスに叩拜することを驚き異まざらんや、又彼を釘うちし者は不名譽の中にありしも、之に叩拜せし者は榮譽の中に在ることを驚き異まざる者あらんや。ハリストスの言は衆人を眞理に合せつゝ、全地に弘布せり。此言は如何様にしてか之を知れる人々の爲に奇異なるも、信者の爲には一層明瞭にして判然なりとす。是に由りて預言者は『我等の目に』と言へり。『主は此の日を作れり、我等之を以て歡び樂まん』(二十節)。彼は爰に『日』てふ言の下に太陽の運行にあらず、乃ちその日の間に行はれし首要なる事を云ふなり。日を悪しきものと名づけつゝ、太陽の運行にあらず、其日の間に生じたる艱難を意味するが如く、善き日の下にも其日の間に行はれし善事を意味するなり。此言の意味は左の如し、此日に於て行はれし奇異なる事は神自ら行へり、何となれば斯くの如きことを行ふは、唯彼の右手の行ひ得ることなればなり。

六。然れば何物か口、即ち神が人々と媾和し、久しき争鬭の鎮まり、地は天となり、地にすら堪へざる人々は國(天)に堪ふる者となり、吾人の肉體は天よりも上に昇せられ、天國は開かれ、古の生國は吾人に返され、詛は輕蔑せられ、罪は塗抹せられ、律法を以て審定されし人々は律法なくして救を受け、全地と海とは己が主を知りし、日今數ふること能はざる程多くの事の行はれし日と比較するを得んや。預言者は此等のことを想像しつゝ、凡てを神に歸して此等の事件が神の作爲なることを述べらるなり。

『我等之を以て歡び樂まん』。爰に云ふ所は靈的喜情的喜なり。『我等之を以て歡び樂まん』とは吾人が斯く大なる幸福を受けたるに由る。而して幸福を喜び之を祝ひ樂み、満足を以て神の仁慈を受くることは小なる善行にあらざるなり。『嗚呼主よ、救ひ給へ、嗚呼主よ、助け給へ』(二十節)。預言者は全世界の平安事情の變更及び改善を見、且つ幸福に堪へしを喜びつゝ、『嗚呼主よ、救ひ給へ、嗚呼主よ、助け給へ』といへり、即ち此等の幸福を受くる者を救ひ、彼等をして此幸福に充たされ、恩寵に應ふ果を顯さしめ、彼等の爲に道を便利なるものとなし、此等の幸福を受けたる後之より離れざらしめ給へとなり。『主の名に依りて來る者は崇め讚めらる』(二十節)。吾人の幸福は曾に行はれたるこ

とに在るにあらす乃ち他の善きこと例令ば復活天國ハリストスと偕に相續することにも亦存す。預言者は此等のことを表言さんと欲して『主の名に依りて来る者は崇め讃めらる』と附加へたり。ハリストスも亦イウデヤ人に對ひて『我誠に爾等に語り、今より後、主の名に依りて来る者は祝福せらる』と云ふに至る迄爾等我を見ざらん(マテ三十九)といへり。イウデヤ人等は數々ハリストスを以て彼は神よりせず、彼は神の敵なりと抗言したるが故に、ハリストスは彼等に對ひて『爾等我が雲に乗るを見ば我が神の敵にあらざること自ら證し、且つ己より凡ての口實を取去りつゝ、『主の名に依りて来る者は崇め讃めらる』と叫ばんといへり。爾等をして爾等が神を讃揚すると偕に己の上に困難なる訴をなす所の此等の言を述べしむる時のあらんことは明なることなり。『我等主の家より爾等を祝福す、主は神なり、我等を照せり』(二十)。預言者は爰に神の家に於て祝福を受くる凡その信者を云ふなり。預言者等は何處に於ても信する所の人々を尊敬す。何故に彼等は尊敬するか、又此幸福は何より來るか。神の吾人に現れたるに由る。『蓋神の恩寵衆人に救を施す者は現れて我等に不敬虔と世俗の慾とを離れて自ら制し、義と敬虔とを以て今の世に生を度り、望

む處の福及び大なる神我等の教主イイススハリストスの光榮の現を待つことを教ふ(一、二)。然れば預言者が爰に藉身したる事を驚くは神及び主が其本性の斯くの如き者にてありながら肉を藉りて現るゝことを喜みされたるに由る。彼が『現れ』と名づけしは、主が處女の胎に宿り、人となりて人々に交りし所の經緯を云ふなり。『爾等を祝福す』といふは、斯る賜を受くるに堪へしが爲なり。ハリストスが『多くの預言者と義人とは、爾等が見る所を見んと欲して見ざりき、爾等が聞く所を聞かんと欲して聞かざりき』(マテ十三)といひしは之を言ひ顯したるなり。『祭壇の角に迄與かる者に於て祭を成せ』(正教會譯のには『繩を以て牲を繋ぎ、牽きて祭壇の角に至れ』とあり)他の譯者は『祝典に於て草木を結べよ』(マテ)となし、第三の譯者は『肥えたる者を以て祭を成せ』(ラキ)となす。預言より復び物語に移れり。此等の言の意味は左の如し、祭れよ、祝へよ是なり。『草木を飾りて祭を成せ』とは何の意なるか。或譯者に據るに『肥えたる牲を献ぜよ』(四國對譯聖書參看)の意なり、然れど他の譯者に據るに『花冠と杖とを聖堂に掛けよ』(同上)の意なり。二者共に祭喜はしき日祝典を意味す。預言者は靈的のことより復び説話を感情的の事に向けて

イウデヤ人の集會のことを説けり。

「爾は我が神なり我爾を讚榮せん、爾は我が神なり我爾を崇め讚めん、我爾を讚榮せん、蓋爾は我に聴き、我の救となれり」(節廿八)。

爰には神の仁慈を受けずとも神を感謝し、及び其威嚴と言ふべからざる榮光のため、彼を讚揚すべきことを言ふなり。預言者は仁慈に就きて述べし後、斯る附加をなして此事を示せり。言ふ意は「我は其事なくとも斯く高尚なる、斯く大なる、斯くの如く見えざる、斯くの如く曉るべからざる主を有することを感謝讚榮せん」となり。「主を讚榮せよ、蓋彼は仁慈にして其憐は世々にあればなり」(節廿九)。彼は雷に自ら此祭を献ぐるのみならず、多くの他の者をも招ぎて讚美と感謝に與らしめ、又常に神の不易なること、威嚴とを歌頌しつ、神の仁慈を告ぐるなり。吾人も此事を知りて断えず仁慈なる神に感謝し、且つ彼に斯くの如き祭を献げん、是れ今も何時も世々に父と聖神と偕に光榮の歸する吾人の主イエススハリストスの恩寵と仁慈とによりて來世の福をも受けん爲なり。アミン。

第百十九 聖詠講話

階段の歌又登上の歌(アキラ、シムマフ)及びオドチオン)

我が憂の中に主に呼びしに、彼我に聴き給へり(節一)。

一。聖詠は皆各の表題を有す。又或數聖詠は「階段の歌」てふ同一の表題を有す、此聖詠も亦其一なり、或は「登上の歌」とも云ふ。爾は云はん、何故に此等の聖詠は斯く名つけらるゝかと。此等の聖詠の中にはワウロンより還りしことを述べ、彼處に囚虜となりし時のことを述べらるゝにより、歴史的意味に於てかく名つけられ、又此等の聖詠は善行の途を教ふるによりて寓意の意味に於てかく名づけらるゝなり、或人々は斯くの如く此等の聖詠を理解す。實際此途は階段の如く漸々善人及び智なる人を昇せて之を天に迄導くによる。他の人々は之を以て「アコフ」に顯れし所の地より天に達する「アコフ」の階梯を示すとす。斯くの如く近寄るべからざる高き住居も階段又は階梯を得る時は吾人の爲に近寄るべきものとなるなり。然れども昇りし者は高き所に昇りしによりて眩暈昏迷に陥いるが故に、管に昇らんとする者のみならず、其高き所に達したる者も亦警戒せざるべからず。此警戒は吾人の通過したる所を顧みざるに在り、是れ慢心を起さずして尙通過すべき所の幾何なるかを見之れに向つて進まん爲なり。パウエルが「後を忘れて前に進

む(三の十三)といへるは同一のことを言ひ顯せるなり。此言の寓意の意味は斯くの如し。然れども吾人若し欲せば歴史に向ひて俘虜より解放されし者を觀察せん。彼等は如何にして俘虜より解放されしか。イエルサリムに對する愛を以てなり。之に反して此愛を有せざりし者は神の仁慈に些の關係を有せず奴隸として死せり。若し吾人も彼等に倣はば同一の運命に遭遇せん。吾人若し天の幸福に對する愛及び天のイエルサリムに至らんとする希望に充たされず、生計の汚泥に己を穢されつゝ恒に現世に執着する時は生國に達することを得ざらん。

『我が憂の中に主に呼びしに、彼我に聽き給へり』。爾は憂の益を見るか。神が仁慈を給ふに備ふるを見るか。憂の益は人々を深き祈禱に導くに由りて知るべく、神が常に慈憐を垂るゝに備ふることは、神を呼ぶ者に其仁慈を直に顯されしに由りて知るべし。神嘗てエギプトに於ても同じく爲し給ひて『我が民の苦患を視、また彼等が號ぶ所の聲を聞けり、我彼等の憂苦を知るなり』(出埃及七)といへり。愛すべき者よ、爾等も亦憂の中に在りて失望する勿れ、小膽なる勿れ、乃ち憂の時は特に精神を鼓舞すべし、何となれば憂の時に於ける爾等の祈禱は平常よりも潔淨に、神の仁慈も亦平常より圓滿なればなり、且つ『凡そ敬虔を以て、ハリス

トスイイスに在りて生を度らんと欲する者は、皆窘逐せられ』(書三の十三)及び我等が多くの艱難を歴て、神の國に入るべきこと(使徒行實十)を知りつゝ、爾等の生活が勞働に充さるゝ様に凡ての時を送れ。是に由りて變遷し易き生活及び閑なる生活を愛する勿れ、又天に導かざる廣き道を歩まんと欲する勿れ、乃ち細く穿き道を歩め。爾等若し高き住居に至らんと欲せば、快樂を避け、世の傲慢を踏著け、財貨榮譽權柄を輕蔑し、艱難と靈の痛傷痛悔と涙の泉を選びて救を得る所の凡てのことに進め。之を選びし者は自らも危難の外に在り、且つ其祈禱は最も高きものとせられん。爾等若し斯くの如くにして己を整へ、斯くの如き心を以て神を呼ば、彼必ず爾に聽かん。預言者は之が爲に『我が憂の中に呼びしに、彼我に聽けり』といひしは、爾等が漸々に高まりて己の祈禱を獻げしむることを學び、又爾等が愛の時に愛悶失望せずして其憂の中より益を引出さん爲なり。人よ、預言者エリセイ若し己の足下に俯伏せし婦人を逐ひ拂ふことを其弟子に許さずして『容しおけ、彼は心の中に苦あるなり』(第四列王紀)といひ、又之を以て彼の婦人が己のために大なる保護と己の愛の中に辯護を有するに外ならざること、を顯したらんには、況て神豈に悲哀の靈をもて彼に近づける爾等を遠ざげんや。然ればハリ

ストスは泣く者を福なりとし、笑ふ者を不幸なりとせり。ハリストスは幸福の教を説ける始に於て「泣く者は福なり」(マテ五の五)といへり。然れば爾若し此階段によりて昇り又地に止まるは到底能はざることたるなり。

二。爾は天の高きを見、時の短きを知り、死期の定まらざるを知らん。猶豫せず、遷延せず、乃ち急ぎ急ぎ一日に二段三段十段二十段づゝ昇るが爲に進み行け。

『主よ、我が靈を不義者(正教會譯のには)の口、欺騙の舌より免れしめ給へ』(節二)。爰に福音の「祈禱せよ、誘惑に入らざらん爲なり」(マテ六の十六)てふ誠の如くに輝くを見よ。愛すべき者よ、何もかも奸智に長たる人の誘惑に陥れることに比較するを得ず。奸智に長たる人は猛獸よりも危険なればなり。猛獸は猛獸として顯るるも奸智なる人は數々溫柔なる形容の下に毒を隠すことあり、是れ其奸計の認められず、遭遇せし不注意なる者を穴に陥らしめん爲なり。然れば預言者は數々斯る惡意ある人より救はれんことを神に祈禱せり。若し詐偽と奸計ある人々を避けざるべからずとせば、況て不虔なる教を傳ふる靈惑者をや。特に人を善行より遠ざけて惡癖に誘惑する者は「不義者の口」と稱ふべし。是に由りて預言者は彼等より其靈を救はんことを主に願へり、其處に奸惡者の矢の貫ければな

り。「欺騙の舌は何を以て爾に加へん」(節三)。此

言は斯る惡癖の大なることと、この種の惡の重きことを顯すなり。是に由りて爾は預言者が如何に怒り憤りて「欺騙の舌は何を以て爾に加へん」と云ふを見るか、即ち此惡の爲に如何に適當なる罰のあるかと

なり。イサイヤも同じく「ウヂヤ人に對ひて爾等何ぞか、ねく侍りてなほ捷れんとするか」(イサイヤの五)といへり。預言者も同じく「欺騙の舌は何を以て爾に予へ、何を以て爾に加へんか」といへり。預言者は或は此事を言ひ、或は惡癖其物の中に既に罰の含蓄しあることを言ふなり。爾は未だ罰を受けざるに惡を己の中に生じつゝ、自己に罰を蒙るなり。實に惡癖は未だ罰を受けざるも既に靈の爲に甚だ大なる罰たるなり。斯る惡癖の爲に如何なる適當の罰あらんや。爰には神より罰を受ける外如何なる罰も亦なきなり。人は惡癖のために適當に報ふるを得ず、何となれば此惡癖は凡ての罰より大なればなり、之を罰するは唯神のみ。是に由りて預言者は之を顯さんと欲して、直に「勇者の鋭き箭なり、荒野の炭なり」(節四)「正教會譯のには金雀」と附加したり。彼は爰に復び罰を「箭」と名づく。他の譯者は「勇者の鋭き箭なり、堆積ねられたる炭なり」(サムヤ

チオド)となし、第三の譯者は寓意的の表言を以て罰の畏を強めつ、「杜松の炭なり」(ラ)となせり。此「堆積ねられたる」といひ「杜松の」といふも共に其中に同一の意味を含めり、唯彼處には個數を以て顯され而して爰には罰の性質と力とを顯せり。七十註釋者も「荒野の炭なり」(荒敗的破壊的滅滅的の炭の意)てふ言を以て同じて言ひ表せり。聖書は神の罰を箭又は火と名づけて之を吾人の爲に畏るべきものとして示せり。思ふに爰には同じく異種族を示せるなり、何となれば他の譯者は之を言ひ表しつ、「我が靈を詭詐の口より救ひ給へ」(譯者不明オリゲン)といひたればなり。彼等の言は斯くの如し、其詭詐と凡ての不虔に充たされたる奸計と惡意や斯くの如し。

「哀い哉、我が寄寓を續け、キダルの幕の旁に住む」(節五)「寄寓を續け」には「モンフ」他の譯者は「哀い哉、我が至ることを續けたり」(譯者不明)となし、第三の譯者は「哀い哉、我久しく寄寓れり」(上)となす。斯くの如く彼等はワオロン(ワオロン)の囚虜に就きて悲しみたれども、バウルは此の生命の永きを歎きて「我等は此の幕體に居り、重きを負ひて歎息す」(書五の四)といひ、又「第此のみならず、乃我等神の初實の果を有つ者も、中心に歎息す」(ロマ書八)といへり。實に現世の生活

は旅行なり。旅行に就きては云ふまでもなきことなるも、現世の生活は旅行よりも遙に惡し。故にハリストスは之を路と名づけて「生命に導く門は窄く、其路は細し」(マテオの十四)といへり。吾人が現世に於ける旅行者たることを知るは最も善き、否寧ろ第一の學問なり。古人は之を承認せるが故に特に頌揚せられたり。バウルは之れを言ひ表しつ、「故に神は彼等を耻とせずして己を彼等の神と稱ふ」(エペソの十六)といへり。我に語げよ、「故に」とは何故になるか。彼等が己を旅行者寄寓者と認めたるに由る。是れ大なる善行の根なり基なり。爰に旅行者たる者は彼處に於ては市民たらん、爰に旅行者たる者は現世の幸福に縛られず、住所に就きても財貨に就きても食物に就きても他の之に類することを慮らす、乃ち外國に在る者の如く生國に還るが爲に全力を注ぎて萬事をなし、彼等を生みし國を見るに進むなり、斯く未來の幸福に愛を養ふ者は斯世の不幸なる情實を以て心を惱ます、旅人の如く此等の側を通り過ぎん。視よ、何に由りて祈禱の中に「爾の國を來らせ給へ」と云ふべきことを吾人に命せられしかを、是れ吾人が靈の中に其日を望み、之を待ち、常に此日を眼前に有しつ、現在のことをもて誘はれざらん爲なり。イエルサラムに歸ることを希望せし、イウデヤ人若し解放されし後にも過去のことを

歎きしならば、吾人若し天のイエルサリムに對して強き愛を養はずば如何にして
宥免され又如何なる辯解を有せんや。

三。視よ、彼等が如何に異種族の間に在ることを歎きて「キダルの幕の旁に
住む、我が靈は久しく住めり」(節六)といへるを。爰に彼等は其他國に在る

ことを歎くのみならず、異種族と相對することをも歎くなむ。然れば他の預言者
も現世の生活を歎きて「我は禍なるかな、善人地に絶ゆ、人の中に直き者なし」(賽七の

三)といひ、此預言者も「主よ、我を救ひ給へ、蓋義人は絶えたり」(賽十)といへり。現世
の生活は其虚無と時ならざる勞働とに充たされしのみならず、現生に於ては多く

悪人の成功するによりて困難なりとす。何ものも斯る人々と相對するより醜態にして困難なるはなし。悪人と相對する
ことの靈を惱ますは煙及び臭氣の目を苦むるに勝る。爾は吾人の主イエスヘ

リストスも悪人等と居ることの如何に困難なりしかを言ひ表したる言を記憶せ
ざるか。彼が「我何時までか爾等と偕に在らん、何時までか爾等を忍ばん」(マテ五の十

七)といへるは「キダルの幕の旁に住む」て、ふ言の中、含めることを示した
るなり。是れ己が部下の者に對して常に獸の如くに行ひ、茅屋洞窟に住居し、野獸

の如く兇猛なる野蠻人なり。然れども盜賊貪慾者放蕩者者修なる生活をなす者
は尙彼等よりも堪へ難し。「我が靈は久しく住めり」。然れど久しからず、

唯七十年なり。然れども預言者は個數によりてのみならず、事情の困難によりて
之を久しくと言ひたるなり。苦む者の爲には永からざる年も久しと思はるゝ如

く、吾人も亦斯く感ぜざるべからず、即ち吾人は多からざる年を送りたれども未來
の幸福を甚く希望するによりて、之を久しきものと數へざるべからず。我が之を

言ふは、現生を非難するにあらず、現世の生命も亦神の作爲なり、乃ち未來の幸
福に對する愛を爾等に喚起さんと欲してなり、是れ爾等が現在のこと、に縛られず、

肉慾に執着せず、千歳の壽を保つとも尙少しと云ふ所の小膽者の如くならざらん
爲なり。何ものか之より無智なるあらんや。天及び「目未だ見ず、耳未だ聞かざる」

(賽二の九) 天の幸福の其前に在るにも拘らず、影を追ひ、又た暴風怒濤難船に遭遇し
つゝ、現生の深淵に歸らんと欲するより、愚なることあらんや。パウロは斯くの如

くにてはあらざりき、乃ち彼は急ぎて深淵に進みたるも、唯人々を救ふことは彼を
抑止めたり (一の二三)。「我和睦を疾む者と偕に和するを好む、然れど

も我言を出せば、彼等戰を興す」(節七)。爾は如何に預言者が彼處の生活の

困難なることを顯すを見るか。彼は和睦を有せざる者とは云はざりき乃ち「和睦を憎む者と和するを好む」といへり。爾は悲哀の益あるを見るか。四、虜の果を見るか。而して今吾人の中何人か之を言ひ得る。吾人は和睦を欲する者と和することを好むも彼は又和睦を疾む者と偕に和せんことを欲するなり。吾人は如何にして之を達し得るか。我は復び説話を其問題に向けん―若し旅行者の如く生活せば若し寄寓者の如く生活せば毫も現世のことに携にせられずば之を達することを得ん。眞に何ものも現世の幸福に對する愛、則ち名譽に對し、或は富に對し、或は快樂に對する執着の如く仇の原因となり、争論の原因となるものあらざるなり。爾此等の桎梏を破壊し、且つ他の之に類するものにて虜はるゝことを靈に容さずば、争論將た何處より始まるべきか、善行の基礎の何處に在るかを見ん。ハリストスは之が爲に狼群の綿羊たるべきを吾人に命じたり、是れ爾が我は其と其とを忍受し、又其よりして無慈悲となれりと云はざらん爲なり。縦ひ爾は無數の凌辱を忍受すとも羊たることを續けよ、然らば爾狼に勝たん。斯くの如き人は悪しくして不度なり、然れども爾は惡人にも勝得る能力を有せん。何ものか綿羊より謙遜ならん。何ものか狼より猛惡ならん。然れども使徒等の上に見

ゆるが如く、前者は後者に打勝てり、何となれば何ものも溫柔より權力あるはなく、何ものも恒忍より強きはなければなり。視よ、何によりてハリストスは吾人に狼群の綿羊たるべきを命じたるかを。然れども彼は之を言ひて、彼の門徒は如何なる者たるべきか、および其門徒の爲に此質朴即ち綿羊の溫柔の足らざるを解明さんと欲して、尙或他のことを附加へ「玷なきこと、鴿の如くなれ」(マテの十六)と言ひて、二つの謙遜にして順良なる動物の溫柔を合せたり。吾人が遺恨ある人の間に對ふ時ハリストスは吾人より斯くの如き溫柔を要求するなり。彼は我に對して惡意ある人なり、我之を忍耐すること能はずといふ勿れ、吾人惡意ある人及び仇敵と事ある時は特に溫柔を顯さんことを要す、然らば溫柔の力は顯れ、其効能價值及び利益は輝かん。「我言を出せば彼等戰を興す」。他の譯者は和睦を惡む者と我が和したること、或は我が彼等に言ひしことの爲に彼等の敵對したることを言ひ表しつゝ、「我言を出すや彼等は敵對せり」(マテ)となせり。此等の言の意味は左の如し、曰く、我彼等と談話したる時特に己の愛を言ひ顯し、友愛の言を發したる時、彼等は怒りて奸計を設け、且つ何ものも彼等を鎮静せざりき、然れども我は彼等の斯る状態なるにも拘らず己の善行を守ることを行つたりとなり。吾人

も亦斯く行はざるべからず、彼等は縦ひ吾人を愛する者を攻撃し、敵對し、又奸計を設くとも吾人は狼群の羊たり、鶴たるべきを命せられたる誠を記憶しつゝ己のこゝとを守らざるべからず、是れ彼等を最も善なる者となし、之を以て吾人が皆光榮の世々に歸する吾人の主イエス・ハリストスの恩寵と仁愛とによりて受くべき天の幸福を得ん爲なり。アミン。

第百二十 聖詠講話

階段の歌又登上の歌(アキラ、シムマ)

我目を舉げて山を望む、我が助は彼處より來らん(節一)

一。視よ、艱難に陥りて、困難疑惑し、神に對ひて慰を受けんと欲する所の靈を。是れ又誘惑の効能にして利益なり。誘惑は靈を飛翔せしめ、興奮せしめ、世俗の一切を脱却しつゝ、天の佑助を求めしむ。愚昧にして地に縛られたるイウデヤ人若し囚はれて苦みたるによりて爾く智なる者となり、又天に對ひしならば、况て吾人艱難に際しては斯く行ひて神に趨り就かざるべからず、彼等よりも大なる完全は吾人に要求さるゝなり。彼等は敵の中に在りつゝ、市をも、塔をも、高塔をも、武器を

も人々の幫助をも富をも其他之に類するものをも有せず、乃ち己が君主の奴隷たりしのみならず、之と偕に敵の囚虜となり、奴隷となり、斯る大難に歴せられつゝ、勝たれぬ右手に趨り就き、又人事上の方法を奪はれ、其助なきことを考へて「我目を舉げて山を望む、我が助は彼處より來らん」といへるなり。およそ人事は微弱にして衰頹消滅するも、唯存するは神よりする一の救のみ。「我が助は天地を造りし主より來らん」(節二) 爾は彼等が何處においても如何に己の前に神を想像しつゝ、地に於ても天に於ても山に於ても曠野に於ても到る處に神を尋求むるを見るか。爾は彼等の靈が如何に高まり、彼等が如何に萬有の上に其手を伸し給ふ、照管者に就きて傳ふるを見るか。豫言者が「天地を造りし」て、言葉を附加へて、彼若し天地を造りしならば、到る處に於て即ち他の地に於ても助け、異種族の國に於ても手を伸して之に與へ、生國を奪はれたる者をも救ひ得るとの意味を暗示したるは空しからざるなり、神若し一言を以て天地を造りしならば、況て吾人を異種族より救ふことは至と容易なることなり。爾は石よりも無感覺にして他國に住居せし者が如何に考ふるを見るか。彼等は既に聖堂のことを記憶さずして天地のことを記憶せり。視よ、如何に彼等が神の創造、睿智、照管を承認する

かを。前に木に對ひて『爾は我が父なり』といひ石に對ひて『爾は我を生めり』
 (イエレミヤ書)といひし所の人々は、今や全世界の造物主を承認す。『我が助は主
 より來る』も人々よりせず、駒よりせず、財貨よりせず、同盟者よりせず、墻壁より
 來らざるなり。『我が助は主より來る』此助は、侵し難く、此助力は勝つべから
 ず、管に勝つべからざるのみならず、容易にして且つ便利なり。遠方に行くにも及
 ばず、門衛に低頭するにも及ばず、金銀を費すにも及ばず、公使を派遣するにも及ば
 ず、乃ち家に止りつゝ、此保護を獲べし、唯世事俗情を絶ち、此希望を保ち、鋭き眼を以
 て天上の事を觀察せんことを要す。

神が凡ての動物の中より唯獨り人を直立する様に造り、又其目を體の上部に附し
 たるは、是れ其外貌を以て高きを見ざるべからざることを教へん爲なり。唯此一
 動物は斯くの如くにして造られたるも、其他の動物は下を見、又地に向へり、人の天
 に向けられたるは、是れその天を見、天のことを考へ、天のことを思ひて、靈の鋭き目
 を有せん爲なり。然れば一睿智者は『智者の目は其頭にあり』(傳道書二)といへり。
 即ち智者は凡そ低きものを遠ざけ、天に進み、天のことを思考すとの意なり。『彼は
 爾の足に躓くを許さざらん、爾を守る者は眠らざらん』(節三)。爾は是

等の言は吾人より如何なる熱心を催すを見るか。彼等は神の佑助を記憶し、上よ
 りの佑助を呼びしが故に、豫言者は戒戒し、商議を與へて、恰も爾若し神の佑助を受
 けんと欲せば、自ら當然なることを爲せと云ふが如し。抑々彼は何事を商議する
 か、『彼は爾の足に躓くを許さざらん』即ち惡に傾く勿れ、誘はるゝ勿れ、然
 らば神爾に佑助の手を伸さん、即ち爾を棄てず、爾より遠からざらんとなり。
 斯くの如く事の始は吾人に關し、吾人の權内に在り。若し此事にして吾人の權内
 にあらば、吾人は何事をか受けんことを望みつゝ、自ら或ものを附加へざるべから
 ず、神之を欲し給ふなり、無事に止まらず、假睡又は睡眠に己を渡さず、失望せず
 して、作動き己を救ふことを力めつゝ、微小なるものをたりとも附加へざるべから
 ず。然れば主は十一時に來りて多く働くこと能はざりし者を賞せり。然れども
 主の之を爲し、は、彼等の勞働は榮冠を賜はらるゝの發端となり、基となることを
 示さん爲なり。然れば預言者も『彼は爾の足に躓くを許さざらん、爾を
 守る者は眠らざらん』といへるなり、爾自ら當然なることを行は、神は其爲
 すべき所のことを爾に爲さん。吾人若し自ら當然のことを行は、安全を得不動
 のものとならんが爲に神の佑助の必要なることも亦之によりて示さるゝなり。

二、己の足に動揺することを許すは何人なるか。堅固なる基を有せざる事物腐敗せる事物を追ふ所の者例合ば財貨の慾世俗の愛に耽る所の者は是なり。然れば斯る人々は自ら己を非常なる危険に服しつゝ、數々動揺顛倒するなり。此等の事物は何時も堅固ならず常に動揺して其變化や浪よりも悪しく其通過するや水流よりも速に何者よりも容易に沙中に滲入す。「イスライリを守る者は眠らず寝ねざらん」節四。言ふ意は爾若し斯くの如く己を處する時は神も亦眠らず寝ねざらん。即ち輕蔑せず棄てず爾を裸なる者及び助なき者として遣さざらんとなり。預言者は之を言ひ顯さんと欲して「イスライリを守る者」といひしは空しからざるなり。此等の言の意味は左の如し神若し古より即ち爾の祖先の時より爾に安全を得さするが爲に作爲きたらんには彼は常に爲し、が如く行ふことを廢せず己の行爲を止めざらん唯爾若し己の足に動揺することを許さざれば神は番に爾を遣てざるのみならず否大なる力を以て守らん。「主は爾を守らる者なり、主は爾の右の手の庇蔭なり」節五。言ふ意は主は爾の保護者、助者、防衛者たらんとなり。爾は愛にも彼が如何に爾を勤勉者たらしめんと欲するを見るか。戦列に立つ所の軍士にあるが如く、主は爾の右の手によりて立てり、

是れ爾を征服されず爾を作動しめ強からしめ爾に戦利品を得勝利を保たしめん爲なり、吾人は右の手を以て特に凡てを爲せばなり。彼は管に爾の傍にありて爾を佑くるのみならず又能く爾を保護す。我は重複して云はん預言者は神の佑助を吾人に近きものと示し「右の手及び庇蔭」てふ言を以て圓滿なる保護及び神の最も近き作動を像れるなりと、「晝に日は爾を傷めざらん、夜に月も亦然り」節六。此事たる彼等がエジプトより出でて曠野に旅せし時に在りしことにて、爰に預言者は大なる危険を言ひ顯せるなり。然れど彼等がワロンより歸りし時にも之れに似たる或他の形狀を有する奇蹟に遇へり。是に由りて預言者は神の特別なる照管を示さんと欲して、神が管に彼等を艱難より救ふのみならず、通例人々に在らんとすることよりも救ふことを附加へたり、何となれば神の慈憐は鴻大に、其仁愛や云ふべからざればなり、彼は吾人の必要に應じて吾人に助け賜ふのみならず、吾人の願ひしものよりも裕かに賜ふなり。「主は爾を諸の禍より守らん、主は爾の靈を守らん」節七。彼は爾に小なる不快にすら陥るを許さず、又斯く吾人の爲に配慮照管せば、況て爾を他の凡ての悪事より守るや疑なきなり。大なる艱難も神の手號によりて通過消滅す、是れ人々の能はざる所な

り。人は数々の禍より救ふことを得れども他の禍より救ふこと能はず或は能するも欲せざるなり然れど神の全能の右手は如何なる艱難に遇ふとも之を鎮め爾を凡ての艱難より救ふて自由にすることを得。『主は爾の出入を守りて今より世々に至らん』(節八)。爾は到る處に即ち入る時にも出る時にも常に佑助のあるを見るか。何ものか斯くの如き愛斯くの如き仁慈と較ぶるを得んや。預言者は此等の言を以て一生涯を示せり何となれば一生涯は此出入を重ねたるものなればなり。彼は尙明かに之を言ひ顯しつゝ『今より世々に至らん』と附加へたり。言ふ意は一日にあらず二三日にあらず又五十日百日にもあらず乃ち常に守らんとなり是れ人々には能はざることなり人々には大なる不定個々の變化突如として起る轉變あり今日は友たるも明日は敵となり今日は助け明日は棄て且つ數々棄つるのみならず仇となり凡ての敵よりも悪くして奸計を構ふることあり。然れど神の行爲に至りては變化せず恒常にして永久鞏固にして無限なり。然れば吾人も之に堪へんが爲に吾人自ら當然なることを爲し斯くして光榮の世々に歸する吾人の主ハリストスイイススに由る大なる安全と來世の幸福とを得ん。アミン。

第百二十一 聖詠講話

人我に向ひて我等主の家に行かんと云ふ時我喜べり(節一)。

一。然るに今や多くの人は斯る招待を受くるも不満なりしならん。何人か競馬場或は不法の觀物に行かんと招待する時は之に應ずる人々の多かれど祈禱の家に行くことを怠らざるは蓋少し。然れどもイウヂヤ人には斯の如くにてはあらざりき。『ハリストスヲアミン』にしてイウヂヤ人よりも無分別なる時は何ものか之に勝る悲しきことあらん。何故に彼等は斯くの如き者となりしか。我は重復して云はん彼等は囚によりて善良なる者となれりと。以前には聖堂を蔑視しおよび神聖なる言を聴くことを蔑視して之を避け山及び森林に行きて大なる不虔に耽りし者も今や妄信に對する執着を棄て喜びて此招待に注意し奮起して其心内に於て歡喜するに至れり。彼等は飢渴に苦めり『是は飢に乏しきにあらず水に渴くにあらず主の言を聴くことの饑饉なり』(アモス十二)。且つ彼等は斯る罰を受け大なる希望を以て以前に離れしことに進むなり。彼等はシオンの地板を抱きて『爾の諸僕は其石をも愛し其塵をも惜めばなり』(聖詠百一)といひ又我何の時にか至りて

神の顔の前に出でん』(同上四十)といひ又『我イオルダンの地よりエルモンより小山より(正教碑のには「オア」)爾を記憶す』(同上四十)といひ又『我此を記憶して、我が霊を注ぐ』(同上五十)といへり。我に告げよ、『爾は何を記憶したるか』。我會て大衆の中に行き神の家に入れり』(同上四十)即ち我は此等の人々、此殿なる集會此奉事に至らんとなり『イエルサリムよ、我等の足は爾の門の内立てり』(同上二)爾は非常なる喜を見るか。彼等は恰も望むべきことを受けて其招待を樂み大なる愛を以て祈禱の家及び市を繞れり。

神は常に斯く行ひ給ふなり。吾人若し幸福を領けて之を感せざれば、神は吾人の手より之を奪ひ給はん、是れ受けながら之を感せざりしことを奪ひて之を感せしめん爲なり。彼等も亦聖堂を繞り、市を繞りつゝ、彼等に生國を返せしが爲大に神を感謝しつゝ、同じく行へり。『イエルサリムは稠密の城邑の如くに築かれ』(同上三)他の譯者に據れば『我等は城邑の如くに建造られたるイエルサリムに歸れり』とありて、因はれし後の事件を示せり。當時全市は破壊されて太く荒敗し、高塔は衝倒され、壁は破壊され、唯生國の舊墟の存したるが故に、今や還り來れるイウデヤ人等は此の荒敗を見て其以前の幸福なりしを想起し、

讚美歌を歌ひて、皆て聖堂あり、首長あり、王と祭司長とを有し、秀麗絶美にして繁榮なりし城邑が、斯くの如き惘然なる状態に變じたりしことを追想せるなり。而して之が美麗なりしことは『イエルサリムは城邑の如くに築かれ』てふ言によりて知るべし、當時イエルサリムは未だ城邑たらざりしなり。又此事は預言者が『稠密の』と附加へし言によりても見ゆ。爰に豫言者はイウデヤ人の因はれし以前に於てイエルサリムの建築物の堅固稠密にして連接したると、市中には些の空所なく、凡ての場所に間隙なく密接して家屋の建造されしことを言ふなり。然れば他の譯者は之を言ひ顯しつゝ、『接續する所の』イエルサリムといへり。次に豫言者は他の讚美をもイエルサリムに言ひ顯せり。『諸支派即ち主の支派がイスライリの法に遵ひて上りて主の名を讚榮する處なり』

(四) 壯麗と建築とが市を飾りしよりも人民或は教會の集會又は何事かに就きて疑問の顯るゝ所に凡ての人民群集して特に市を飾れり。爰には聖堂あり、凡ての奉神禮行はれ、司祭等あり、レオト等あり、王の宮殿もあり、近かづくべからざる場所(至聖所)あり、前門あり、犠牲あり、祭壇あり、諸祭日あり、祝典あり、祈禱あり、讀物もあり、一言にて云へば、爰には社會を組織する凡ての實質の集められたるが故に、諸支

派は特に一年に三次即ちパスハ祭、五旬節及び天幕祭には集合せざるべからざりき、何となれば此等のことは他の處に於て許されざりしに由る。是故に預言者は市を讚美して『諸支派上りて』といへり。他の譯者は『其處に帝笏上る』といへり。單に『支派』と云はずして『主の支派』といへり。諸支派は主に屬したれども、彼等には此等のことを己の生國に於て行ふことを許されざりき、斯る名譽は衆人を集め及び牽引けし都會に負はされしなり。

二。此等のことをイエメサリムに於て行ふことを定められしは、イウデヤ人の敬虔を保護する目的にして、四方に彷徨ひしイウデヤ人に偶像崇拜に至る發端と途とを有せざらしめん爲なり。然れば神は彼處に於て犠牲を獻げ、彼處に於て祈し、彼處に於て祭典を行ふことを命じ、不虔に傾ける彼等の思想を抑制し、之を制限せんと欲して場所を限れり。預言者は又『主の支派イブライリの法』てふ言を以て此事を顯せり。『イブライリの法』とは何事を意味するか。是れ至大なる神の照管の證明、憑據、記號を意味するものにして、彼等もし背きて偶像に迷ひ、之に心を傾くるときは如何なる辯解をもなすことを得ざるなり。此は神の照管能力及び睿智の至大なる證明なり。古の大事事件の報告物語を含める律法は彼處に

於て誦まれたり。彼等は彼處に於て互に相迎へつゝ、愛を以て合せられき、彼處に行はれし祭典は彼等の爲に相互に交際の發端となり、機會となれり(神の畏は強まり、敬虔は増し、無數に多くの幸福はイウデヤ人の此市に集まりしより生じたり。『主の名を讚榮す』とは感謝し、奉神禮を行ひ、祈し、供物と犠牲とを獻ずることにして、此事は彼等を敬虔に導き且つ社會の秩序を一層堅固なるものとなせり。『彼處に審判の寶座ダウドの家に寶座は立つ』(節五) 視よ市の他の特點をも。如何なる特點なるか。彼處に王の宮殿のあることなり。『彼處に審判の寶座ダウドの家に寶座は立つ』(譯者)となす。司祭及び王の二重の權勢は彼處に於て一つに合せられたり、即ち市は二倍の裝飾―榮冠及び王冠を以て飾られたり。彼處には他の人の智識に優る事を判斷する裁判官ありき。若し或る他の市に於て疑問の起る時はイエルサリムの裁判官に上告せしめて其決定を受けたり。古に於ては斯くありき、然るに今や凡ては惘然なる状態にありき、全然たる荒敗破壊墟址唯以前の福なりし状態を暗示し記憶せしむる惘然たる建築の遺物の僅かに存するあるのみ。然れば預言者は此悲哀なる記憶を以て己の說話を限らず、悦ば

しき希望を起さしめて「イエエルサリムの爲に平安を求めよ」(六)といへり。この言は何を意味するか。換言すれば請へよ、要求せよとなり。他の譯者は「イエエルサリムを安問せよ」(マフ)といへり、即ちイエエルサリムが以爾の福なりし状態に歸り、多回の戦争より救はれ、終りに幸福を受けんことを祈れよとなり。或は彼預言者は之を言ひ或は預言するなり。「イエエルサリムの爲に平安を求めよ」とは平安は彼に與へられんとなり。「又爾を愛する者は裕ならん」。他の譯者は「平安ならん」(マフ)といひ、第三の譯者は「願くは爾を愛する者は安寧を得ん」(不明)といへり。爰に安寧は唯城邑にのみ限らず之を愛する者が却て以前にありしが如き幸福を樂むは其安寧の至大なるものなり。當時彼を嫉み彼を攻撃せし者は殊に強く他の者よりも強く且つ光榮にして容易に勝利を得たり。然れども今や爾を愛する者は大なる安全の中にあり、爾と併に保護せられん。爰に預言者は或は彼等に助くる者を意味し、或は市民其者を意味するなり。「願くは平安は爾の力の中にあらん」(七)正教會譯のには「中は平安」(他)の譯者は「爾の保護の中にあらん」(不明)となし、第三の譯者は「爾の近邊にあらん」(マフ)となす。「爾の力の中にあらん」とは何を意味す

るか。爾の懐の中に爾の住人の中に、爾の幸福の中にあるを意味するなり。戦争は破壊的にして、イエエルサリムを亡したるが故に預言者はイエエルサリムに對して平安を希望するなり。「爾の宮の中は安寧ならん」。昔に艱難より救はるゝのみならず、無数の幸福を受くること、即ち其平安と安寧と富裕とを受くることを彼等に預言するなり。若し艱難、貧窮、飢餓の中に生活せば平安より如何なる益あらんや。又戦争あらば安寧より如何なる益あらんや。然れば預言者は「ウデヤ人に彼と此との幸福、即ち富裕の中にあることをも安寧、平安の中に於て幸福を受くることをも預告するなり」。「我が兄弟我が隣の爲に」(八)是れ或は彼の亡滅を喜びし隣を意味し、且つ其等の人々が溫柔となりて神の能力を證らん、機平安に就きて祈り、或は城邑に住居せし兄弟に就きて云ふなり。然れば「我が兄弟我が隣の爲に願くは平安なれ、是れ爾等が縦し後くとも艱難によりて善良なる者となりて安んぜん爲なり」。「云ふ、爾等平安なれ、主我が神の家の爲に我爾に福を願ふ」(九)預言者は「我が兄弟我が隣の爲に」といひ、及び彼が此事に就きて祈るは彼等の功德の爲にあらず、乃ち神が益々彼等に福を賜はん様祈ることを示して「主我が神の家の爲に」と附加したり、即ち我は神の

光榮の爲奉神禮を興すが爲大に神の教を弘布むるが爲に平安を望むの意なり。或イウデヤ人は囚擄の中に生れたるも、或者は囚擄となりて曳かれ及び古郷に歸りし時の證者たりき。囚擄の中に生れたるイウデヤ人は嘗て奉神禮を行ふ時にありしこと、彼等の古郷の美麗なりしこと、彼等の幸福なりしこと等につきては老人より聞きて之を知れり。爾は預言者が如何に彼等の傲慢を謙遜にするを見るか、是れ彼等が當然の罰を受けしが故に幸福を受けたるが如く思はず、乃ち彼等をして神の光榮の爲に己の生國に還されしことを知らしめん爲及び之を知りつゝ、以前の罪を犯して同一の罰を嘗めざる様注意せしめん爲なり。

吾人も亦之を知りて亡びざる様力めん時として罪に陥りしことありとも速に起ちて以前の罪を犯さざる様力めん、是れ癡瘋者に對して「視よ爾は愈えたり、復罪を犯す勿れ、恐らくは患に遭ふこと更に甚しからん」(イオアンの十四)と云はれたる言を聴かざらん爲なり。而して主の斯く云はれしは、吾々衆人が光榮權柄の世々に歸する吾人の主イイススハリストスの恩寵と仁慈とによりて受くべき天の幸福を信に受けん様、善行者をば己の善行を固く守り、又罪を免されし者をば其善良なる改心を持続すべきことを教へん爲なり。アミシ。

第百二十二 聖詠講話

天に居る者よ、我目を舉げて爾を望む(節一)

一。爾は如何に囚擄の利益が到る處に顯れしを見るか。常に地に繋かれ、ソリヤ人及びエギベト人を信用し、城壁と多くの財貨に依頼せし人々は、今や此等のものを離れて勝れぬ右手に趨り就き、此希望に向ひ、高尚なる思想を得、又地を棄て聖堂を奪はれて、彼等の聖堂は破壊されたり。終に天より神を招けり。神が天に在す者と名づけらるゝは、場所を限らざるが爲め、否萬有を覆ふに由るにあらず、乃ち神が特に人々の中にも住し、即ち「我彼等の中に居り、彼等の中に行かん」(コリンフ後)と云へる如く、彼處の軍(天使)の中に住するに由りてなり。斯くの如くイウデヤ人は異種族の國に於て少からの眞理を學べり、即ち地より離るること及び彼等が神を呼ぶ時は神は何處に於ても速に注意することを明かに會得せり。終に新生命の光線の顯れたるが故に預言者は場所を守ることに関する律法を漸々と及び暗に排斥しつゝ、未來に關することを言ひ始む。「視よ、僕の目主人の手を望み、婢の目主婦の手を望むが如く、我等の目は主我が神を望み

て、其我等を憐むを俟つ(節二) 視よ、爰に復びイウデヤ人の敬虔の如何に奮起せしかを、即ち彼等は唯暫時神に於ける希望を養ふのみならず、何時も希望に渡され、希望を以て固めらるゝなり。然ればイウデヤ人は比較を取りて、僕婢が衣食及び凡ての給養を己の主人より受くる唯一の方法を有し、己の主人を視ることを止めずして受くるの時を待ち而して之を受くる時は恩を感ずる者となり、常に斯く行ふが如く、他の何人よりも自己に助力加勢を待たず、又他の何人にも目を向けざることを顯すなり。斯くの如く預言者が僕婢に就きて述ぶるは、イウデヤ人等が視て常に之を行ふこと、彼等が如何なる他の希望をも有せず、切に神の佑助を待つこと、彼等にある凡てが神に屬することを示さんと欲してなり。視よ、前に招がれつゝ之を不注意等閑にして聞ける者は、今や不幸に際して神より離るゝを欲せず、待ち務め及び彼に求め、其我等を憐むを待つ(節三) 程に如何に善良なる者となりしを。預言者は賞を興ふるは何れの時なるかとも云はす、或は報酬をなす何れの時なるかとも云はすして「憐むを待つ」といへり。然れば人よ、爾は受くと受けざるに拘らず常に前進せよ、受けずとも退く勿れ、然らば必ず受けん。若し僕婢の退かざりしことにして、殘忍なる首長を慈善に傾けしならば(ルカ福音 爾は斯

く速に神より退き、憂ひ悶え且つ弱りつゝ、如何にして救されんや。爾は下婢が如何に心を他に觸れず、視線をも曲げずして主人より退かざりしを見るか。爾も亦斯く行へ、一なる神に従ひ且つ一切を棄て、神の聴者の數に在れ、然らば必ず益を以て己の爲に願ひし所を受けん。

『主よ、我等を憐み、我等を憐み給へ、蓋我等は侮に饜き足れり。我等の靈は甚だ饜き足れり(節三) 爾は傷害されたる靈を見るか。イウデヤ人等は憐によりて彼等を救はんことを願ふものにあらず、又憐を受け得るによりて願ふにあらず、乃ちダニエルも「我等は全地の諸民よりも貶されたり(ダニエル書と

いへる如く、イウデヤ人が大なる罰を受けたるによりて願ふなり。彼等も亦其祈禱の中に於て同じく言ふなり、曰く吾人は非常なる艱難を受け、生國と自由とを奪はれ、異種族の奴隸となり、輕蔑せられ、飢渴迫害によりて衰弱し、睡せられ、常に足もて蹂躪けられたり、之が爲に吾人を赦し且つ憐み給へと。『特に我が靈は饜き足れり』とは何を意味するか。言ふ意は吾人の靈は大なる艱難によりて衰弱せり。多くの人々は、縦し艱難に遭遇したれども、多く之を忍耐せり、然るに吾人は之をも奪はれたり、吾人は艱難の時に憂悶痛傷すと。彼等は賜はられたる特點

を當然に利用せざりしが故に、神は常に爲し給ふが如く反對なることを以て彼等を矯正せり。然れば神はアダムが地堂に在ることを利用せざりしにより、地堂より放逐して之を矯正し、其妻が夫と同等の尊貴より極悪人となりしにより、神は服従すべきことと従属すべきことを命じて之を改善せり。斯くの如く己の生國に於て自由と安寧とを受けながら極悪人となり、放逐なる者となり、不節制者となる此等のイウデヤ人も、神は其に反對なることを以て矯正するなり。イウデヤ人等は憐れを願ひて神に『我等の靈は驕る者の辱と誇る者の侮とに甚だ鑿き足れり』(節四)といへり。他の譯者は『我が靈は平安に生活する者の非難と傲慢者の輕蔑とに甚だ鑿き足れり』(シム)となし、第三の譯者は『自負者の誹謗』(ラキ)となし、第四の譯者は『最も平安に生活する者の侮』(不明)となせり。彼等は皆同一の意味を言ひ顯すなり、即ち『我が靈は侮に鑿き足れり』てふ言をもつて艱難を歎くなり、然れど今譯者は他のことを言へり、即ち此等のことがイウデヤ人に向はんが爲、彼等自ら吾人の遭遇せしことを經驗せんが爲、彼等の自負傲慢を謙遜ならしめん爲なり。數々斯くの如く行はるるとあり、神が常に驕れる者を謙遜にし、誇れる者を下すは、彼等を亡滅に至

る途より避けしめん爲なり。否、何ももの傲慢より悪しきはなし。誘惑艱難のあり、死すべき體の興へられ、多くの不幸の遣はされ、苦痛及び疾病のあるは、輕卒にして自負驕傲に至る靈を固く抑制せん爲なり、然れば愛すべき者よ、誘惑に遭遇すとも心を亂す勿れ、乃ち預言者の『我が爾の律を學ばん爲に、苦みしは我の爲に善なり』(聖詠百十八)てふ言を記憶しつゝ、治療の爲に不幸を受け、誘惑を當然に利用せよ、然らば吾人が皆光榮權柄の世々に歸する吾人の主、イエススハリストスの恩寵と仁愛とを以て愛すべき至と大なる平安を受けん。アミン。

第百二十三 聖詠講話

若し主我等と偕にあらざば(節一)

一。我は屢々言へり、今も亦注意深き人をして囚擄の結果の大なるを悟らしめんとために之を言ふことを止めざらん。實に偶像に趨り就き、神を離れて不虔に陥りし者は、今や擄となりて何事を云ふか、彼等は如何に己の救を神に歸するかを見よ。最上の詠長たる預言者も、斷えず之を言ふべきことを彼等に命せり。預言者は前以て自ら言ひ、教師の生徒に對するが如く、彼等に勸告して『イスライリ云ふ

へし若し主我等と借にあらず、人々起ちて我等を攻めん時、若し主我等と借にあざりしならば、彼等は我等を生きながら呑みしならん」(節二)と言へり。彼等は艱難より救はれたるのみにて、身には帶ぶるの武器なく、裸體たり囚擄たり、奴隸たり、彼等は墻壁なき市を有せり、或は之さへも有せずして、其生國に還りし後には、衆人の待ち設けたる獲物となれり、然れど彼等には城壁砲臺の代りに神ありしなり。吾人も亦今言はん「若し主我等と借にあざりしならば、彼等は我等を生きながら呑みしならん」と。實に「若し主我等と借にあざりしならば」吾人の敵たる惡魔は何事か爲さざらん。ハリストスがシモンに對ひて「シモンよ、シモンよ、視よ、サタナ爾を麥の如く簸はんことを求めたり、然れども我爾の爲に、爾の信の盡きざらんことを磨れり」(三十一、三十二)と。此擄猛にして飽くなき猛獸は、斷えず控御するにあざれば、凡てのものを蹂躪り且つ調和を亂せしならん。惡魔もし福たるイオフの上に或微小なる權利を得て、其家の基礎を破壊し、其體を損ひ、悲哀なる事件を惹起し、其財産を蕩盡し、其諸子を殺し、蟲を以て其體に充たし、妻をして己に反抗せしめ、朋友をして敵たらしめ、奴隸をして彼を凌辱しめ、たれども、彼もし之を忍耐せ

ざりしならば、凡ての者を亡ぼせしならん。然れば預言者は「若し主我等と借にあざりしならば」といへり。俘擄は甚だ小敵にして、食しかりし而して多くの人々は俘擄の歸りし後にも、彼等を攻撃せり。然れども神の睿智なることは、俄かに危険を彼等に加へず、漸々徐々と與へられしによりても、顯されたり。神は仁慈なるによりて、イウデヤ人を保護し、其俘擄となりし時に得たる矯正を滅却せざらん爲に、斯くなししなり。艱難より救はるゝことは、通例人々を最も不注意者たらしむるに由り、神は幸福を賜ふ時にも、個々の誘惑に服することを、彼等に許せり、是れ誘惑が彼等の爲に、愛智に於ける、不斷の練習とならん爲なり。神は永く人々を不幸の中に遣てざるは、其衰弱せざらん爲なり、又何時までも幸福の中に置かざるは、彼等をして不注意なる者とならざらしめん爲なり、乃ち種々の方法を以て、彼等を救はん爲なり。「彼等は我等を生きながら呑みしならん」。爾は預言者が攻撃者の猛惡を如何に奮くを見るか。實に猛獸の殘忍を顯す所の人々あり、又己の同族に對して、猛獸よりも殘忍なる人々すらあり。猛獸は一時人を攻撃するも、忽ち其暴怒を靜めて立ち去り、或は逐はれて再び攻撃せざることあり、然れど人々一度他人を攻撃して成功せざる時は、復び

攻撃してその體を掻き裂かんことを力むるなり。怒は斯くの如く無分別なり。此情慾は斯くの如く熱し斯くの如く沸騰す。吾人は如何にして此疾病を絶滅し得るか。吾人もし思慮ある者たり、毎日死者を見て死のことを思ひ、吾人の天性の土たり、灰たることを知らば、此疾病を絶つことを得べし。容貌の美爾の靈を誘惑せば記念碑及び祖先の墳墓に至りて彼處に横はり居る者等が如何に塵に歸したるかを観よ、然らば爾此觀によりて大に痛傷の心を惹起さん。我が言の酷なるを責むる勿れ。熱病を患ふる者が其病の癒えたる後新鮮なる空氣を要する如く、情慾にて狂亂する者も亦記念碑を見て恰も好き場所を見出したらん如く感じて多くの疾病より癒さるゝことを得ん。實に傲慢なる人を謙遜ならしむるには一の灰壺火葬したる死骸の示せば足れり。之より未來の畏るべき日に思ひ至り、慰藉もなく何人も爾を保護せざる鞠間、審定即ち罰を思ふに至らん。衆人は宜しく之を以て情慾を鎮靜すべし。又現世に於て富裕より貧賤に榮譽より不榮譽に陥りし人々に就きて記憶すべし。而して若し怒らんと欲せば爾に似たる兄弟に對して怒らす、乃ち惡神に對して怒れ。視よ、爾は此情慾を何者に向け得るか、何時も之惡神と和する勿れ、彼に對して己の怒を注ぎ盡し、彼に對して係蹄を裝置け、何時

も之と戦ふことを止めされ。『彼等が我等に於ける怒は燃え、水は我等を沈め、流は我等の靈の上を過ぎ、暴れたる水は我等の靈の上を過ぎしならん』(自三節) 預言者は爰に敵の言ひ顯すべからざる怒を『流及び水』と名づく。此怒は不順序に且非常に急激なる勢力を逞うして流れ、之に遇ふ所のものを己に牽引くる水なり。然れど爰には艱難の近づき來ることのみならず、其通過することに就きても云はるゝなり。

二。吾人は艱難の身に及べる時に際して元氣を沮喪さゝらん。艱難は如何なるものならんも、それは潮流なり、速かに通過ぐる雲なり、如何に大なる悲哀も終を有す、爾は如何なる艱難を示さんも、その艱難には限りあり。而して艱難もし終を有せば吾人の天性に達せざりしならん。然れども爾は云はん、艱難は多くの人々を誘惑すと。是れ其急激なるに由りてにあらす、誘惑されたる者自らの不注意なると容易に躓くとに由るなり。是に由りて吾人は誘惑されず、又此潮流の深所に陥らざらん様、其場所を観察し、且つ難船に遇はざらん様、壘き錨を持たん。然れば水の流は或時期迄は畏るべきも、後には次第に減するなり。『水は我等を沈め』。他の譯者は『其時水(複數を用ふ)は我等を沈め、深き淵の如く我等の

靈に迄及べり(譯者)となす。暴れたる水は我等の靈の上を過ぎし
 ならん。他の譯者は「其時傲慢なる者は水の如く我等の靈に上り
 しならん」(ラキ)となす。爾は神の佑助の如何なるものなるか。神は如何にし
 て斯る艱難の中に没了することを彼等に許さざりしを見るか。神が艱難の増し
 加はることを許し、は吾人を溺らさん爲にあらす。乃ち吾人を最も實驗者となし、
 最も明かに己の能力を示さん爲なり。爰に凡ての流よりも凡ての阻め難き水よ
 りも強く攻撃しつゝ、彼等に如何なる害をもなさざりし。敵を傲慢者と名づく而し
 て之が原因となるものは神の佑助なり。上よりの幫助勝れざるの保護なり。是に
 由りて預言者は艱難より救はるゝことを述べて、之を救ふ所の原因者に就きても
 述べ、而も「我等を昇へて其齒の獲物となさざりし主は崇め讃め
 らる。我等の靈は脱れしこと、鳥を捕ふる者の羅を脱るゝが如
 し」(六節)てふ讚詞の状態に於て言へり。爾は彼が己の在弱をも敵の勢力をも如
 かに畫くを見るか。敵は力と怒とを鑑ふて彼等の體を食はんとする猛獸の
 如く、獅子の如く攻撃したるも、此等は凡ての鳥よりも弱かりし。然れども神の驚
 くべき作爲は弱者が強者に勝つ時に於て特に顯さるゝなり。攻撃の耐えざるは

一方よりは非常なる怒に充され、其體を食はんとする畏るべき強敵のありし
 と、他方よりは在弱微小にして捕はれ易き人々のありしに由るにあらす。乃ち後者
 が艱難の中にあり、最も困難なる事情の中に立たされ、四方より軍士を以て威嚇さ
 れしに由る。然れども預言者は曰く常に強くして吾人を救はんとする者は吾人
 が艱難に陥りし後にも至と容易に吾人を救へりと。彼は此事を言ひ顯さんと欲
 して「鳥が捕ふる者の羅を脱るゝが如し、羅裂かれて我等脱れ
 たり」といへり。次に此事の如何なる状態なりしかをも示しつゝ、「我等の扶
 助は天地を造りし主の名に在り」(八節)と附加へたり。爾は保護者の能を
 見るか。其權を見るか。彼等は攻撃の方法をも破壊せり。
 此は寓意的意味即ち悪魔と人類とに對する關係に於ても理解することを得。預
 言者は神が如何に悪魔より救ひしか、如何に悪魔の奸計を破りしかを示せり。此
 はハリストスが門徒等に「我爾等に蛇蝎及び悉くの敵の能を踐む權を與ふ」(九
 十)と言ひし時より起れり。今や既に公然たる争にあらす。又同等なる戦にあらす。
 悪魔は地の上に蹂躪られ、爾は眞直に立ち上より攻撃し、悪魔は無力にして爾は
 剛し。然らば何故に彼は屢々吾人の上に勝利を得るか。吾人の小膽吾人の不注

意にして睡るによる。爾若し悪魔に對抗せんと欲せば、彼は爾に對して敢て敢せざらん。悪魔若し眠れる爾に勝つとも是れ彼の力に由るにあらず、爾の不注意なるに因る。眠れる者には最も弱き者すら勝ち得るにあらずや。然れども今剛き者は縛られ、其武器は奪はれ(マトバイ福音 十二の二十九)其能は傷められ、其避所は破壊され、其劔は振ぎ取られたり。爾は尙何事を望むか。何故に爾は驚くか。何故に悪魔を畏るか。無力なる悪魔を蹂躙すべきことは爾に命せられたり、我に語げよ、何故に爾は戦慄くか、何故に動搖するか。爾は如何なる佑助者を有するかを解せざるか。視よ、敵の弱まりしのみならず、爾の佑助はより大となれり。浪起てる肉は酔まり、罪の暴風は馴けられ、爾は神の恩寵傳言の能力を受けたり、蓋肉に縁りて弱みたる律法は力なかりしが故に、神は其子を罪の肉の形を以て罪の爲に遣して、肉に於て罪を定罪せり、律法の義は我等肉に從はざる者の中に成就せん爲なり(ロマ三の二四)。彼は肉を順從なる者となし、爾に武器即ち義の鏡、真理の帶、救の兜、信の盾、神の劔を賜へり、彼は爾に聘質を與へたり、即ち己の肉を以て爾を養ひ、己の血を以て爾に飲ませ、手づから爾に何時も破れざる矛たる十字架を授け、悪魔を縛りて之を地上に蹂躙せり。然るを尙數々悪魔に征服せられなば、之を言ひ解くに辭なかるべし、又惡

魔の攻撃を受くるとも口實を有せざらん、何となれば勝利を得る無數の方法を有すればなり。『羅裂かれて我等脱れたり。我等の扶助は天地を造りし主の名に在り』。爾は如何なる首將如何なる王の爾にあるを見るか。彼は己の言を以て斯る大なる物を造りし、萬有の造物主なり。元氣を沮喪することなく、勇しく立て、何ものも爾に榮譽の戦利品を獲ることを妨げざるなり。愛すべき者よ、吾人は之を知り、勇みて功徳を立てん、吾人は寝ねざらん、乃ち武器を研ぎ、熱心を強めて斷えず敵を攻撃せん、是れ光明なる勝利を得、大なる光榮を以て吾人衆人が光榮權能の世々に歸する、吾人の主イエスハリストスの恩寵と仁愛とによりて天國を得ん爲なり。アミン。

第百二十四 聖詠講話

主を頼む者はシオン山の如く(節一)

一。預言者は何の爲に『シオン』てふ言を附加へたるか。何の爲に單に『山の如し』と云はずして、此山の名を言ひしか。是れ吾人に不幸の中にありて、元氣を沮喪さず、憂悶に沈まず、神を頼みて、凡てのこと、即ち戦争をも争闘をも、擾亂をも勇

ましく忍耐すべきことを教へん爲なり。此山は昔て曠野となり、住民を奪はれしが後復び以前の安寧を得て己が住民の歸還と奇蹟の啓示とを以て時昔の幸福を得たる如く、勇氣ある人は縦令無数の艱難を受くとも動搖せざるなり。然れば爾も無事平安にして艱難なき生活を送ることを望まず、危険によりて動搖せざる生活望むべし。平安にして港灣に止り、或は浪起つ海を航海しつゝ同様に己の技術を示すことを得ず。一は人を怠惰不注意及び荏弱なる者となせども、一は多くの暗礁岩石又は暴風に遭ひ、其他海上に於ける多くの危険を嘗め、此等のことを忍耐して己の靈を最も剛き者となすなり。爾の現世に生れたるは働かずして怠り、如何なる艱難をも受けざらん爲にあらず、乃ち苦難を経て光榮なる者と爲らん爲なり。吾人は安寧若くは奢侈なる生活を求めざらん、此希望は勇氣ある人に適せず、智識を有する者よりは寧ろ蟲又は無智なる動物に適す。爾誘惑に陥らざるが爲に熱心に祈れ、然れど誘惑に陥るとも悲む勿れ、己を擾亂す勿れ、憂悶する勿れ、乃ち光榮なる者となるが爲に全力を用ひよ。爾は最も勇氣なる軍士が招集の喇叭を聞き、戦利品勝利榮冠剛勇なる祖先を想出すを見ざるか。然れば爾も亦靈的喇叭の音により、起ちて獅子よりも勇ましく、火の中、鐵の中にも行け。勇氣ある

人々に對しては此等のものも亦耻づべければなり。猛獸も斯る勇ましき人々を懼れん、縦ひ彼等ば飢ゑたると其天性猛烈なりしとは雖も、義人を見て凡てを忘れ、己の怒を忘れん。然れば此武器を以て己を護れ、然らば爾天に昇る燭を見るときも之をすら畏れざらん。剛毅にして全能一瞬時に危険を破壊する將軍は爾に在り。萬有は彼のものなり、天も地も海も猛獸も火も亦然り、凡てのものを變じ、又之を移すことは彼の爲に容易なり。我に告げよ、何故に爾は畏るゝか。怠惰と己の不注意とに外ならざるべし。死は凡ての艱難に勝らざるか。然れど死も亦萬有の債なり。爾は何故に此債より利益を引出さざるか。爾若し欲すると欲せざるとに拘らず、此途を行かざるべからずとせば、何故に利益を得て行かざるか、暫時的幸福にあらず、乃ち此世の悲哀に勝る喜を得る苦行を爲して行かざるか。若し此等の言にして困難なるものと思はれなば、賞を待たずして永き困難に服し、常に飢渴と戦ひ、彼等をして數々生命を厭はしむる不治の長病に罹り、又時としては係蹄及び劍に己を投ずる所の人々を想像すべし。天と天の幸福は爾を待てり、然るに爾は安全に己を渡し、而かも斯る佑助者を有しなから、恐懼戦慄し居るにあらずや。爾は預言者の『主を頼む者はシオン山の如し』てふ言を聞かざるか。彼は

『山』てふ言を以て神に對する希望の鞏固不動にして近寄るべからず勝つべからざることを顯すなり。何人も山を轉除け又動搖すること能はざるが如く、神を恃む人を攻撃する者は手を空うして家に歸らん。實に神に於ける希望は遙に山よりも固し。『イエルサリムの生者は永く動かさず』。他の譯者は『イエルサリムの四方に生活する者は永く動かさず』となす。然れど爾は云はん、三人の少者及びダニエルは動かざりしかと。否。彼等は生國を奪はれ、俘擄となりたれども、何時も些の動搖をも示さずして却て斯る混亂の中にあること、恰も磐石の上に立てるが如く、斯る怒濤の間にあること、宛然穩なる港にあるが如く、如何なる不快をも受けざりき。不幸なる事は之を動搖と名づくべからず、動搖は不幸の中にあらずして靈の亡滅と善行の滅却とに在り、勇氣ある人は斯る動搖と危険に陥いらずして却て臍を固めて益々赫灼たるなり。若し『イエルサリムの生者は永く動かさず』てふ此等の言を寓意的意味に理解せんと欲せば、天國の狀態を想像すべし。實に此狀態に達したる者は諸の轉變を脱れん。彼處には何等の誘惑なく、情慾なく、快樂なく、罪を犯す端緒なく、悲哀、疾病及び危険も亦あるなし、彼處には此等のものは全くなきなり。『諸山はイエルサリムを環り、主

は其民を環りて今より世々に迄らん』(二) 爰に預言者はイエルサリムの防禦に就きて云ふも、彼は此防禦を頼むことを容さずして勝たれぬ佑助者たる神に引上ぐるなり。

二。預言者の言ふ意は、山はイエルサリムを防禦すとも尙イエルサリムは(其上より)の防禦を要す、何となれば此防禦はイエルサリムを勝つべからざるものとなせばなり。是に由りて預言者は『主は其民を環りて』といへり、即ち四方の諸山を頼むなかれ、何となれば『主が悪者の杖の義者の業の上にあるを許さざる』(三) ことは、此市を勝れぬものとなせばなり。彼は人々が頼む所の佑助の確實なる理由を示すなり。如何なる理由を示すか。曰く、神は義人の幸福の罪人の手にあるを容し給はずと。彼の之を云ふは、彼等をして神の佑助を頼ましめん爲なるが如く、彼等若し常に神の佑助と恩寵を己の幸福として受けんと欲せば、善行を行ふべしとなり。彼は之を以て幸福を獲ること、安全とは彼等自らの意志に關することを示すなり。『悪者の杖』とは敵の國を云ふ。而して此言の意味は左の如し、主は義者の業を領するを許さず、若し暫時之を許すことあるも、それは彼等を矯正し勸説し及び悟了せしめん爲なり。『義者が其手を不法に伸べ

ざらん爲なり。他の譯者は「是に由りて義者は其手を不法に伸べず」(譯者)となす。何故に「是に由りて」なるか。前に述べたるが如く、神は防衛ぎ復讐し、攻撃し、彼等の領有より敵を放逐するに由りての意なり。彼は恰も左の如く云ふが如し、試誘に慣れ、多くの幸福をもて改善されたる彼等は常に善行の中に住み、其と之とを悟りつゝ、惡癖に觸れざらんと。斯く凡てのことは彼等の靈が其己に及べる艱難によりて矯正され、幸福を賜はられたるによりて熱心を強めつゝ善良なるものとなりしことに力めたり。「主よ、恩を善人と心の直き者」とに施し給へ」(節四)。「己の曲徑に轉ずる者に至りては、願くは主は彼等に不法を行ふ者と偕に行くを許さん」(節五)爾は幸福を得るも罰を受くるも凡ての發端の吾人に關することを見るか。然れど發端は吾人に關するも、此事にも尙神の仁愛の大なる光は輝くなり。神は吾人の功德よりも裕かに吾人に報い給ふ、即ち彼は罪の爲め相應する罰を定むるも、善行の爲には其善行に勝る報賞を與ふ。預言者が爰に義者と名つくるは心の中に如何なる隠れたること及び奸計をも有たざる所の正直にして心の質朴なる人々を云ふなり。神は何處に於ても殊に斯る義を求む。善行は斯くの如きものなり、即ち善行は質朴

なるものなり、公然たるものなり、然れど之に反して惡癖は變遷し易く屈曲多く亂れ易きものなり、此事は實際に於て見ることを得。然れば偽り欺かんと欲する者は如何に勞し、如何に種々なる方法と狡猾なる言を考へ、如何に技巧を要するかを想へ。而して眞理を言ふ者には、勞働も配慮も僞善も狡猾も其他之に類するものも亦必要ならず、何となれば眞理は自然に輝けばなり。醜き人は外部を飾り天然の醜を隠すがために被布を要するも、之に反して天性美しき者は技巧を用ひずして自ら輝くが如く、僞と眞惡癖と善行も亦斯くの如きものなり。是に由りて惡癖は罰せらるゝ前既に先づ罰を蒙るも、善行は報賞を受くるに先だちて既に先づ報を得。善行は榮冠を受くるに先だちて己の中に報賞を含有するが如く、惡癖は罰を受くるに先だちて己の中に痛苦を含有す。實に何ものか罪より生ずる罰ほどに堪へ難きことあらん。然ればパウエルも己の美を敗壞せしめ、自然の法則を變ずる放蕩者のことを述べつゝ、罰を受くるに先だちて其犯罪の中に最も大なる痛苦の含有することを言へり。使徒は「男と男と耻づべき事を作して、其迷謬に當れる報を己の身に受けたり」(ロマ書一)といひて、彼等の放蕩及び行為を罪の報と名づけたり。「平安はイブライリに歸せん」。是れ預言者は祈禱を以て其說話を

結ぶなり。聖人等の心は斯くの如きものなり即ち彼等は聴者に至大なる佑助を
 與へつゝ祈禱を教誨及び商議と合するなり。
 預言者が爰に『平安』といへるは、管に感情的平安のみならず、感情的平安をも生
 ずる高上の平安を意味するなり、祈禱するは靈が情慾の戦を起しつゝ自己に對し
 て背かざらん爲なり。吾人も亦斯る平安を求めん、是れ光榮權柄の世々に歸する
 吾人の主イエスキリストスの恩寵と仁愛とを以て約されたる幸福を吾人に得
 しめん爲なり。アミン。

第百二十五 聖詠講話

『主がシオン^{シオン}の擄^擄を返し、時我等夢みるが如くな
 りき』。他の譯者は『我等夢みるが如くなりき』を『我等慰
 められたり』となす。

『擄』てふ言は其名稱單純なれども多くの意味を有す。擄に善き擄ありバ之
 ルは之に就きて『凡の意思を擒にしてハリストスに従はしめたり』(コリント後)とい
 えり。惡しき擄ありバ之に就きて『彼等は罪に溺るゝ婦人を擄にす』(イテロ

三の)といへり、靈的擄あり、イサイヤは之に就きて『俘囚に解放をつげ』(イサイヤ書)とい
 へり、感情的擄あり、是れ敵よりす。然れど第一のものは、他のより難し。何人をか
 擄にせし者は戦法によりて屢々之を優待することあり、縱ひ彼等をして水を汲み、
 薪を割り、馬を追はしむるとは雖も、毫も彼等の靈を害せず、然れど罪の擄となりし
 者は彼を最も耻づべき行爲に強ゆる所の殘忍にして酷薄なる命令者を己に得た
 るなり。此暴君は容赦することなく憐憫むことをもせざるなり。例へば彼は憐
 むべき不幸なるイウダを擄にして之を容赦せず、即ち盜聖者及び買主者となせる
 も、罪の決行されし後には彼をイウダヤ人の前に引出して觀とし、彼の犯罪を暴露
 し、之に悔改を利用するを許さず、唯悔心を起さしめたるのみにて係蹄に導けり。
 罪は不幸なる命令を與へ、罪に服従する者を不虔に服せしむる殘酷なる命令者な
 り。然れば吾人は爾等に訓戒す、吾人は大なる熱心を以て罪の權威を避け、之と戦
 ひ、何時も之と和せざらん、又罪より自由にせられて此自由の中に在らん。イウダ
 ヤ人若し異種族より解放せられて安慰を得たらんには、況て吾人罪より自由にせ
 られたる者は歡喜大悦し、且つ永久に此喜悅を保存せざるべからず、否復び同一な
 る惡癖に陥りて此喜悅を破らす之を穢さる様せざるべからず、『慰められ

たり』とは吾人が平安喜悅快樂に充たされしを云ふなり。『其時我等の口は樂にて盈ち我等の舌は喜にて』(一本には「歌」)満ちたり其時諸民の中に云へるありき、主は彼等に大なる事を行へりと(三節)伊擄より自由にされし後の喜悅は少からず善事に變改するに助く。然れど爾は云はん、何人か此によりて喜ばざるかと。彼等の列祖がエギベトより自由にせられ、彼等に於ける奴隸の境遇を脱して自由にされし時其幸福の中にありて恩を忘れて甚く怨言し、憤り、不満を懷きて常に哭けり。然れど彼等は曰く、吾人は然らず、吾人は喜び樂めばなりと。彼等は喜の理由をも云ふて曰く、吾人の喜ぶは曾に艱難より自由にされしによりてのみならず、之に由りて衆人が神の吾人を照管し給ふことを認むるに由るなり。『其時諸民の中に云へるありき、主は彼等に大なる事を行へり』。爰に此言を反復するは徒然ならず、乃ち彼等が有し、大なる喜を示さん爲なり。或言は異邦人に屬し、而して或言は彼等に屬す。然れど見よ、彼等は吾人を救へり、或は吾人を自由にせり』と云はすして、『大なる事を行へり』と云へり、即ち此言を以て非常なること、奇蹟に充されたる事と言ひ、願さんと欲したるなり。我が屢々言ひし如く、爾は此民の擄となり、及び其擄より還り

し、ことが此民を以て全世界を救へしことなるを見るか。其還りしことは傳道者の代(傳道者の代りに多くの)なりき、何となれば彼等に就きての風評は神の仁愛を衆人に顯しつゝ、到る處に弘布り、又彼等に行はれし奇蹟は眞に大にして且つ異常なりしに由る。彼等を支配せしキールは何人に願はれしにあらず、神は其靈を柔げたるによりて彼等を解放せり、而も單に之を解放せず、多くの賜を與へて解放せり。『我等喜べり。主よ、我等の擄を南方の流の如くに返し給へ』(四節)何故に預言者は聖詠の始に『主がシオンの擄を返し、時』といひ、而して爰に『返し給へ』といひしや。彼は將來に就きて云ふなり。此事に就きては『返し、時』と云はす『返さん時』といひしによりても知らるゝなり。而も此事は其時に始りて凡ては俄かに行はれしにあらず、乃ちイウデヤ人の移轉は一度ならず三回ありしなり。

二。然れば預言者は或は之を言ひ、或は全き救贖のあらんことを祈るなり。多くのイウデヤ人は異種族の國に止まらんことを欲したり、是に由りて彼は熱心に彼等の救はれんことを望みつゝ、『我等の擄を南方の流の如くに返し給へ』といへり、即ち大なる進歩を以て大なる力を以て與奮獎勵して返し給へとの

意なり。或譯者は此事を言ひ顯しつゝ、「小河の如く」(ラアキ)といひ、或譯者は「支流の如く」(マフ)といひ、或譯者は「水の低きに降るが如く」(不明)といへり。「涙を以て播く者は喜を以て穫らん」(節五)。此はイウデヤ人に就きて述べられしことなれども、數々他の多くの場合にも應用することを得。善行は斯くの如きものなり、即ち善行は勞働の代りに賞を受くるなり。是に由りて吾人は前以て勞働疲勞し、然る後安息を求めんことを要す。此等のことは數々世俗の事に於ても見ることを得。然れば預言者は其說話の中に播くことと穫ることとを示せり。播く者は勞働して汗を流し寒氣を忍耐せざるべからざるが如く、善行を修養する者も亦然りとす。安息は人の爲に最も必要なり。故に神は安息の途を細く窄きものとなし、剩へ管に善行のみならず、世俗の事をも困難と伴はせたり、而も後者は一層然りとす。播種者、建築者、旅行者、新制人、職工、其他何人にまれ若し利益あることを得んと欲せば、勞働辛苦せざるべからず、而して種子の雨を要するが如く、吾人には涙を要す。地をば耕し、及び發掘するの要あるが如く、靈の爲にも誘惑と憂愁とは、鋤の代りに必要なり、是れ靈の雜草を生ぜざらん爲に、靈の殘忍を柔げんが爲に、靈の傲慢せざらん爲なり。地も注意して耕さずんば、善きものを産せざ

るなり。然れば預言者の言の意味は左の如し、管に歸りしことのみならず、俘擄となりしことを喜び、此等のことの爲に神に感謝せざるべからず。此は播種にして其は收穫なり。種を播く者は勞働の後果實を利用するが如く、爾等の俘擄となりし時は播種者の如く憂愁、勞働、疲勞、艱難を受け、不順の天氣、戰爭、雨露、寒氣を忍耐して涙を流せり。雨は種子の爲に存するが如く、涙は勞苦する者の爲に存す。然れど視よ、預言者は言へり、彼等は此等の勞働の爲に報賞を受けたりと。斯くの如く預言者が「泣きて種を携ふる者は歎びて其禾束を携へて歸らん」(節六)と言ひしは穀物のことにあらず、聽者をして苦難の中に憂悶せざるべきを勧めつゝ、行爲に就きて云ひしなり。播種者は多くの困難の顯るゝとも裕なる收穫を想像しつゝ、煩悶せざる如く、艱難に遇ふ者も縦ひ多くの悲むべきことに遇ふとも收穫を待ち苦難より生ずる結果を想像しつゝ、煩悶すべからず。吾人は之を知りつゝ、苦難の爲にも安息の爲にも主に感謝せん。縦ひ事情は異るとも凡ては同一にするも、個々別々にするも播種と收穫との如く、一の終結に向けらるゝなり、吾人も亦勇しく且つ感謝して艱難を忍耐し、讚美して安息を受けざるべからず、是れ吾人が光榮權柄の世々に歸する吾人の主イエス Kristus の恩寵と仁

慈とを以て來世の福樂をも受くるに堪へん爲なり。アミン。

第百二十六 聖詠講話

若し主家を造らずば、造る者徒に勞し、若し主城を守らずば、守る者徒に儆醒す。爾等徒に夙に興き遅く寝ね(二節)。

一。此聖詠はイウデヤ人が俘擄より還りたる後の事業の狀態に就きて云ふなり。彼等が俘擄より解放されし後及び異種族の國より還りたる後城邑の破壊され、城壁及び高塔の廢墟となりしを見て之を再興し始めたり、然れど多くの者はイウデヤ人の幸福を嫉み、彼等の安寧を危ふみつゝ、彼等を四方より攻撃して事業を妨害したるにより、斯る事情の中に時日を消費し、聖堂を建立するに四十余年を経過せり。イウデヤ人が「此殿を建つるには四十六年を経たり」(イオアン福音 音二の二十)といひしことはソロモンの建立せし第一の聖堂にあらず、ベルシヤより解放されし後に建立したる聖堂を指せるなり。斯くの如く聖堂城邑及び牆壁城を建築するには最も多くの時日を要せりを建築するに多くの時日を費したるが故に、豫言者は復び神に

趨り就くべきことを彼等に教へつゝ、之を解明してイウデヤ人若し神より佑助を得ずんば、凡てのことの空しく徒然なるを示せり。神の佑助なくんば、雷に聲揚り、解放されざるのみならず、解放されし後城壁を再興することも亦能はざるなり。城壁を再興し、城邑を建造する事は、兎に角若し斯る佑助を有せざれば、その建造及び落成したるものを保存することも亦能はざりしならん。豫言者の之を云ふは、全力を以て彼等を復び神の佑助に向はしめ、彼等が平安なるによりて一層不注意なる者と爲らざらん爲なり。然れば神が彼等に幸福を賜ふや、突然にせず之を慚々徐々にしたるは、速かに艱難より救はれたる後復び以前の不幸に向はざらん爲なり、又其幸福を賜ふ時にも、斷えず彼等の不注意を警告しつゝ、數々敵を攻撃すべきことを彼等に命せり。豫言者の言は一般のことを話されたるなれども、此事件に基づけるなり。實にイウデヤ人を凡ての人々に應用せんことを要す、是れ吾人自らも不注意なる者とならず、無爲に止まらず、吾人に關はることをなし、凡てを神に置き、萬事に於て常に神を待まん爲なり。神の佑助ある時も、不注意にして作動かすんば、終局に達することを得ざるなり。「爾等徒に夙に興き遅く寝ね」(二) 或譯者は「坐することを猶豫す」(ラアキ)となし、或譯者は「坐するこ